

# ありふれてはない元守護者の異世界戦闘録

ギルオード

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夢を見た。祖父のような全ての弱者を救える男になりたかった。走り続けた。あらゆる知恵、力を身につけて弱き者を救い続けた。現実を知った。自身の手からこぼれ落ちる弱者が生まれだした。妥協をした。全ての人間を救えない。より多い方の味方をした。自身の幸せを得た。かつての同輩にあって、付き合い結ばれた。苦悩した。幸せを謳歌していると、切り捨てた者達の嘆きが聞こえ出す。

違いを知った。魔術師として、世界を回っていた自分に子供の接し方が分からなかった。

絶望した。起源が逃れられないと言わんばかりに、アレに襲われた。

誓いをした。もう何も奪わせないと。アレを討つと。

二つの契約をした。人類の守護を。リベンジの協力を。

そして、全てを終わらせました。

これは、そんな男の願った二回目の人生。

だが、呪いは止まらない。

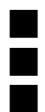
さあ、男よ。

もう一度英雄になるのだ。

# 目次

マテリアル

マテリアル1



サーヴァントマテリアル 天之河光輝

本編

ある男の話

クラス：セイバー

カリスマ

ハイリヒ王国にて

ステータス

戦闘訓練

弱き者

罨

初弟子

勇者の帰還

ケジメ

オルクス大迷宮再び

変容

帝国の使者

暴走

記憶・記録

国王の策略

花鳥風月が似合う侍

剣の極地その一端

想い

92

88

85

81

75

70

65

57

52

49

44

41

37

33

28

23

19

15

13

9

5

1

一時の平穩	97
出陣	107
戦火	114
邂逅	124
決着	132
戦後処理	137
戦勝パーティー	142
前に進むために	147
交渉	154
模擬戦	160
神々の試練	166
番外編	
番外 バレンタイン	172
番外 ハジメサイド	181

## マテリアル

### マテリアル 1



真名



性別

男性

身長

222 cm

体重

190 kg

特技

戦争

好きな物

家族・敵との決闘

苦手な物

自分

天敵

本体の姉、人間

出典

ギリシャ神話、平行世界の史実

地域

ギリシャ、日本

属性

秩序・善

隠し属性

天

一人称

俺／私

二人称

お前／あなた／呼び捨て

三人称

彼／彼女／奴／呼び捨て

人物

蒼い髪に所々に黄金の髪が混じっている髪で、質素な感じだが、豪華で煌びやかにもしつかり見える不思議な服を着た青年。

自身を軍神や戦神の化身と呼び、その言葉に違わぬ力を持つ。

勇猛でもあるが冷静冷徹。

戦いに誇りを持っており、勝つことを目標にしているが、自身が策を練ることを決してしない。

ただ、自分のルールを相手に押し付ける真似は決してしない。

実はジャイアントキリングが大好き。

するのも、されるのもである。

戦うことしかできず、救うことが出来ない自分がこの世で一番嫌いだ。

能力

あらゆる武器を扱えるが基本的に剣を使う。

また、魔力を放出して遠距離戦を行うこともできる。

また、実用的な技を使うため、動きは粗く汚く見える。

ステータス

筋力 耐久 敏捷 魔力 幸運 EX 宝具

弟子たる私の力不足で比較は出来ません。

クラス別能力

対魔力 A

騎乗 A+

保有スキル

神性 A

軍神や戦神の化身としての側面。それが表に出ているためにこのランクになっている。

軍神のカリスマ A+

戦闘面に特化しており、軍隊の統率に優れる。

国家経営となるとC〜B位にランクが落ちる。

心眼（真） A

軍神としての基礎。戦場や戦闘の流れを完全に把握する。

炎の紋章 EX

軍神の紋章が天之河光輝が嵌まっていたゲームの影響によって改名された。

魔力を流し込み、魔力放出より燃費の良い強化が可能。瞬間火力は下回る。

魔術の行使も行えて、火星の概念も入っている。

武の祝福 C+

あらゆる武器を使用できるが、美しい型をしようとするためになる。

魔眼 A+

ランク黄金の魔眼が神通力と混じり合って自己進化したもの。

見た者の生命力、魔力、幸運を吸い取り、魅了まで行う。

吸い取った生命力、魔力、幸運は自分のものにできる。  
また、相手の過去、未来、思考を読み取る事が出来る。  
高ランクの千里眼の能力も複合されている。  
Bランク以上の対魔力を持っていないと貫通する。

宝具

ゴッデス・オブ・ウオー  
戦神の軍帯

ランク：A


種別：対人／対城宝具

レンジ：1

最大補足：1人

アレスの分体である軍章旗を帯の形に直したもの。使用者の神性と筋力、耐久、敏捷、魔力の値を大きく引き上げるが、一定以上の引き上げは現代社会の神秘の薄さでは使用できない。

トータスではワンランク分の上昇ボーナスがある。

また、天之河光輝が使用すると、に変化する。

ファイアーエムブレム  
紋章の盾

ランク：EX

種別：結界宝具

レンジ2～80

最大捕捉：500人

盾に刻まれている紋章が宝具である。

悪しき者を封じる力と、自身の守るべき者を守り通す結界を生む力を持つている。

意識が落ちると、遮断の結界をはり、対象の命を守る。

また、担い手が対象者を盾の中へ連れ込むことができる。

対象の治癒力の向上や魔力回復力も上げる。

自身が入ることの出来ない全て遠き理想郷バージョン。

また、盾の中は融通が利き、盾に相手の攻撃を吸わせても、中にいる人にダメージを与えない様に出来る。

更に自身の敵を閉じ込めて、内部で殺すこともできるため、全て遠き理想郷と違って凶悪な使い方もできる。

本質的には空想具現化ではないかと言われている。

未だ幾つかの宝具を隠し持っているぞ！

このぐらいの情報ならば、渡した所で何の問題はないからな！  
彼奴が見せた片鱗で、見せたくない所は消してあるからな！



## サーヴァントマテリアル 天之河光輝

真名	天之河光輝
性別	男性
身長	182cm
体重	75kg
特技	運動全般
好きな物	妻の手料理、子供とのゲーム勝負、狐
苦手な物	自分を含む魔術師
天敵	アルテラ、エミヤ
出典	平行世界の史実
地域	日本
属性	秩序・悪
隠し属性	人（星）
一人称	俺
二人称	お前／あなた／呼び捨て
三人称	彼／彼女／あの人／呼び捨て

### 人物

黄金の胸当てに着物を羽織っている茶髪の男。

和洋中とあらゆる物事に精通しており、何でもこなす絵に描いたような才人。

善良なるものも悪しきものにも分け隔てなく接する。

その時代の法や秩序を乱さない限りは、誰であっても肩入れする。

それでも尚、問題が起これば自分の力で解決をする。

聖杯に託す願いはあるものの、自分の願いは生きている者への冒瀆であることを理解しているため、自身の願いは基本的に後回しにする。

天之河光輝がセイバーのクラスで召喚されるのは異例の中の異例であり、本来ならばキャスターのクラスで召喚される。

基本的にマスターの命令には逆らわないけれど、魔法やそれに類す

るものを確認したときは、多少の無茶をするので、聖杯戦争の時ならば令呪を使うことを考えて良いだろう。

能力

星の聖剣と神々の剣、両方の性質を持つ剣を軸に戦う。

本来のセイバークラスならば、使用出来ない宝具も、今回の召喚ではマスターの実力の高さや相性の良さ、星から少しのバックアップを受けている事によって、通常よりも魔力を使うことで扱うことが出来ている。

ステータス

筋力B 耐久A 敏捷C 魔力C 幸運EX 宝具A++

クラス別能力

耐魔力C+

呪術などに対してボーナス判定が入る。

騎乗A+

神獣に跨がり戦場を駆け巡っていたため、このランクで所持している。

保有スキル

神性C

本来ならばもっと高いはずだが、時代が時代であり神秘が薄かったためランクが低くなっている。

軍神のカリスマA+

戦闘面に特化しており、軍隊の統率に優れる。

国家経営となるとC〜B位にランクが落ちる。

神の教えA

英雄に必要な戦闘系のスキルを全てCランクで使用できるほか、啓示スキルをAランクで使用できる。

また、自身の味方にスキルのランクは下がるものの教えることが出来る。

希望の灯火A

戦闘続行の派生。人類最後の希望の光として、けして折れない意思。

致命傷を受けても戦い、疲れを感じず、どんな状態でも実力を100パーセント発揮できるようになる。

このスキルが発動すると、仮に令呪を使ったとしても傷は癒えず、髪は白く肌は焼けだす。

目標達成と同時に座へ戻るか、全身の肌が焼け髪が全て白髪になって一時間後に強制的に座へ帰還かの二択になる。

魔眼 A+

ランク黄金の魔眼が神通力と混じり合って自己進化したもの。

見た者の生命力、魔力、幸運を吸い取り、魅了まで行う。

吸い取った生命力、魔力、幸運は自分のものにできる。

また、相手の過去、未来、思考を読み取る事が出来る。

高ランクの千里眼の能力も複合されている。

Bランク以上の対魔力を持っていないと貫通する。

宝具

神スと星ターとを繋ぐロー人柱ド

ランク：EX

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

文字通り、天之河光輝の人生を象徴する言葉。

この宝具を発動すると、■■■■へと変貌する。

ただし、抑止力が働いたため、通常は使用出来ない。

偽フりし神アルと星シの剣オン

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1〜100

最大捕捉：1000人

世界最古の剣であり、人類を救済する剣と偽り祭り上げられた剣。

文明が崩壊し、幻想の住人達が蘇りつつあった世界で、神秘を味方

に付けたかった光輝が用意した苦肉の策でもあった。

人々の絶望と救済の声に軍神マルスと大神オーディンの力を借り

受けている光輝が産み出した剣。

星の聖剣でありながら、当初は輝いていなかったが、光輝がこの剣で幻想のものを倒して人類をまとめ上げて遂に完成した剣。

蘇ったブリテンの白い竜、アルテラを殺している神秘殺しの剣である。

失われた大神の瞳

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

神話において失われてしまったオーディンの眼そのもの。

妹であるミルが命を落とすときに託した。

忘れないで覚えていて欲しい、一緒に綺麗な景色を見続けたい。

その願いの元移植された瞳。

その力は未知数であり、光輝自身十全に扱えていない。

この眼を持っていることによって、失われたルーン文字全てを使う

ことが出来る。

戦乙女の心臓

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1人

責任を持つ母であり、無知で頼り無い姉であり、どうしようもなく時代遅れな女で、初恋の人で初めて愛情を捧げた相手だった。

機能不全に陥り、死の間際になったときに彼女が残した神秘の塊。

これにより、生前は神代の英霊に匹敵しうる力を手にした。

この宝具により、一度だけ蘇生することが可能である。

この宝具を使うと、髪は伸び金色に染まり、声も高くなり、女性に近づく。

## 本編

### ある男の話

焼き払われた荒廃した土地に男と女がいる。

男は白の髪に焼けた肌を持つている。

男の体は傷つき果てている。

普通の人間ならば即死しているような怪我も沢山ある。

男の横には剣が突き刺され動かなくなった女がいる。

女は銀の髪に褐色の肌をしており、ぱつと見兄妹に見えないことはない。

「やつと、やつと終わったよ。皆、俺は人類を世界を救ったんだ」

そう、殺人現場と見られても可笑しくは無い。

しかし、観客は周りにいない。

こんな異常事態なのだが、人が見当たらないのだ。

そして、その男の頭上に光が差し込む。

男は気づき、顔を上げる。

「契約はここに完了した。星よ、人理よ、我が願いを叶えたまえ」

その男が望んだ物は

アラムが鳴り響く。

酷く懐かしい夢を見た。

ああ、まるで逃れられない定めと言わんばかりに鮮明に思い出してしまう。

今の自分自身を見て、改めてあの景色が夢だということを受け入れ

る。

十七年も生きているのに、時折あの夢を見るたびに、生前のことを思い出す。

洗面所に行き、顔を見る。

苦痛で歪んだ顔を見る。

「こんな顔では、学校に行けんな」

と呟いていた。

「えっ！お兄ちゃん今日学校行かないの!？」

妹が聞いていたようだった。

「いや、ちゃんと行くからね」

と苦笑いして答える。

生前の俺が知らない妹。

彼女の存在があると言うことが、今の俺には救いになっている。

父と母に挨拶をして、朝食をとってから、家を出る。

一度スイッチが入れば、天之河光輝を演じきれる。

本来の自分を隠して、周りが望む理想の光になれる。

生前から学んだことだ。

「よう！光輝、おはよう」

彼は坂上龍太郎。

天之河光輝の大親友だ。

河川敷で喧嘩をしたこともある位には、付き合いがある。

ガツチリした肉体を持っており、ただの殴り合いならば、今の俺の方が不利だ。

「おはよう、光輝くん」

彼女は白崎香織。

幼なじみで、学校では、二大女神ともてはやされている。

絶賛初恋中だ。

「光輝、おはよう。部活と勉強で忙しいとは思うけど、偶には道場に来てくれないかしら。お爺ちゃん寂しがっていたわ」

彼女は八重樫雫。

二大女神の片割れで、実家は道場をやっている。

俺も中学時代までは、毎日通っていたが、部活と勉強を両立しているため、そこまで纏まった時間が取れず昔のように通えていない。

昔は俺に恋愛感情があったようだが、今は不明だ。

俺が探りを入れる気がないのもそうだが、雫は本音を隠すのが下手ではない。

そして、彼女の祖父、鷺三さんは個人的には一番楽しい人だ。

あんな生前を経験してしまい、争いは嫌でも戦う事は嫌いではない。

そんな自分からしたら、鷺三さんとの戦いは凄く楽しい。

「今度のテスト期間前に部活が休みだから、部活の時間分はお世話になりますと伝えといてくれないか」

「ええ、わかった」

そんなやり取りをして、学校に到着した。

教室に着いたとき、不意に立ちくらみが起きる。

「つと、危ねえな！どうした光輝」

「ありがとう、龍太郎。少し、夢見が悪くて睡眠時間が足りていないみたいだ。少し、席で休ませて貰うよ」

「お、おう。じゃあ、あつちで話しとくわ」

「気遣いありがとう」

こういう気遣いがさらつと出来ることが、龍太郎の良いところだ。それよりも、自身の身に起きたことに驚きを隠せずにいる。

他者の魔力が流れている。

誰かと契約が結ばれている状態になっている。

それも、とても薄い。

上履きで隠れているが、足の指数本は霊体化している。

なんとか、立ち上がった、一番近くにいた雫に話しかける。

「ごめん、雫。先生に光輝は熱で欠席って伝えといてくれ。ちよつと体が重くなってきたから、動ける内に帰る」

「え、ちよつと光輝！顔真つ青よ。大丈夫！」

「あまり、よくないから、家に帰るんだよ。ちよつと、一休みしたら家に帰れそうにないから」

そう言つて教室を飛び出した。

家に帰る途中に、人の居ない河川敷に来た。

もう、体が持たないと分かつてしまった。

確率は低いとは言え、本当にサーヴァントと呼ばれるとは。

そして、俺は地球から飛び立った。



## クラス：セイバー

「サーヴァント、セイバー召喚に応じて参上した。如何なる命令だろうと戦士として応じよう」

呼ばれた場所は、少し懐かしい香りがするが、全体的に薄い場所だった。

そこには俺よりも歪な存在がいた。

「これが、サーヴァント。おお、私よりも完成されている器が呼ばれるとは！これこそが上位世界の神か！」

彼は俺を神と言った。

確かに、俺は彼よりも格が上だ。

だが、俺は神では… 本体では無い為、それを伝える。

「興奮しているところ悪いが、俺は神本体では無い。所謂化身という奴だ。力の行使はできるが、あまり過度な期待はしないで欲しい。受肉しているため、純粋なサーヴァントよりは出力は向上しているが、全盛期にはほど遠い」

だが、彼はそんなことは気にしていないようだ。

「素晴らしい。これで全盛期末満というのか！これは、勇者召喚の儀が楽しみだ！」

勇者召喚… 興味深い単語だ。

だが、その前に聞かなければならない事がある。

「マスター、お前の名前を聞かせて欲しい。そして、どう呼べば良い？」

「私としたことが、興奮が勝ったようだ。エヒトルジュエ、エヒトルジュエという名だ。周りからは神エヒトと呼ばれる。好きなように呼んでくれたまえ」

「では、好きなように呼ばせて貰う。エヒトルジュエ。周りに人が居ないときは呼び捨てにさせて貰う。互いに都合がよくないときはマスターと呼ぶ。これで問題はあるまい」

「ああ。早速一つ頼み事をしてもいいか？」

「無論だ。■■の名にかけて、あらゆる任務を全うして見せよう」

「これを見て欲しい」

そう言ってエヒトルジュエは簡単な地図を見せてくる。

「私は世界を回す傍ら、このように勢力を動かして戦争を繰り返させている。その命の輝きで万能の器を作るために。そして、そろそろ最終フェイズに移りたい。しかし、今人類は弱すぎる。魔族が本気を出してしまつたら、物の数日で滅びるほどには。そのため、彼等に強くなって貰うのと同時に、一緒に強くなってくれる切り札を用意してある。君には、駒同士の潰し合いがゲームになれるまで、人類に寄り添っていて欲しい。構わないか？」

「まあ、良いだろう。■や他の奴らの様にそういう楽しみがある事も知っているし、俺にも一定の理解はある。まあ、動くのが好きだから、乱していたわけだが。そういうことならば任せろ。天之河光輝は人類のために戦う事に躊躇はしない男だ」

「よろしく頼むよ。セイバー、ア、天之河光輝」

そう言って、彼が喋り終わると、指を鳴らす。

そして、俺は騒々しくしているクラスメイト達の手段ど真ん中に突き落とされた。

「いっつっ！ああ、ここは何処なんだ」

白々しい態度をとる。

『こっつ、こっつ、光輝くくく!!』

『あつ、あつ、天之河くくく!!』

二つの声が重なり合って響いた。

## カリスマ

「おお、最後の一人が現れましたか。トータスへようこそ勇者様。ご同胞の皆様には紹介しましたが、改めて自己紹介を。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシユタル・ランゴバルドと申します。以後、よろしくお願い致しますぞ」

そう言っただけでイシユタルと名乗った老人が黒い感情を胸に押し止めながら微笑みかけてきた。

聖教教会・・・それはマスター、エヒトルジュエを主神とするこの世界の宗教だ。

つまり、今の俺にとってはとても都合の良い相手でもある。

「ご丁寧にありがとうございます。お、私は天之河光輝と言います。確かに私は、神エヒトに世界を救ってくれと言われました。出来る限りのことはしますが、具体的に何をすれば良いのでしょうか？」

言われなくても分かるが、俺はここに来たばかりだ。

それに、間抜けを演じた方が、向こうも警戒心を高めて行動はしてこない。

「うむ、分かりました。ですが、話は長くなりますので、場所を移しましょう」

そう言っただけで、イシユタルが移動し始める。

皆がそれに恐る恐るとついて行く。

案内された場所はいくつもの長テーブルと椅子が用意された場所だった。

一人ずつ椅子に座らせられ、全員に飲み物が行き渡ると、イシユタルは語り出す。

その内容は、物語にはありふれるような内容だった。

この世界には、人間、魔人、亜人の三種族がいて、長い間人間と魔人は争い続けた。

しかし、魔人が魔物を使役できるようになり、数的有利も無く

なった人類に勝機は無くなってしまった。

そこで、神エヒトが人類を救うために、勇者召喚を促した。

「あなた方を召喚したのは、エヒト様」です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためあなた方を喚ばれた。あなた方はこの世界よりも上位の世界の人間です。あなた方はこの世界の人間よりも優れた力を有しているのです」

そこで一度言葉を切り、イシユタルが力強く言い放つ。

「あなた方には是非その力を持って、我ら人類を救って頂きたい！」

しかし、その声に待ったをかける人がいた。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようってことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のこととはただの誘拐ですよ！」

愛子先生だ。

二十五と教師としては若いのが、生徒一人一人に真剣に付き合う、その姿勢はとても好ましい先生だ。

体も小さく、経験も浅いため、よく努力が空回っているが、生徒と同じように一歩ずつ成長して行っている。

校内の先生方の評価も高い。

人として、本当に尊敬している人だ。

そんな先生が、一人で子供達のために立ち向かった。

しかし、次の一言で、皆が絶望に陥る。

「お気持ちはお察しします。しかし…あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見る。

「ふ、不可能って…ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

先生が叫ぶ。

当然だろう。

あまりに理不尽で仕方がない。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんが、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そ、そんな・・・」

先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ？ 帰れないってなんだよ！」

「いやよ！ なんでもいいから帰してよ！」

「戦争なんて冗談じゃねえ！ ふざけんなよ！」

「なんで、なんで、なんで・・・」

パニックになる生徒達。

だが、それは当然のことだろう。

自由に呼べて還せるのなら、人類はここまで追い詰められることは無い。

呼びつけて、都合よく魔力が足りないと言い、戦わせて、軌道に乗ったあたりで還せるが、と問う。

そうやって使い続けることが出来るからだ。

それをしないで、こんな状況になっているのなら、当然還す方法などない。

イシユタルの方を見ると、イシユタルは特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。

このままでは、エヒトルジュエからの任務が遂行できない。

カリスマスキルを使った芝居を打つとしよう。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだつてどうしようもないんだ・・・俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない・・・イシユタルさ

ん？どうなんでしようか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いは無下にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？　ここに來てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざつと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

拳を握りしめ、天井に向かって突き上げる。

言葉には出せないが、安心して欲しい。

■の名において地球の子らは誰も死なせない。

エヒトルジュエも、器に入らない魂の生死には興味は抱くまい。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。…俺もやるぜ？」

「龍太郎…」

「今のところ、それしかないわよね。…気に食わないけど。…私もやるわ」

「雫…」

「え、えつと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織…」

彼等が着いてきてくれるのなら、芝居は成功と言えるだろう。

これで、エヒトルジュエの願いに一步近づけるだろう。

## ハイリヒ王国にて

戦争参加の決意をした以上、皆は戦いの術を学ばなければならぬ。  
い。

いくら規格外の力を潜在的に持っていると言っても、元は平和主義にどっぷり浸かりきった日本の高校生だ。

いきなり魔物や魔人と戦うなど不可能である。

その辺の事情は当然予想していたらしく、イシュタル曰く、この聖教教会本山がある【神山】の麓の【ハイリヒ王国】にて受け入れ態勢が整っているらしい。

王国は聖教教会と密接な関係があり、聖教教会の崇める神——創世神エヒトの眷属であるシャルム・バーンなる人物が建国した最も伝統ある国ということだ。

国の背後に教会があるのだからその繋がり**の強さが分かるだろう。**  
個人的にはそういう国は強い。

いわば、この世界の神が守っているように感じ、人は全力で生きていくからだ。

そう考えている内に、イシュタルが魔法を発動させて、ハイリヒ王国に到着していた。

美しい意匠の凝らされた巨大な両開きの扉の前に到着すると、その扉の両サイドで直立不動の姿勢をとっていた歴戦の兵士二人がイシュタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事も待たず扉を開け放った。

イシュタルは、それが当然というように悠々と扉を通る。多くの生徒達は恐る恐るといった感じで扉を潜った。

当然俺は、堂々と歩く。

扉を潜った先には、真つ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に豪華ごうしやな椅子——玉座があった。玉座の前で覇気と威厳を纏った初老の男が立ち上がって待っている。

その隣には王妃と思われる女性、その右隣には十歳前後の金髪碧眼の美少年。

国王の右側には十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていた。

更に、レッドカーペットの両サイドには左側に甲冑や軍服らしき衣装を纏った者達が、右側には文官らしき者達がぎつと三十人以上並んで佇んでいる。

しかし、此処にいるのは全員ではない。

一番強く、賢い男がいない。

俺はこの気配をよく知っている。

なぜ、地球の英霊が此処にいるかは分からない。

だが、間違いなく城内に彼はいるはず。

向こうからは、気づかれないだろうが、暗躍の難易度は俺の予想を遙かに超えてしまった。

これは、一度エヒトルジュエと話すべきだろう。

玉座の手前に着くと、イシユタルは俺達をそこに止め置き、自分は国王の隣へと進んだ。

そこで、おもむろに手を差し出すと国王は恭しくその手を取り、軽く触れない程度のキスをした。どうやら、教皇の方が立場は上のようなのだ。

当たり前のことだ。

宗教という物は強い力を持っている。

失地王の歴史からも分かるが、基本的に教皇の方が権威がある。

特に宗教が少ないこの世界では尚更だろう。

そこから先はただの自己紹介だ。

国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。

金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

後は、騎士団長や宰相等、高い地位にある者の紹介がなされた。ちなみに、途中、美少年の目が香織に吸い寄せられるようにチラチラ見ている。

残念なことに、彼の恋は無惨に終わるだろう。

その後、晩餐会が開かれ異世界料理を堪能した。



見た目は地球の洋食とほとんど変わらなかったが、たまにピンク色のソースや虹色に輝く飲み物が出てきたりしたが非常に美味だった。ただ、俺としてはもう少し雑な物の方が良かった。

ランデル殿下がしきりに香織に話しかけていたのをクラスの男子がやきもきしながら見ているという状況もあった。

少し微笑ましいと思ってみていた。

それが癪に障ったのか、一方的に嫌われてしまった。

王宮では、皆の衣食住が保障されている旨と訓練における教官達の紹介もなされた。

教官達は現役の騎士団や宮廷魔法師から選ばれたようだ。

いずれ来る戦争に備え親睦を深めておけということだろう。

そして、一人ずつに付き人と部屋を用意されていた。

俺は、早速エヒトルジュエと連絡を取り合う。

そのために、魔術を使い、付き人に軽く催眠をかける。

『天之河光輝は既に就寝した。誰が来ても、明日に訪ねるようにと』

実験も兼ねていたが、上手くいったようだ。

そして、意識をエヒトルジュエの居るところまで飛ばす。

「エヒトルジュエ。一つ訪ねたい」

「なんだい、セイバー？」

「お前は、この地に俺以外のサーヴァントが呼ばれていることに気づいているか？」

「…………… ああ。私が呼び寄せてしまったからな」

「その言い分で大体のことは予想できる。だが、そういう情報は隠さないで欲しい。危うく返り討ちに遭うところだった」

「詳しく問い詰めないのかい？」

「聞いて欲しいのなら聞くが、それは嫌なのだよ。少なくとも今は俺とて生前のことをペラペラと語りたいわけではない。人には聞かれたくないものがあることぐらいは知っている。お前が話すべきと思ったときに話してくれればそれでいい。ただ、戦場に影響が出そうな内容は隠さず伝えて欲しい。お前を守り切れなくなる」

「ま、守る。私を？この私を？世界をチェス盤に見立てている私を？」

「当然だ。お前が善であろうが悪であろうが関係ない。マスターになつたお前を、サーヴァントである俺が守るのは当然のことだ。神という存在のことを俺はよく知っている。お前は純粹な神とは違うが、それはそれとして、魔術師としては普通な視点だ。それに、触媒無しでの召喚は相性が良い者が呼ばれる。俺とお前はどこか似たり寄つたりの部分が少なからずあるわけだ。故に見捨てる気もそうそう無い。信じないというならば、今ここに誓おう。我が身は御身を守る剣となり、盾となることを」

「わ、わかつた！わかつたから！恥ずかしいことは言わないでくれ。実体があつたら、顔を真っ赤にしているぞ。そんなことを良くスラツと言える。貴様の故郷の者は皆がそうなのか」

「さあ、どうだろうな」

身近に対等の相手が居なかつたからか、エヒトルジュエは口説き耐性が著しく低い。

このことが分かつたのは収穫だろう。

「呼ばれたサーヴァントは確認できているところだと六体だ。場所が割れているのはハイリヒ王国のランサーと、ヘルシャー帝国のバーサーカー。あと、亜人族のために帝国に反抗運動をしているセイバーだ。後は日に日に転々としている」

「それだけでも、十分だ。後はこちらでどうにかする。お前の願いが何であれ、叶えるために、また命を守るために戦うのがサーヴァントであり、戦士としての俺の宿命だ。貴様が命じれば、サーヴァントも討ち取ってみせるが？」

「いや、今は良い。彼等のおかげで、戦おうとする人々も増えている。彼等との決着はまだ先のことだ。今は人類の切り札を鍛え上げるのを見守っていて欲しい」

「了解した。では、そろそろ戻る」

そう言つて俺は退場した。

そして、翌日から訓練と座学が始まつた。

## ステータス

朝早くから、城の中庭に集められる。

集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。

不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

騎士団長が訓練に付きつきりでもいいのかという質問が上がったが、対外的にも対内的にも「勇者様一行」を半端な者に預けるわけにはいかないということらしい。

金の卵をその道のプロフェッショナルの中でも、上の部類の者が鍛え上げるのは効率も良い。

メルド団長も、「むしろ面倒な雑事を副長に押し付ける理由ができて助かった!」と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫なのだろう。

もつとも、副長は大丈夫ではないかもしれないが……

「よし、全員に配り終わったな?このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ?」

非常に気楽な喋り方をするメルド団長。

彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうってのに何時までも他人行儀に話せるか!」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいだ。

優秀な指揮官だ。

こういう人があの時居てくれればと思ってしまう。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。『ステータスオープン』と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ?そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト?」

アーティファクトという聞き慣れないであろう単語に俺が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた時代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

なるほど、と領き生徒達は、顔を顰ながら指先に針を刺し、浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。

すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。

俺は、この世界の魔術、否、魔法に興味があり、解析するまえに使うのは忍びなかったが、同じようにする。

すると…

天之河光輝 十七歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解・霊基解放・継承

と表示された。

霊基解放はサーヴァントになることだろう。

そして、それを使えば、受肉の状態も終わる可能性が高いだろう。

あの時、肉体が消滅した俺が、何故か受肉している。

それに関係している可能性が、高いだろう。

サーヴァントの状態を見ようとしたら、龍太郎に肩を組まれる。

「光輝！お前はどうかだったか？俺は拳士だぜ」

と喋って見せてくる。

坂上龍太郎 十七歳 男 レベル：1

天職：拳士

筋力：120

体力：120

耐性：70

敏捷：60

魔力：35

魔耐：35

技能：格闘術・縮地・物理耐性・全属性耐性・言語理解

「光輝すげえな！何処でも戦えるじゃねえか！だが、殴り合いならまだ俺の方が上だな！」

「言ってる、龍太郎。直ぐに追い抜いてみせるさ！」

そうやって話している内にメルド団長からステータスの説明がなされた。

「全員見れたか？説明するぞ？まず、最初に“レベル”があるだろう？それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

どうやら昔、友人に誘われて暇つぶしにやっていたゲームのように、レベルが上がるからステータスが上がる訳ではないらしい。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大解放だぞ！」

魔物を倒す以外でも、ステータスの上げ方は当然あるらしい。

でなければ、訓練の意味があまりない。

「次に『天職』ってのがあるだろう？それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが…百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

勇者は当然少ない方だろう。

というよりも、勇者が他にいた方が…

ああ、その為の継承か。

詳しく見てみる。

【継承】この世界の住人に天職とステータスの一部を継承させる事が出来る。

確かに、平等なゲームが好きな奴だ。

「後は…各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！全く羨ましい限りだ！あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

メルド団長がそう告げると、俺は一番に持って行く。

皆も期待している。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か…技能も普通は二つ三つなんだがな…規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは…」

メルド団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。

レベル1でこの人の三分の一までステータスがあるのは、周りの騎士からすれば、面白くないだろう。

また、技能⇨才能である以上、先天的なものなので増えたりはしないらしい。

唯一の例外が「派生技能」と呼ばれる物だ。

これは一つの技能を長年磨き続けた末に、いわゆる「壁を越える」に至った者が取得する後天的技能である。

簡単に言えば今まで出来なかつたことが、ある日突然、コツを掴んで猛烈な勢いで熟練度を増すということだ。

俺にはそういう経験は無いが、俺にゲームを勧めた教授の生徒はメキメキと実力を付けていた事実があるため、嘘ではないだろう。

その後は、南雲ハジメという、香織が惚れている男がステータスが低く、小物から弄られていたが、問題は無いだろう。

一年の夏ぐらいまでは、俺は平凡で不自由が無く縛られない学校生活を送るなら、努力の方向性が間違っているという指摘をし続けた。

が、言つて聞かないならば、もうどうでもいい。

好き嫌いではなく、興味が無い。

彼がどうなるうが、どう転ぼうが自業自得だ。

それに…

「こらー！ 何を笑っているんですか！ 仲間を笑うなんて先生許しませんよ！ ええ、先生は絶対許しません！早くプレートを南雲君に返しなさい！」

行き過ぎれば、庇う相手も出てくる。

問題はその相手が少なすぎるのだが、ゼロではないだけマシだろう。

「おい！これから武器を扱う訓練をするんだからな！悪意を持って無闇矢鱈に攻撃するんじゃないぞー！」

その声を皮切りに、訓練が開始された。

## 戦闘訓練

まず、全員がそれぞれの天職に合うような武器を握る。

俺はこの世界の聖剣の担い手になった。

天職が影響しているのか、どんな武器よりも手に馴染む。

剣道をしていたことで、綺麗に斬ることが出来ているため、体を動かしていた組の訓練はすんなりと進んでいった。

俺は、騎士との模擬戦を延々と行っていた。

皆の身体能力は上がっているが、俺は寧ろ衰えている。

サーヴァントではないのもそうだが、今の天之河光輝の肉体でも、死徒や代行者に遅れはとらない。

全力で戦闘をすれば、短時間ならば埋葬機関のメンバーとも正面切って渡り合える。

恐らくだが、このレベルという物が障害になっていて全力を出せずにいる。

また、この世界の魔力と地球の魔力は違うらしく、魔術回路にも負荷が掛かっている。

だが、そのおかげで助かっているのは、魔眼が機能していないことだ。

サーヴァントに戻ってから、魔眼が再発しているが、魔眼も独立しているが魔術回路である。

異なる性質の魔力によって、力が行使できずにいる。

ただ、使おうと思えば使えるし、魔術回路を活性化させたら、魔眼も自動的に働き出す。

これは本当に良かった。

自分の肉体のメンテナンスを朝にして初めて気づいたことだからだ。

そのまま働いていたらと思うとゾツとする。

とにかく、今の俺は思考と肉体のバランスが取れていない、危険な状態だ。

こんな状態で実地訓練に参加する羽目になったら、死にはしない



が、大きな怪我をすることを考えておかないといけない。

そして、模擬戦が終わる。

騎士との模擬戦は、一緒にやっている雫や龍太郎よりも勝率が低い。

そして、一日目の訓練が終わり、座学の時間も無事に終わり、夜の晩餐が行われる。

ガシツと肩をつかまれる。

「ようつ光輝！今日の勝負は俺の勝ちだな！」

「今に見ているよ！直ぐに追いついて、そのまま追い抜いてみせるさ」  
「それでこそ、光輝だ。だが、俺はその先を行くぜ！」

実際に龍太郎の徒手空拳は凄い。

ただ、それ以上に、ハイリヒ王国に徒手空拳の達人がいないのも勝因を占めているだろう。

拳が弱いわけではないが、剣や槍、弓に鈍器を使った方が、効率が良い。

拳主体の戦士が中々いなかったのだろう。

「貴方たち、そこで何話しているの？」

「おつ、雫。流星は道場娘だな！模擬戦の勝率クラスー！」

「それでもないわよ。メルドさんには勝てなかったし」

「ああ、あの人強えよな。俺も手も足も出なかったわ」

「ええ、私も駄目だったわ。でも、気づいている、龍太郎。そのメルドさんと一番長く戦えたのは光輝よ。私たちの中で一番勝率は低いけれど、試合の立ち回りは流星の一言に尽きるわ。負けない戦い方が本当に上手ね」

そうやって、雫が言ってくる。

「あはは、それはそうだよ。雫とか鷲三さんとか師範とか強い人とかかり稽古していたからね」

「稽古ねえ。お爺ちゃんやお父さんと戦っているときの光輝は私とは戦わないのはどうしてかしら？」

根に持たれる。

魔術回路を使わない生身の戦いで、フルスペックで戦える相手に雫

が入っていないのを感じて読まれているのだろう。

「えっと、それは…」

「そりゃあ、雫みてえな可愛い奴を怪我させたくないからだろ？」

「龍太郎、ハウス」

「な、なんでえ〜！」

「龍太郎、それは逆鱗だろう、真面目に。」

雫はため息を吐いた後に、しゃべり出す。

「もういいわよ。でも、今日の光輝はなんか、違和感を感じたわ。怪我をしたわけではないのに、庇うような…。難しいわね。とにかく、動きにキレを感じなかったわ」

「えっと、向上した動体視力に体が追いついていないんだ。それで、少しチグハグになっていたのかもしれないな」

嘘だ。

ただ、身体能力が衰えているから、そう見えるようにはなっていないだろう。

「そう。早く直しなさいよ。ある程度経ったら生徒同士の模擬戦もあるんだから。それまでに直していなかったら私や龍太郎にボコボコにされるわよ」

「それまでには、直してみせるさ。ところで、香織は？」

「あそこ」

彼女は南雲ハジメの所にいた。

恐らくアタックしている所だろう。

周りの視線は凄まじい事になっている。

御愁傷様と言いたいところだが、この晚餐には、偉い貴族やその子供とかもいる。

そんな奴らにまで、睨まれるのは不憫だな。

…仕方ない。

貴族様にも挨拶しに行かないといけないしな。

「香織、何時までも南雲にひつつくなよ。彼も迷惑している。それに、香織の親切を無下にする奴の相手なんかしなくて良いよ。そんなの俺が許さない。ほら、向こうでいつもの皆で、挨拶回りに行こう」

「えっ、私が南雲くんといえるのに、光輝くんは関係ないよね？それに、挨拶はまだ早いと思うよ？」

出来れば察して欲しかった。

よく、南雲くんは鈍感と幼馴染みの女集は言うが、負けず劣らずの鈍感だと思うぞ。

少なくとも香織は。

今もクスクスと笑われる。

まあ、貴族の興味がこちらに向き出したのは良しとするか。

「香織、君は少し、自分の人気を知った方が良い」

「えっ？」

「それに、無理強いしていると、南雲に嫌われるぞ」

この言葉が聞いたのか、直ぐに了承して着いてきてくれた。

お偉いさんに勘違い間抜けナルシストの彫り込みが出来たのを成果と喜ぶべきだろう。

そして、挨拶も終わり、晩餐会は終わりを迎える。

夜。

皆が寝静まる頃、俺は入り口にしか見張りがいない、訓練場で魔術回路を総動員して稽古をしていた。

普通のフルスペックが何処まで持つかを確認しなければいけない。

そして、あのサーヴァントとの接触も凶った。

流石に、あのサーヴァントも、この世界にない魔力を確認したら、こちらに来ると思った。

暗躍をしていて、招待がバレるよりも、最初に誤認させた方が良さだろうと、俺が判断した。

そして、目論見は成功する。

「へえ、これはとんだくせ者だねえ。オジサンも騙されたよ。ただの道化かと思っていたよ。勇者、天之河光輝」

ヘクトール。

トロイア戦争において、トロイア側の最大戦力。

文武両道の秀才で、將軍であり政治家。  
危機を察した星が出した保険。

■■■は敵でもあり、味方でもあった。  
靈基が異なるため、彼は気づけないだろうが。

「ええ、俺も驚きました。まさか、サーヴァントがこの星に呼ばれているなんて。もしかしくなくても、抑止力としてでしょうか」

「そうだねえ。まあ、地球の人間の魂が帰ってこないのは困るみたいだねえ」

「この国にいるのは、その為ですか？」

「それもあるが、この国に仕えるのも悪くは無いと思ってね」

嘘ではないのだろう。

ただ、一番占めている物は隠している。

「オジサンも聞かなきやいけないことがあるねえ」

そうやって、不毀の極槍の穂先を突きつけられる。

「アンタは敵か、それとも味方かい？魔術師。あまり言葉は信じられないがな」

「答えは、一つだ。アンタが本物のヘクトールかは分からないが、サーヴァントに嘘はつかない……………俺は勇者だ。今の俺は、魔術師ではなく、勇者だ。この誓いがある限り、人類を裏切ることはない」

「その眼、信じさせて貰うぞ。じゃあ、模擬戦の相手をしてやろうかい？その状態でどれだけやれるか知りたいのだろうか？」

「神代の英靈に、手ほどきを受けるのはありがたい。胸を借ります」

「掛かってきな！少年！」

そうして、俺たちの夜は始まった。

## 弱き者

訓練から二週間ほど経ち、クラスによる初の模擬戦が行われた。

悲しいことに一回戦で雫と当たり、接戦の末に惜敗した。

俺が使っていた模擬戦用の剣が壊れてしまい、徒手空拳で戦ったが、リーチ差で負けてしまった。

その後にあつた、南雲ハジメの試合だが、良い健闘ぶりだった。

相手との力量の差が分かっているからこそその、慎重な戦い方。

相手の得意分野で戦わせないというのは基本だが、出来るのは中々いない。

試合場から下りてきた南雲に声をかける。

「ナイスファイトだったよ、南雲くん」

「えっ、い、いやあそんなことないよ。やっぱり皆には敵わないな」

普段はあまり接さず、ここに来てからはあまり良い態度をとっていない相手から、話しかけられた事に驚いたのだろう。

「まあ、確かに君は弱い。けど、自分に出来る武器をしつかり把握して、相手の強みを潰すようにして戦っていたじゃないか。穴を作ったり、突っ張りを出したりと良い応用方法だと思うよ」

「あはは、ありがとう」

「ただ、もう少し大きい壁を作れば良いんだけどな。魔力が少なく作れないのかい？」

「作れないことはないけど、時間が凄く掛かるんだ」

「そうか・・・南雲は、訓練方法を変えた方が良いな。今のよう一人で我武者羅にやるのは効率が悪すぎるし、正直あまり意味が無いと思う。ステータスの伸びも低いつて聞いているし。それなら、まずは日頃から錬成で魔力を使い切つて、回復薬を飲んで、錬成してを繰り返して、錬成の質と少しでも魔力を増やすと良い。それから、武器はナイフのままが良いとして、弓も覚えようか。遠いところまで錬成出来るようになれば、体勢を崩した相手に早撃ちが出来れば理想的だ。相手には・・・惜しみなくメルド団長や騎士の皆さんに手を借りよう。今日の南雲の動きを見て、彼等も・・・」

「待つて、天之河くん！」

南雲が話を切ってきた。

いきなりの話で混乱をしたのかもしれない。

「どうした？何か疑問点があるのか」

「そうじゃなくて……えっと、天之河くんって僕のこと嫌いだよね？」

「うん？まあ、厳密に言えば興味が無いだが、好きか嫌いかで言えば嫌いだね」

「なんでこんなに構ってアドバイスをしてくれるの？正直、僕は君に好かれることしてないと思うけど」

至極まつとうで、俺からすれば間抜けにも程がある質問が飛んできた。

「南雲、お前は馬鹿か？お前もクラスメイトだろ？俺は言ったぞ、全員絶対に地球に連れて返すと。クラス全員で生きて帰らなければ意味が無いだろう？生存率を上げるのに、好きも嫌いも関係ないだろう。良いか、一度しか言わないぞ。天之河光輝のクラスメイトに、お前は含まれているんだ。俺はトロッコ問題で、トロッコを壊して全員で生き残ることを選択する男だと言うことを覚えておけ！」

「す、凄いね。うん、でもありがとう」

「兎に角、メルド団長に訓練のことについては伝えておけ。ただ、メルド団長からもつと良い案があったらそつちを使え。プロの言うことの方が今の段階では合ってると思うからな。そうすれば檜山たちと距離を取れるだろうし、努力しているのを見て、庇う相手も増えると思うぞ」

「気づいていたの？」

「気づいていないと思っていたのか？俺は現状打破を考えていない相手の助けをする気が無いだけだ。お前が図書館で知恵を身につけているのを悪いとは言わないが、お前の場合は隠れた努力よりも、見える努力をするべきだ。少なくとも今はな。時間が解決するほど、甘くないぞ。自分でSOS信号を出すか、変わるように立ち向かうかを選択しなければ、動く人も動かないぞ」

「じゃあ、助けてって言ったたら、助けてくれたの？」

「まずは、夜更かしする癖を治せとと説教から入るな」

「あはは、やっぱり？」

「まあ、お前の家の教育指針に大きく関わる気は無いが、片親でいっぱいいっぱいの人がそこそこ居て、遊ぶこともせず必死に大学目指したり、推薦とろうとしている生徒も少なくない。そんな奴から見たお前は、親から出されている教育費を無駄にしていると見られていたのは、分かれよ。そして、現状の信頼性ゼロの状態をここからどう巻き返すかだ。俺は可能性が少しでもあると思ったから、今は手を貸した。俺は甘くはないからな。切るときは切るぞ」

そう言つて、再び勝利を収めた雫の元へと向かった。

訓練の後に、メルド団長から、数日後にオルクス大迷宮に遠征に行くと言われた。

南雲の弓は恐らく完成しないだろう。

いや、実戦で完成させれば問題ないのか。

それならば、良いタイミングなのか。

そして、直ぐにその時は迎える。

前日の夜、不幸な夢を見た少女が、最弱の男と約束を交わしていたとき、英雄は準備をした。

「セット完了。サーヴァントの反応も無し。これなるは悪しき者を封じ、守るべき者を救う遮断と治癒その結界なり。我は守らず、力なき民を守る物『紋章の盾!!』」

今度こそ、誰も死なせない。  
守り切ってみせる。  
誰から恨まれようと、今度こそ…



## 罨

朝、メルド団長の指示と案内の元、「オルクス大迷宮」の正面入口がある広場に集まっていた。

多くの人間が緊張と未知への好奇心を表情に浮かべている。

この魔物では、あまり魔術の触媒にならないため、俺は少しだけがっかりしている。

今のところは、触媒を使うほどの大魔術を使用する予定はないが、代用品を探しておく必要がある。

入口は、入場ゲートのような物が設置されており、昔より治安も良くなったとのことだ。

また、周りには出店もあり、いざという時の物資調達も可能だ。

隊列を組みながら、迷宮内を進む。

しばらくすると、天井の高さ七、八メートルはある広場に出た。

その瞬間、物珍しげに辺りを見渡していた皆の前に灰色の毛玉が壁の隙間から湧き出てきた。

危険ではないだろうが、これも訓練。

俺は自分自身の判断を信じ、拳でネズミのような頭を貫き壊す。

すぐさま、空いている手で腕を掴み、周りにいる同じ種族の敵を巻き込むように振り回して投げ飛ばす。

「良い反応だ、光輝！よし、じゃあ、光輝達が前に出ろ。他は下がれ！交代で前にも出てもらうからな、準備しておけ！あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！後衛は魔法の準備だ！」

先ほど殺した相手はラットマンと言うらしく、文字通り鍛えた成人男性とネズミが融合したクリーチャーのような奴だ。

龍太郎は負けてられねえという感じで突っ込んでいくが、雫の方は顔が引き攣っている。

気持ち悪いのだろうが、そのうち慣れる。

こちらに来てからあまり徒手空拳を使えていなかったので、今のう

ちに感覚を取り戻す。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ、螺炎」

俺たちが相手できていない遠くの敵が焼き払われる。

魔石と呼ばれる、魔物の体内にある重要な部分すら消し飛んでいく。

魔石は、質や大きさも種族によつてバラつくが、売れるし武器にも使える。

一階層の雑魚のとはいえ、無いよりはマシなのらしいが……  
現状を見て、メルド団長は苦笑いをする。

「ああ、うん、よくやったぞ！次はお前等にもやってもらおうからな、気を緩めるなよ！」

生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないよう注意するメルド団長。

しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない生徒が多い。

頬が緩む生徒達に「しようがねえな」とメルド団長は肩を竦めた。  
「それとな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバーキルだからな？」

メルド団長の言葉に香織達魔法支援組は、やりすぎを自覚して思わず頬を赤らめる。

現在の迷宮最高到達階層は六十五階層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者がなした偉業であり、今では超一流で四十階層越え、二十階層を越えれば十分に一流扱いだという。

進んでいる内に、唐突にエヒトルジュエから連絡が入る。

(どうした、エヒトルジュエ。こちらは順調だが)

(命令です、セイバー。次にある、美しい鉱石、グランツ鉱石のトラップに引っかかりなさい。貴方でなくても良いのですが、彼等に経験を溜めるためにも必要でしょう。また、貴方にも特別な仕事がありますので)

(了承した。それと、少し口調が変わったような気がするが？良いこ

とでもあったか?)

「???…!!!」

(気づいていなかったのか?)

(う、うるさい! 兎に角、罠には引っかけりなさい!)

念話が唐突に切られた。

恐らくだが、中性で、男性よりだった精神が女性に変わってきているのだろう。

もしや、守るといふ言葉に惹かれたのか。

我がマスターながらチョロイというか… いや、生前の俺も似たような者か。

まあ、やれるだけのことはしよう。

しかし、トラップを起動させる… か。

どんな醜態を晒すべきかと悩む。

これなら、言われてから動くやる気のある平凡を演じるべきだったか。

国に帰ったら周りから話を聞きそうなヘクトールへの、牽制を兼ねて有能な勇者の姿を見せていたのが、仇になってしまったようだ。

しかし、チャンスは直ぐに訪れた。

それは、俺が少しミスを出そうとし、狭い場所で広範囲で威力もある天翔閃を撃ち込んだ。

メルド団長にお叱りの言葉を貰っているとき、衝撃によって出土したグランツ鉱石に香織が目を奪われた。

それを見た檜山がグランツ鉱石を取りに行った。

ナイスだ。

どんなトラップが来ようが、魔術を使えば大抵の相手はどうとでもなると予想もしているし、散り散りになっても大丈夫なように保険はかけてある。

そして、メルド団長の叫びは虚しくも届かず、トラップが作動した。

「こ、これは… 一体な」

俺は光に包まれて飛ばされた。

その先には、感情が著しく薄い女がいた。

思考に一瞬ノイズが走る。

「初めまして。私は真の神の使徒である、ノイントと申します。貴方様に鍛えて貰い、出力の向上をせよと命令を受けました。一時の間よろしくお願い致します」

戦力の強化か。

恐らくは抑止力への対策だろう。

「なるほど。では、ゴッデス・オブ・ウオー霊器解放そして、ゴッデス・オブ・ウオー宝具戦神の軍帯！」

「これが、主の言っていた…神」

「戦神、そして軍神の力を使い、お前を… お前の後ろにいる者達も鍛え抜こう！行くぞ！」

そして、俺による稽古が始まった。

## 初弟子

「と格好つけては見たが、済まないが手取り足取り教えるのは初めてで、勝手が分からない。早速で悪いが、模擬戦と行こう。ノイント、お前の全力を見せて見ろ！」

「了解しました」

その台詞と同時に、銀色に輝く魔力の弾丸が撃ち込まれる。

このぐらいならば、回避をしなくても問題ない。

「こちらの固有魔法が効いていない様子ですね。純粹に火力を上げるべきでしょう」

様々な色取り取りの魔法を使ってくる。

だが、どれも俺の耐魔力を突破するだけの力は無い。

それを半場気づいているのか、魔法を囷にしながら大剣を持ち、接近戦を仕掛けてくる。

「雷よ！万物を裂け」

雷の魔力を放出し、魔法を迎撃する。

そして、ノイントの大剣を自身の軍神の力を込めてある剣で受け止める。

大剣の速度を逸脱してるであろう速度で振るわれる。

だが、俺たちのようなのを相手にするには致命的に遅く隙だらけだ。

強すぎるステータスが逆に枷になってしまっているのだろう。

何度か剣で斬り合う。

右になぎ払い、その勢いを利用しながらの斜め切り、魔力を爆発させて、真上に切り上げ、最速の突き。

それを紙一重で避けていく。

最後の突きに合わせて剣を喉元に向かって突き出す。

躲そうと無理矢理な態勢になったところを蹴り飛ばす。

体勢を立て直すのではなく、勢いに乗って空を飛び出し、魔法を放ち出す。

少し距離が遠い。

それに、魔法の速度も速い。  
今までとは比べものにならない。

全ての魔力を使い切る気持ちで撃ち込んでいるのだろう。  
魔法が直撃する。

肌に少し傷がつく。

舐めていたわけではないが、心のどこかで彼女を敵と認識していなかった。

戦士と見ていなかったのかもしれない。

だが、この魔法には、永劫の時、一人の主を守るために戦い続けた彼女の誇りと強い意志があった。

彼女は本気でエヒトルジュエを守るだろう。

今の俺の力を持って、彼女の全力に応じよう。

今の仮初めの肉体ではなく、同じ傷つき生を謳歌している状態であれば。

そもそも、死んで失う物が無い状態は、フェアではない。

俺は、宝具を解除し、霊器解放を強制的に解除した。

神域という少し狡が出来る場所ゆえに、俺は再び受肉する。

一気に傷が出来る。

だが、構わない。

魔術回路を開く。

投影魔術で戦神の異母兄弟が使う弓を再現する。

そこに流れ出る血を混ぜ込み、壊れないように強化する。

そして、かつて何度か見た光の矢を作る。

火力はあるが、基本的に動局的には当たらないのが、俺の奥義だ。

だが、今まで俺はこれを外したことはない。

「ツツツ！」

煙の中から弓を構える俺を見て、血の気が引くも、直ぐに意識を元に戻し、緊急離脱をしようとしている。

「止まれ！」

俺がそう言うのとノイントは動きを止める。

何故止まったのか分からない表情をしている。

そして、少しずつ自身の体力や魔力が減っているのを感じ取ったのだろう。

藻掻いているが、もう遅い。

その両翼を穿つ。

「穿て！矢よ！」

両翼を穿り取られ、ノイントが墜ちていく。

それを俺は抱きかかえながら、聖剣を喉に突きつける。

「済まない。中途半端な戦いをしてしまった。ただ、どうしても、命あるお前の全力に、命のある俺の全力で答えたかった。そして、訓練の内容は良く思いつかない。ただ、勇者ではなく、サーヴァントとしての俺のスキルをお前達に使わせる。その後は時間の限り模擬戦をする。そうすることで、俺の力を馴染ませるんだ」

「分かりました。よろしくお願いします、お師匠様」

「…………… 師匠、か。出来る限りのことは尽くそう。お前達が生き残ることが出来るように」

「私たちは、主のための兵器です。私達は死ぬのが本望。それに、代わりはいくらでもいます」

その言葉に、かつて救えなかった、あの子を思い出す。

代わりがいることが大丈夫だと言う言葉が俺にとっては一番辛い言葉だ。

「お前の後ろにお前の仲間がいるが、俺の弟子はお前だけだ。お前は俺の中では、もう特別になっている。忘れないで欲しい」

「そんなことを言われたのは、初めてです」

「そうか」

「よく、分かりませんが、弟子が早々に死んで、師の顔に泥を塗る結果は私も嫌です」

そう言って、俺たちの長い時間の模擬戦が始まった。

## 勇者の帰還

ノイントとの訓練を終えた俺は皆がトラップに掛かった二十階層に戻ってきた。

皆は既にホルアドにある宿屋に帰って行ったようだ。

激しい戦闘後がまだ残っており、そこまで時間は経っていないかもしれない。

怪物は俺を見ていた。

気配を読み取り、まず二つ下の層からにしか人が居ないのを確認する。

誰も倒せなかった怪物との一騎討ち。

華々しい活躍とともに勇者の名声は確かな物へとなるだろう。

ステータス的にメルド団長に劣っている俺では、普通ならば勝てないだろう。

だが、此処には俺とお前しかいない。

魔眼を使つて誰かを巻き添えにして死ぬ事もなければ、洗練された荒い動きに文句を言う人もいない。

先制にコネで教わった、鉄甲作用で石を撃ち込む。

本来ならば黒鍵が良いのだが、無いものは仕方がない。

それに、これは体術である為、応用が利く

そこから、聖剣を抜刀し強化の魔術をかけて斬りかかる。

初めて血を流したことに驚愕し、ダメージの大きさに恐れて、全身で敵と認定したのだろう。

激しい雄叫びを上げる。

周りに人が来る前に早急にカタをつける。

ルーン魔術から考えを真似して作った、転換魔術と結界魔術の改良型を用いて中々遠距離の攻撃をする。

更に、こちらの世界のスキル限界突破を使い、魔力を大量に回して加速する。

カウンターを恐れず、剣を前に突き出しながら加速し、その巨体を貫いた。



そして、怪物は倒れた。

「べ、ベヒモスが、死んでいる…。君は誰なんだ!？」

「俺、いえ、私は天之河光輝、勇者です。トラップでやや遠い所に飛ばされて、此処まで戻ってきました。撤退したメルド団長達は何処にいますか。早く合流したいのですが…。」

あの人が今、居なくなるのは頂けない。

俺が帰還すれば、メルド団長への非難も少なくなるだろう。

場所は分かりきっているが、一応聞いておく。

「あ、ああ。メルド団長達ならホルアドにある、宿屋にいるよ」

「ありがとうございます。後のことはお任せします。全力の戦闘で、疲労していましたが、ある程度は力も戻ってきましたので」

「わ、わかった」

そんなやり取りをした後に、ホルアドに向けて走り出す。

メルド団長達が勇者を失ったという報告をする前に着けばベストだが、間に合うだろうか？

結局、宿屋に着いたのは夜になった。

そもそも、外に出たら日が暮れており、これでも飛ばして帰ってきた方なんだが、夜になってしまった。

「あ、天之河くん！無事だったか！おい、メルド団長へ報告しろ！」

「はい！」

入口にいる見張りの兵士がメルド団長へ報告に行く。

『勇者が戻られたぞー!!』

遠くから、凄い足音が近づいてくる。

「天之河が帰ってきた！」

「だから言ったんだ。光輝は死なないって！」

「神様ー！ありがとうございます」

凄いい歓迎だ。

「光輝、おめえ、おめえが消えたとき、俺、俺…」

龍太郎はもう、涙腺が崩壊寸前だった。

「はは、なんて声を出してるんだよ、龍太郎。俺は勇者で、人類の希望だ。そんな簡単にはくたばらないよ」

「おおおお！光輝〜！」

俺が生きて帰ってきた実感を得て、我慢した涙が止まらないんだろ  
う。

こういうときは、うんと泣かせるのが良い。

「光輝、無事で良かった。貴方にまで居なくなっていたら、もう、私達は立ち上がれなかったと思うわ」

「雫、その言い方だと誰かが…死んだのかい」

「分かんないわ。ただ、大きな奈落に南雲くんが落ちていって…」

「分かった。南雲は行方不明で、死亡の方が可能性が高いという訳だな」

本当は生きている。

回収が出来ていないだけで、意識を取り戻すまでなら、安全な結界にいる。

それに、回収は一人一日に一回だが、結界を張るのなら、いくらでも大丈夫だ。

当然ながら、俺の魔力を使い続けるから、魔術回路は開きつぱなしだ。

魔眼を作動させないように、眼をズラしているが、きついな。

魔眼殺しを作る必要があるかな。

「光輝、その、南雲が落ちたのも、皆をあんな目に遭わせたのも俺の所為だ。すまねえ」

龍太郎がいきなり謝ってきた。

いや、それなら、罨に掛かった檜山の所為だし。

そうなるように見逃した俺の所為だ。

「龍太郎、まだそれを言うの！あれは仕方が無い事よ！貴方の言い分も間違っではないわい」

「だが…」

「龍太郎。詳しく教えてくれないか？」

「俺は、あの怪物が出た後、逃げろって言ってたメルドさんに逆らったんだ。メルドさんの指示に従っていれば、南雲があんな目に遭うことはなかった」

「龍太郎！光輝も責めないで。龍太郎は、貴方の事を思つて……！」

「話はわかったよ。龍太郎も雫も、皆も頑張ったんだよな。ありがとう。龍太郎、お前のことだから、俺が戻ってきたときのことを心配していたんだろう？嬉しいよ。それに、謝るなら、俺の方だ」

「光輝？」

「皆が苦しんでいるときに、俺は側にいれなかった。皆を守ると、連れて返すと約束したのだ。済まなかった。だが、もう、誰も死なせない！どんな敵が来ようが、どんな困難が来ようが、俺の……いや、俺たち全員の力で乗り切ってみせる！もうこんな思いをしないためにもだ！」

静かになつて、皆に火がつく。

「うおおおおお！」

「俺だつて、負けねえぞ！」

「ああ、やってやる！」

皆がやる気に満ちあふれている。

そして、メルド団長が現れた。

「光輝、そして皆。済まなかった。あれは完全に俺のミスだった。お前達と一緒にならば何があつても大丈夫と油断をした結果だ。お前達は迷宮は初めてで、戦闘経験も少ないのに、危険な場所だと知っていたはずなのに、油断をした俺の所為だ」

メルド団長が謝る。

たしかに、これはメルド団長の監督ミスだろう。

だが、今俺たちに必要なはそれではないのだ。

その言葉ではない。

「メルドさん。この話はもう無しにしましょう。反省もして、現実も知りました。お互いが非を認め合つて、時間を潰すのは止めましょう。今は時間が惜しいんですから。俺たちのことをもつと強くさせ

て下さい！もうあんな目に遭わないためにも！」

メルド団長の目を見て、心を揺さぶる。

「ああ、わかった！……お前ら！飯の時間だ！食わなければ力  
は出ない！その決意を実行できんぞ！！食堂へ集合だ！！」

『おおおおおー！』

こうして、長い一日が終わった。

## ケジメ

その後、俺たちは一度ハイリヒ王国に帰っていた。

決意を固めて戦う生徒もいれば、現実を知り恐怖を覚えて戦意を無くした生徒もいた。

一度部隊を編成し直す、また、南雲ハジメの死亡のことを報告することも含めて、俺たちは帰還した。

雫はあの日から気絶している香織を部屋に寝かせに、龍太郎は決意を新たにした生徒達と、早速訓練に行った。

他のまとめ役の生徒は、王国で別行動せざる終えなかった愛子先生に、先日のことについての事を報告に行った。

俺はメルド団長と共に、国王やイシュタル、王国の重鎮達に事の次第を説明しに向かった。

「……以上が、昨日に起きた勇者一行の一人、南雲ハジメの死亡と勇者、天之河光輝の帰還になります。私の重大なミスです。いかなる処分も受け入れません」

メルド団長が深々と頭を下げる。

国王が何かを言う前に、イシュタルが口を開く。

「確かに、ミスはいけません、勇者天之河が単独でベヒモスを討伐してから帰還しましたし、貴方以上に群を纏められる人材も居ません。なので、罰は無しで良いでしょう」

この一言によってメルド団長の無罪が決まった。

それに、南雲ハジメが死んだという事実がそこまで重く感じないのだ。

周りの重鎮達も死んだのが無能で良かったと思っている。

「ええ、イシュタルさんの仰るとおり、南雲は死にました。では、貴方たちは何をしてくれるのですか？」

「はい？何とは？」

重鎮が疑問の声を上げる。

いつもの、目上に対する丁寧な言葉ではなく、天之河光輝という一人の男としての声を出す。

「南雲は、俺たちを守るために勇敢に立ち上がった戦士だったと皆から聞きました。彼が死んだのは貴方たちの言う無能だからというものもあるかもしれませんが。しかし、南雲は元々そちらの出身ではありません。俺たちもです。俺たちは貴方たちが必死に生きて救われたと言うから立ち上がって戦っています。なのに、貴方たちは何をしているのでしょうか。領土運営や外交問題で忙しいとは思いますが、元々この問題は貴方たち自身が解決せねばいけない問題のはずです。それを俺たちに手伝わせて、失敗したら罵って切り捨てるのですか？それが貴方たちが取る亡くなった勇者への対処というのなら、俺はもう二度と貴方たちのために戦いません。俺以外も言うと思います」

「では、我々に何をして欲しいと望む、天之河様。我々の兵士が戦死された時の対処をしようにも、彼には遺族がありません。どのような対処が望みで？」

国王、エリヒドはそう口を開いた。

彼は、俺に少し微笑んでいる。

こちらが行う対応よりも、そちらの意見を尊重するという事だろう。

「まずは、遺族に対して払われる賠償金を俺たち全体にしつかりと払ってください。そして、今回の事件を境に戦えない生徒が出てきます。その生徒達の安全と衣食住の保証を！更に本人達が立ち直るまで戦闘行為をさせないください。後は、職の斡旋もして欲しいです。何も出来ないというのは酷く辛いことです。最後に南雲ハジメの名誉を守ってください」

「その願い必ずや、叶えて見せよう」

そう言って会議は終了した。

皆の元へ帰っている途中にメルド団長が口を開く。

「光輝。ありがとう。お前のおかげでこの国全体が良い方向へ向かうかもしれない。俺たちはお前達に甘えすぎているようだな」

「あまり持ち上げないで下さい、メルドさん。俺は若いから調子に乗りますよ。それに、何だかんだ言って、戦うと決めたのは本人達です。」

周りの意見に流されようが、選んだのは俺たちです。その責任を自分一人で受け止められただけ、南雲は幸せな方だと思いますよ。少なくとも、俺はそうじゃない。俺が行った選択で周りも巻き込んで、こんな目に既になっています。俺の失敗は俺だけの責任にして抱えて終われないんです。自分の行いが自分にだけ返ってこれれば一番幸せなんですけどね」

「光輝、お前は…。」

「メルドさん。早速訓練に付き合って貰って良いですか？皆も頑張ってるから、俺も頑張らないと！」

「… ああ、わかった。いくらでも付き合うさ！お前の、お前達のためならな！」

そう言っつて、俺は訓練に参加した。

## オルクス大迷宮再び

俺たちは再び、オルクス大迷宮を攻略していた。だが、そこにはかつての仲間達の多くは居ない。

勇気を振り絞って戦っていて、俺が帰ってきたときも、炎を燃え上がらせてはいたが、それは、そうしなければ見捨てられると多くの人間が思っていたからだ。

愛子先生が戦えなくなつた生徒を戦わせる事へ抗議していた。

周りの貴族は渋っていたが、食糧関係の生命線を失いたくないため、有耶無耶な対応をしていた。

そこに、国王やイシユタルが戦えない者は手厚く保護すると確約したため、貴族は手を引いた。

クラスの皆も、やはり自分は戦えないと思い一人が抜けると、次々に止めていった。

それに、仕事も渡されているため、戦う以外に役に立つことがあると自分たちの新たな価値を見出していった。

此処にいるのは、俺を含む十五人のクラスメイトとメルド団長だ。

先ずは、王国の多くの人……特に貴族からの人気が発散的に高い、俺がリーダーに置かれている天之河チーム。

専ら勇者チームと呼ばれている。

俺、天之河光輝に龍太郎、雫が前衛を務め、香織、その親友の谷口鈴と中村恵里が後衛を務める。

バランスが良い人類最高戦力のチームだ。

次に、檜山大介、中野信治、斉藤良樹、近藤礼一の四人組。

南雲を虐めていたメインの人間だ。

前衛後衛のバランスも取れており、実際強い。

四人がかりなら、限界突破していない俺と良い勝負が出来るだろう。

次に永山重吾という柔道部主将がリーダーの永山チーム。

遠藤浩介、野村健太郎、辻綾子、吉野真央を率いている。

恐らく、クラスで一番リーダーシップのある人間だろう。



どのタイミングでかは分からないが、いずれクラスの下を離れる身としては永山には次のリーダーとして、とても期待している。

足を進めていき、現在六十層まで来た。

そこで皆の足が止まり、俺も足を止める。

皆の目の前には何時かのものとは異なるが、同じような断崖絶壁が広がっていた。

次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならない。それ自体は問題ないが、やはり思い出してしまうのだろう。

特に香織は、奈落へと続いているかのような崖下の闇を、ジッと見つめたまま動かなかった。

「香織……」

雫の心配そうな呼び掛けに、強い眼差しで眼下を眺めていた香織はゆっくりと頭を振ると、雫に微笑んだ。

「大丈夫だよ、雫ちゃん」

「そう……無理しないでね？ 私に遠慮することなんてないんだから」

「えへへ、ありがと、雫ちゃん」

受け答えをハッキリしている。

これなら、なんの心配もいらないだろう。

悲しみに打ちひしがれていたなら、道化になつて怒らせようとしていたが、必要ないようだ。

「皆、怖いのは、分かる。だが、俺たちはそれを乗り越えなければいけない！先に進まなければ、未来はない！王国に残っている皆のために、戦う必要があるんだ！俺たちが人類の希望となつて戦い抜いて、人類全体がいつの日か剣を取るその日まで、俺たちが剣であるために！こんな所で止まるわけにはいかない！皆、俺に続け!!」

味方の士気を高める。

初めの頃は恥ずかしがっていたが、何回もしている内に慣れた。

寧ろ、堂々として戦士に火を付けることに喜びを得た。

そして、先へ進み出す。

進み出したら、問題なく六十五層へたどり着いた。

「気を引き締めろ！このマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

メルド団長の声が響く。

そう、ここから先は未知の領域と言っても過言ではないだろう。しばらく進むと大きな広間に出た。

広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がる。

赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。

それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「皆、来るぞ!! 恐怖に打ち勝つためにも、過去の自分を超えるためにも！武器を取れ！奴も獣だ！痛みを怯み血を流す！彼奴は絶対に殺せる。俺が一度殺したんだ。お前らが勝てない相手じゃない！いくぞ！」

そうやって俺は駆け抜ける。

ベヒモスが姿を現すと同時に、剣で斬りつける。

右から左に斬り、そのまま勢いを殺さず斜めに回転斬り。

追撃で拳を放ち、ゼロ距離で魔法を放つ。

離脱した後に、技を放つ。

「万翔羽ばたき、天へと至れ “天翔閃”」

その光の一閃がベヒモスに傷を付けた。

「グウルガアアア!」

悲鳴を上げる。

「いける！俺達は確実に強くなってる！永山達は左側から、檜山達は背後を、メルド団長達は右側から！後衛は魔法準備！上級を頼む！」  
このぐらいの指示ならば、メルド団長にも怪しまれず、問題ないだろう。

指揮官の訓練は始まって間もない。

やり過ぎると勘ぐられる可能性もある。

「ほう、迷いなくいい指示をする。聞いたな？総員、光輝の指揮で行くぞ！」

メルド団長が言い放つや、各々が動き出す。  
龍太郎、永山がその力を生かしてベヒモスに動きを制限して、檜山達や雫、メルド団長が隙を突く。

そして、皆に危険が及ばないようにするためにも、俺は正面から戦う。

一秒毎に、傷が増えていき、あちらの攻撃は全て、俺によって逸らされる。

ままならない現状に苛立ち、ベヒモスは勝負を焦る。

ベヒモスが固有魔法を発動させた。

前衛組は多くが防御の態勢を取る中、俺は構える。

存在感を強める。

後衛組に攻撃を届かせる訳にはいかない。

敵意の大きい者に牙を向けるのが、誇りのある獣だからだ。

ベヒモスは恐らく此処の中でも強い魔獣だと俺は思う。

ならば、絶対に攻撃は俺に来る。

それに、ベヒモスが弱くても、構わなかった。

後衛組に攻撃するには、俺を退かすしかないからだ。

実際に俺に向かって突進してくる。

「エヒトルージュマスター勇敢なる者に力を！ 〃神威〃!!」

詠唱を、俺が最も力を出せる物へと変える。

それを放出せずに剣にため込む。

突っ込んできた相手を抜き胴を放つ要領で斬りつける。

狙いを逸らされて、真つ二つには出来なかったが、全ての足を切り

飛ばした。

ベヒモスが墜落する。

その先には、魔法の詠唱が完了した後衛が待機していた。

「二二〃〃炎天〃〃二二〃

ベヒモスは焔に包まれた。

そして、ベヒモスが力尽きる。

「か、勝ったのか？」

「勝ったんだろ…」

「勝っちゃったよ…。」

「マジか？」

「マジで？」

皆がマジマジとベヒモスの遺体を見たり触れたりする。

「そうだ！俺達の勝ちだ！」

聖剣を高らかに掲げて声を上げる。

男達は肩を抱き寄せ、女達は互いを抱き合い、喜びを表す。

メルド団長も感慨深そうだ。

特にそうだろう。

過去の偉人を超えた。

その瞬間に立ち会い、自身も戦ったのだから。

ただ、香織はブーツとしていた。

それに雫が構う。

そして、谷口や恵里と喜びを分かち合う。

それを素直に喜べない自分に嫌気を指しながら、いつもの笑顔を貼り付ける。

「皆、これからは、メルド団長すら理解の及ばない敵が出てくる！喜ぶのは良いが気を引き締めよう！まだ、百層までは長い。ただ、俺も今日は喜びを持ち帰りたいから、此処で地上へ帰ろう！…良いですか？メルドさん」

「ああ、良い判断だと俺は思う。疲れもあるだろうから、一旦地上へ戻り、明日の朝からまた攻略を開始しよう」

そして、地上へ向けて歩き出す。

## 変容

ベヒモスを討伐してから、少し経った頃、俺たち迷宮攻略組はハイリヒ王国に戻っていた。

道順のわかつている今までの階層と異なり、完全な探索攻略であることから、その攻略速度は一気に落ちたこと、また、魔物の強さも一筋縄では行かなくなってきた為、メンバーの疲労が激しいことから一度中断して休養を取るべきという結論に至ったのだ。

もつとも、休養だけなら宿場町ホルアドでもよかった。

王宮まで戻る必要があったのは、迎えが来たからである。

何でも、今まで音沙汰のなかったヘルシャー帝国から勇者一行へ会談の申込みがなされたのだ。

皆も何故、このタイミングなのかと疑問を抱くのは当然だろう。

ある目的を抱いてる香織は特にその思いは強かっただろう。

エヒトルジュエによる「神託」がなされてから勇者一行が召喚されるまでほとんど間がなかった。

そのため、同盟国である帝国に知らせが行く前に勇者召喚が行われてしまい、召喚直後の顔合わせができなかったのだ。

もつとも、仮に勇者召喚の知らせがあつても帝国は動かなかつたと考えられている。

なぜなら、帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が建国した国であり、冒険者や傭兵の聖地とも言うべき完全実力主義の国だからである。

突然現れ、人間族を率いる勇者と言われても納得はできないだろう。

聖教教会は帝国にもあり、帝国民も例外なく信徒であるが、王国民に比べれば信仰度は低い。

大多数の民が傭兵か傭兵業からの成り上がり者で占められていることから信仰よりも実益を取りたがる者が多いのだ。

もつとも、あくまでどちらかといえばという話であり、熱心な信者であることに変わりはないのだが。

そんな訳で、召喚されたばかりの頃の光輝達と顔合わせをしても軽んじられる可能性があった。

もちろん、教会を前に、神の使徒に対してあからさまな態度は取らないだろうが。

王国が顔合わせを引き伸ばすのを幸いに、帝国側、特に皇帝陛下は興味を持っていなかったのも、今まで関わる事がなかったのである。

しかし、今回の【オルクス大迷宮】攻略で、歴史上の最高記録である六十五層が突破されたという事実をもって帝国側も光輝達に興味を持つに至った。

帝国側から是非会ってみたいという知らせが来たのだ。

王国側も聖教教会も、いい時期だと了承したのである。

とメルド団長がため息をつきながら語ってくれた。

確かにこれはため息についても仕方が無いだろう。

人類全体の存亡を懸けた問題なのに、肝心のトップ陣がこのザマではため息をつくのも仕方が無い。

皇帝は論外だが、王国も王国だ。

人類の問題を間が悪そうだから後回しにするのは、違うだろ。

誠意を持って教えて、互いの結束を強めるのが先決だろう。

それに、向こうが舐め腐っているのは当たり前だ。

そこからどう信頼関係を結ぶかが大事で、それは俺たちの仕事だ。

国を動かす大変さを知ってはいるが、これは擁護しがたい。

と言うよりは、そんな調子で本当に種族間で戦争する気があるのか？

エヒトルジュエにゲームをしたいならば、もう少し駒を育成しろ、知識を付ける！と文句を言いたい所だ。

命令がなければ、裏切るか俺が人類連合を作る所だったぞ。

聞いている俺もため息が出そうだが、道化として堪えなければいけない。

その代わり、隣で雫がため息を吐いてくれた。

「どうしたんだ、雫。ため息なんて吐いて。皇帝が認めてくれたって

事だろ？ 一歩前進と思うべきだ」

「光輝、アンタは… いや、いいわ」

「そうだな！ 光輝の言うとおりで！ 少なくとも実力を認められたって事だ。俺たちの帰還へ一歩前進だ！」

「龍太郎、その通りだ。俺たちはちゃんと一歩ずつ進めてる。この道は間違っではないんだ！」

そんな風なやり取りをしていると、メルド団長は少し悲しそうな目で俺を見る。

あの人は恐らく、俺をある程度理解してしまっているだろう。

少しだけ、本音を喋ってしまったから。

でも、メルド団長は俺を止めることをしない。

俺がいるからバランスが取れていることを分かっているからだ。

そうしている内に、馬車は王宮に着いた。

全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見えた。

十歳位の金髪碧眼の美少年である。

その正体はハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒである。

少し歳を重ねれば、彼が英雄になっても可笑しくはないだろう。

致命的なまでに王には向かないが、英雄になれる。

他者を切り捨てられず、全てを救おうと藻掻く。

民衆に好かれるが、政治家にはとことん嫌われるだろう。

だが、凄く好ましい。

正道を突き進むだろうし、そうあつて欲しいと願う。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

勿論この場には、香織だけでなく他にも帰還を果たした生徒達が勢ぞろいしている。

その中で、香織以外見えないという様子のランデル殿下の態度を見ればどういう感情を持っているかは容易に想像つくだろう。

この王子は香織に惚れている。

召喚された翌日から、ランデル殿下は香織に猛アプローチを掛けて

いた。

と言っても、彼は十歳で、香織から見れば小さい子に懐かれている程度の認識であり、その思いが実る気配は微塵もない。

生来の面倒見の良さから、弟のように可愛く思ってはいるようだが。

それが余計に生殺しのようで、憐れみを覚える。

「ランデル殿下。お久しぶりです」

微笑む香織。

そんな香織の笑みに一瞬で顔を真っ赤にするランデル殿下は、それでも精一杯男らしい表情を作って香織にアプローチをかける。

浅い傷で済む内に玉砕した方が良いが、十歳の少年に現実を教えるのは酷だ。

子供には夢を見させるべきだ。

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行ってる間は生きた心地がしなかったぞ。怪我はしてないか？ 余がもっと強ければお前にこんなことさせないのに…」

ランデル殿下は悔しそうに唇を噛む。

香織としては守られるだけなどお断りなのだろうが、ランデル殿下の微笑ましい心意気に思わず頬が緩む。

「お気づかい下さりありがとうございます。ですが、私なら大丈夫ですよ？ 自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もっとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

そうだな。

前までの香織ならば、戦いには向いていなかった。

初めてのホルアドより前ならば、致命的に合わないグループだったが、今は違う。

俺を除けば、誰よりも戦いに溺れて、向いてしまっている。

覚悟が決まってしまうと大体そうなる。

待つことが出来ないのだ。



「そ、そうだ。例えばダナ…。」

ランデル殿下の言葉に首を傾げる香織。

ランデル殿下の顔は更に赤みを増す。

となりで面白そうに成り行きを見ていた雫は察しがついているのだろう。

少年の健気なアプローチに思わず苦笑いしている。

可愛そうな思いをする前に、止めに入る。

「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」

勘違いされているだろうが、それでも構わない。

王子が直接フラれるというスキヤンダルが城中で話題になるよりは、マシだ。

「香織を危険な場所に行かせることに何とも思っていないお前が何を言う！絶対に負けぬぞ！香織は余という方がいいに決まっているのだからな！」

「えくと…」

香織が凄く困惑している。

道化を演じて、更に逆撫でする言葉を紡ごうとしたとき、涼やかだが、少し厳しさを含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？天之河様にもご迷惑ですよ」

「あ、姉上!?!…し、しかし」

「しかしではありません。皆様お疲れなのに、こんな場所に引き止めて…相手のことを考えていないのは誰ですか?」

「うっ…で、ですが…」

「ランデル?」

「よ、用事を思い出しました！失礼します!」

ランデル殿下申し訳ありません。

いつの日か謝罪を。

「香織、天之河様、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」  
リリアーナ王女は、現在十四歳の才媛だ。

その容姿も非常に優れていて、国民にも大変人気のある金髪碧眼の美少女である。

性格は真面目で温和、しかし、硬すぎるといふこともない。

TPOをわきまえつつも使用人達とも気さくに接する人当たりの良さを持っている。

だが、俺にとってはそれだけではない。

彼女はエヒトルジュエの器の候補だ。

エヒトルジュエが彼女を使うかは知らないが、俺にとってはマスタアの肉体その物とも言える。

更に、エヒトルジュエが別の器を選ぶか、別の方法を編み出し、リアーナ王女を候補から外しても、俺にとっては重要だ。

それだけの器である以上、この世界の中でも、トップクラスの力を秘めている。

彼女には、勇者の後釜になって貰わなければいけない。

ただ、距離を近づけたいが、いろんな要因があつて間が悪く、オルクス大迷宮攻略に俺は赴いていた。

召喚された者にも、王女としての立場だけでなく一個人としても心を砕いてくれている。

彼等が関係ない自分達の世界の問題に巻き込んでしまったと罪悪感もあるようだ。

率先して生徒達と関わるリアーナ王女と彼等が親しくなるのに時間はかからなかった。

特に同年代の香織や雫達との関係は非常に良好で、今では愛称と呼び捨て、タメ口で言葉を交わす仲である。

余りにも、俺の間が悪すぎるだけであつて、嫌われているわけではない。

「ううん、気にしてないよ、リリイ。ランデル殿下は気を使ってくれただけだよ」

「そうですね。なぜ、怒っておられたかは存じませんが、過失は私にありますから、謝罪すべきはこちらです」

俺たちの言葉に苦笑いを浮かべている。

恐らく、姉として弟の恋心を察しているのだろう。

「いえ、天之河様。ランデルのことは気にする必要ありませんわ。あの子が少々暴走気味なだけです。それよりも…改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

リリアーナ王女はそう言うと、ふわりと微笑んだ。

香織や雫といった美少女が身近にいるクラスメイト達だが、その笑顔を見てこぞって頬を染めた。

リリアーナ王女の美しさには二人にない洗練された王族としての気品や優雅さというものがあり、多少の美少女耐性で太刀打ちできるものではないのだろう。

実際に永山や檜山達は勿論、女子生徒でさえ、頬を赤める。

異世界で出会った本物のお姫様オーラに現代の一般生徒が普通に接しろという方が無茶だ。

昔からの親友のように接することができ香織達の方がおかしい。

悪いことではないが、公の場ではリリイと言わないか心配だ。

「その言葉に感謝を、王女。貴女の笑顔は私にとって、あらゆる宝石、財宝よりも価値がある。幾千幾万の戦場を越えても、その笑顔があれば私は無限に戦えますし、勝利を貴女と人類に捧げましょう」

飾っている言葉だが、下心が全くない。

そんな言葉を初めて、異性から聞いたのだろう。

リリアーナ王女は顔を真っ赤に染めた。

仲良くなりたいと思う。

だが、今の俺は勇者で、彼女は王女だ。

俺たちのプライベートはもつと狭いモノでないといけない。

だから、機会を待つ。

嫌でも俺たちは顔を合わせなければいけないのだから。

「えっと、とにかくお疲れ様でした！おつ、お食事の準備も、清めの準備もできておりますから、ゆっくりお寛ぎくださいませ。帝国からの使者様が来られるには未だ数日は掛かりますから、お気になさらず」

放している途中でなんとか乱れた精神を立て直したりリリアーナ王

女は、皆にそう伝えて去って行った。

迷宮での疲れを癒しつつ、居残り組にベヒモスの討伐を伝え歓声が上がリ、これにより戦線復帰するメンバーが増えた。

晚餐の時に愛子先生が一部で「豊穰の女神」と呼ばれ始めていることを耳にし、それが話題になり彼女を身悶えさせたりと色々あった。

そして、夜。

「香織、休めよう？急ぐことと、焦ることは別だ。今のままだと転ぶぞ。転ぶだけなら良いが、奈落に落ちたら助けられないからな。無茶をしなくても今日は寝てくれ」

「な、何言ってるの光輝くん。あはは、当たり前だよ。それに、私は疲れてなんかないし…」

やはり、香織は溺れていた。

まだ、浅いがこのままだとどうなるか。

「寝ろ、白崎香織」

魔眼で弱めの催眠を掛けて、強制的に寝させる。

隠していた疲れを刺激させる。

これだけで寝てしまうのだから、相当溜まっているだろう。

香織を抱きかかえ、雫に預ける。

今、ヘクトールは留守にしている。

俺は一人で訓練を行う。

## 帝国の使者

それから三日、遂に帝国の使者が訪れた。

現在は謁見の間にて、レッドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っている。

迷宮攻略組に、王国の重鎮達、そしてイシユタル率いる司祭数人も揃っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよかろう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂こう。天之河様、前へ出て頂けますか？」  
「はい」

陛下と使者の定型的な挨拶の後、俺たちのお披露目となった。

俺を始めに、次々とメンバーが紹介される。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いすな。失礼ですが、本当に六十五層を突破したのです？ 確か、あそこにはベヒモスという化物が出る」と記憶しておりますが……」

使者は、イシユタルの手前露骨な態度は取らないものの、若干疑わしそうな眼差しを向けた。

使者の護衛の一人は、値踏みするように上から下までジロジロと眺めている。

自身は姿をさらさずにいるのに値踏みをする姿勢は正直好ましくない。

「えっと、ではお話致しましょうか？ どのように倒したかなど…… ああ、六十六層のマップを見せるとかどうでしょうか？」

とりあえず、辺り触りのないことを言う。

無論、こんな事で納得はされないだろう。

今まで無関心で有りながら、何を今更と言いたくはなる。

俺は確かに、どちらかと言えば、人が良い方だが、礼節を弁えない人間に優しくするのは正直苛立つ。

色々提案するが使者はあっさり首を振りニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか？それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

ベヒモスごときに勝てず、特に策も無く此方に興味を示さず、助けを求めている人間で有りながらこの不遜な対応。

俺には嫌いな物がある。

努力が出来ない、しない者が、自分に出来ること以上のことを求めることだ。

昔の自分自身がそうだったからこそ、嫌になるのだ。

だが、それでもそれを表に出すわけにはいかない。

俺の行動一つで国際問題に発展しうる。

人類が協力して行かなければいけないのに、個人の我が儘でそれを破綻させてはいけない。

「まあ、私は構いませんが…」

エリヒド陛下に視線を向ける。

イシユタルならば、その話術を持ってこの場を押しえられるはずだ。

エリヒド陛下は俺のの視線を受けてイシユタルに確認を取り、イシユタルは頷いた。

イシユタル、お前の詐欺師的な話術で平和的に解決してくれることを期待した俺が馬鹿だったのか。

こうして急遽、勇者対帝国使者の護衛という模擬戦の開催が決定されて、一行は場所を変える。

俺の対戦相手は、値踏みをしていた姿を偽っている男だ。

恐らくメルド団長と互角か少し上位の実力だろう。

彼が帝国で何番目かは知らないが、実力主義の国だけはある。

勇者の力がある程度解放すれば、直ぐに片がつくだろう。しかし、それではいけない。

模擬戦をするからには、お互いが讚え合う必要がある。

そして、外交でもある以上、ある程度は相手に花を持たせなければならぬ。

一見ダラリとしているが隙の無い構えをしている。

「行きますー！」

馬鹿みたいに声を出しながら、相手に真つ正面から突つ込む。

洗練された動きで、ごく普通にカウンターを叩き込んでくる。

恐らく、見た目よりも年を取っているのだろう。

達人の動きで、メルド団長よりも鋭い攻撃だ。

やはり、読みは正しく、メルド団長よりも少し上の実力の持ち主だ。

「ガフツ!？」

それをわざと当たり、派手に転がる。

だが、しっかりと受け身を取り、動きの割にはダメージを負わないようにした。

護衛の方を見る。

その表情には失望が浮かんでいた。

予想以上に歯ごたえがなくて呆れているのだろう。

此方としては、使者の護衛というデリケートに扱わなければならぬ相手に、ベヒモスと同じように戦って貰えると期待していたと思っ  
ていたであろう相手に驚きを隠せない。

「…おい、勇者。元々戦いとは無縁か？」

今更な質問が飛んでくる。

そんなことすら知らなかったのか？

皇帝は何を思っ彼を護衛に付けたのか？

そもそも皇帝は勇者達のことを何処まで知っているのか？

王国はそんなことも帝国に伝えていないのか？

不安な考えがいくつも過ぎる。

こんな連中に大切なクラスメイトの命を預けて良いのかと不安が  
浮かぶ。

こんな奴らを守るために、皆の命をかけ続けるのか？

思考が纏まらない中、それでも、使者もいる手前、返事をしなければならぬ。

「ええ、そうです。私達は皆元は学生。戦争が無い平和な国で武器を持たず、文官や商人を目指して生きてきました。武道に心得のある者いますが、それは自身の精神面を鍛えるためであって、貴方たちのように戦って命を奪いやがて死んでいくための物ではありません」

やや失礼に当たっても、貴方たちと一緒にするなと言うことを伝える。

自分たちがそういった身分の人間を、戦いに引きずり込んだことの重さを理解させなければいけない。

そして、そんな人間を無視して、自分たちの好きなようにして協調性を見せなかった帝国の非を認めさせなければいけない。

そのぐらいして貰わなければ、クラスメイトの命を預けたくない。

「…それが今や『神の使徒』か」

男はチラツとイシユタル達聖教会関係者を見ると、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「構えな、勇者。これ以上腑抜けているようなら…」

聖剣で相手の大型の剣を受け止める。

言葉の意味が通じていないのか!?

それでも、ベヒモスは殺せたとでも言いたいのか？

戦争する覚悟を見せろとでも言っているのか？

戦争が出来る奴なんて、クラスにいない。

現状で、殺しを認めさせるわけにはいかない!

人を殺せないならば、いらぬとでも？

だが、一番占めているのは、こんな事も出来ない勇者達ならいらぬいだろ？

癩だ。

だが、俺が出来ると言っても、クラスの皆は出来ない。

クラスの代表である以上、俺は、怒りを抑えなければいけない。

俺が出来ると思うとクラスが出来ると思われる。



それだけは許してはいけない。  
俺一人が耐えれば済む話だ。

そしたら、数日流せば今まで通りだ。

帝国とは干渉しなければいい。

人類を救えば良い。

人は救わなくて良い。

救えない犠牲の比率が帝国に偏っても仕方ないだけだ。

考えながら戦っていると、唐突に向こうが止まる。

「やめだ」

その後と言われたことはあまり覚えていない。

その男が隠していた姿を見せる。

「ガ、ガハルド殿!?!」

「皇帝陛下!?!」

その言葉を耳にして、俺は怒りに飲まれた。

皆の前で怒りと本気を見せた。

## 暴走

魔力を解放して、殺す気で相手の顔面を殴りに行く。

「なっ！」

相手は腕をクロスさせて致命傷を避けるが、腕がへし折れた音が響く。

後ずさりする相手に蹴りを叩き込む。

周りの声は聞こえない。

俺は目の前の男を目に据える。

「貴様が皇帝だと… 巫山戯るなっ！」

更に魔力を回す。

向こうにも言い分はあるかもしれない。

だが、それでも、怒らずにはいかなかった。

冷静な判断が下せない。

「今の今まで国に引きこもって置いて、魔族に勝てず、助けを求めている立場で有りながら、気に入らない相手が来たので八つ当たりする。それが帝国のやり方か？ ずいぶん時間が経つのに、俺たちのことを何も知らないのは興味が欠片も無かったんだろう？ 自分の職務怠慢によるミスを国柄の所為にでもするか？ 今まで凄く我慢したさ。あくまで相手は使者の護衛で腕っ節のみを判断基準にして、肝心の「学」の部分は使者殿に任せているはずだと、言い聞かせたさ。その舐めきった対応も水に流してお互い傷を負わずにこの場は流そうとした。だが！ 貴様が皇帝で、帝国の… 一つの国の長か！ なら、俺はこの対応が帝国の本心だと受け取った！ 相手のことを調べずに好き勝手やって適当にする、そんな無責任な大人に俺の友達は任せられない！ 長がこのザマでは帝国内部の高は知れた！ 貴様等と友好関係を結ぶメリットは無い！ 俺もお前等の流儀に従って好きにさせて貰う！ 先ずは、皇帝貴様の首を落とす！ そして、此処にいる使者も皆殺す！ そして、帝国を落とそう！ 逆らう全ての命を刈り取り、恐怖によって人類をまとめ上げて見せよう！」

「なっ、お前、何を言っているのか分かっていないのか!? お前は勇者だろ

う！」

「ああ、勇者だ。俺は勇者だ。勇者は人類を守る物だ。そう、最終的な勝利に、人類が子孫を残せる状態にすれば良いのだろうか？お前達の言う敵を全て殺せば良いのだろうか？魔族も魔物も、亜人も皆殺し、最後の勝利に人間の男と女が一人ずつでも残れば、人類の勝利だ！それに協力をする気が心から無いのならば、内部崩壊する可能性が欠片でもあるのならば、摘み取ってしまうのは可笑しな事とでも言うのか？ああ、俺は勇者だ。勇者なんだ。貴様等を救う勇者なんだ。あらゆる魔物を殺し、魔人を超えて、数え切れないほどの屍の山を築くだろう！力尽くでな！こんなもの、人の形をした災害や怪物と何ら変わらないさ！数多の英雄達が、人を苦しめる怪物を倒しても、その民衆もの手で殺されてきたのだ！皆が思っているのだ！人の形をしているだけで、アレも化け物だとな！」

自分の頭が熱を帯びている。

歯止めが効かない。

皆に見せている天之河光輝ではなく、俺だけが知っている天之河光輝になっているのだろう。

もう、皆は俺と距離を取るだろう。

誰も、俺の隣には立たないだろう。

だが、それで良いかもしれない。

どうせ、クラスの輪っかの中にはもう、戻れないのだから。

「勇者殿」

イシユタルの声が響く。

「貴方にも思う所があったのかも知れません。しかし、此度は友好を結ぶ場所。そのような例え話や王としての在り方を話す場所ではありません。しばし、頭を冷やされよ。今の怒りに捕われた貴方では冷静な判断は出来ておりません。ガハルド皇帝陛下、勇者殿の粗相を見逃して頂きたい。彼は、彼等は既に大切な友の命を失ってしまう経験をしているのです。それで気が立っているのです。どうか」

「あ、ああ。わかった」

少しだけ、落ち着く。

今のままでは、俺はともかく皆の印象も悪くなる。

「申し訳ありませんでした。皇帝陛下、血が上りすぎておりました。貴方の国と貴方を侮辱したことは謝罪を。国王陛下、情けない所をお目にかきました。また同じ過ちを繰り返す前に、頭を冷やしてきます。夜の晩餐会には出席致します。それでは……失礼致します」

部屋に戻り、一人ベッドに顔を埋める。

皆を守るはずが、危険に晒してしまった。

何をやってるんだろうと考える。

コンコン

扉がノックされる。

返事をするのもだるいぐらいだが、しつかりとする。

というよりも、此処まで接近されているのに気づかないのは相当参っているようだ。

「鍵は掛けない。入ってきてどうぞ」

「では、失礼します」

入ってきたのはリリアーナ王女殿下だった。

多分、会見は俺の所為で半ば強制的に終わったのだろう。

王国からしたら堪った物ではないはずだ。

俺に、文句の一つや二つはあるだろう。

向こうからしたら、人類存続のための大きな一歩が台無しにされたのだ。

勇者といえど許されはすまい。

「申し訳ありません、王女。私一人の身勝手な理由で貴女方の努力を水の泡にしてしまいました。人類が真に協力し合い敵を討つ千載一遇の機会を、個人的な恨みで奪ってしまいました。貴女に勝利をと言ったのにもかかわらず、自分自身にすら負けてしまいました。言い訳はしません。いかなる罰も受け入れましょう」

彼女の優しさにつけ込んでいる自覚はある。

王族の一人を味方に付ければ、最悪の判決は免れると。

「貴方は、天之河様は自分に凄く厳しいのですね。あの時の謁見の後も… 私達では勇者を罰することは出来ません。天之河様自身が仰った通り、貴方の力に頼るしかない私達では、裁くことは出来ません。余程のことではない限りは。そして、貴方の言い分は至極まともなものですから。ですが、きつと貴方はそう言われても自分自身を許せないでしょう。きつと他人から許されても自分を責め続ける。ですから、貴方に私から罰を与えます」

「如何様にも」

「私と友達になつて下さい。雫や香織とも違う、初めての男の友人に。対等な男の人に、なつて下さい。確かに、私は王女という立場で、貴方は勇者という立場です。きつとこの関係ですら周りにはより特別に映るでしょう。貴方が最初にしたように一定の距離を開けた方が良いのかも知れません。それでも、私は… もう、我慢できなくなつたのです。対等な友人を得て、政治的な観点もなく笑い合える人を作つてからは、もう昔のようには割り切れないのです。きつと欲張りなんです」

彼女の本音だ。

例え、器であつても人なのだ。

どうしようもなく、彼女は人間だった。

システムとして皮を被つていたけれど、心は見た目相応の女の子だった。

それでも、俺は彼女を神か勇者に変えてしまつたらう。

だが、彼女の本音を聞いた者として、せめてその時が来るまでは、友であらう。

「わかつたよ、えつと、リリイと呼んで良いかな？俺は光輝で良いよ。内緒にしている方が辛いと思うから、もう名前で呼んでくれて構わない」

「はい。光輝、よろしくお願いします。それに…」

リリアーナ王女が俺の胸に耳を当てる。

周り見られたら、言い訳できないぞ。

だが、ああ幼いなりに俺を説得しようと頑張っているんだろう。

「心音がすっかりしています。貴方は生きています。そして、明確な弱点もあります。貴方は人間です。怪物なんかではありません。この心音が途絶えたら貴方は死んでしまうのです。英雄というものはあまり分かりません。ですが、貴方が誰よりも優しく強くて厳しい人なのは知っています。何より、この王女たるリリアーナの友人なのです。そんな人が怪物な訳ないですから。私の友達を貶すのならば、例え本人でも、もう許しませんよ？」

「肝に銘じておきます。リリイ」

恐れを知らずに、強大なる者にそつと寄り添う。

ああ、古い物語ではきつと攫われてしまうような人間だ。

弱々しいのに決して消えない。

けれども、いずれは自滅する危うい光に、俺は固執していたのかもしれない。

失った物の変わりを求めて…

その後、落ち着いた俺は、改めて皇帝陛下、並びに帝国の関係者に謝罪の後、お互いに足並みをそろえることを話し合い、帝国との会見は完全な終了を告げた。

## 記憶・記録

私は、久方ぶりに眠りについた。

ここに来た頃から、悪夢に悩まされて、遙か昔に眠ることを止めていた。

しかし、何故だろうか。

彼と出会ってから、私は人間だった頃のようになっている。

彼に惹かれ始めている。

それをどうしても認められない。

弱い人間としての私を認めるのが凄く怖かった。

悪夢を見てもいいから、今は全てを忘れたかった。

故に眠りにつく。

いつもならば、あの頃の私が見えるはずだ。

しかし、私の目の前には、息が上がり、周りに汚物を吐き散らした後で気絶している少年と、少年を涙ながらに抱きかかえる老人の二人しか見えない。

周りを見渡して、ここが少年と老人が住んでいる屋敷の庭であることが分かった。

「すまん、すまんなあ。光輝。お前には重いものを背負わせてしまう。

儂は、家族を失いたくない余りにとんでもないことをしたのだ。儂で全てを終わらせたかったのに…… すまんなあ」

老人は謝り続けている。

ただ、一目で分かるのは、その老人は途方もない実力者だと言うことだ。

「儂は、お前を救う代わりに、お前に地獄を与えてしまった。お前を世界に売り渡してしまった。すまんなあ。お前には多くの困難が巡り来る。世界がお前を愛して試練を課すだろう。この爺を恨んでも構わん。全ては儂が魔の道から遠ざけた所為だ。いずれ訪れる困難に立ち向かうために、お前を歴代最強の当主へと仕立て上げよう。儂の

全てを、倅に一切教えなかった、天之河の全てを教え尽くそう」

そう言つて、老人は恐らくこの世界の魔法を扱う自身の回路、その一部……いや、半分以上を少年、いや、気絶している光輝へ移植した。「ツツツツ!!」

言葉を発することが出来ず、その場で痙攣し出す。

そして、場面が移り変わる。

この地球では魔術という、魔道を光輝が、光輝の祖父である天之河完治から教わっていた。

「光輝。お前は基本的な魔術をある程度の水準で収めた。ここからは、独力で伸ばしていくのだ」

「はい。お祖父様」

「よろしい。では、これより、我が一族その秘技の一つを教えよう」

「本当ですか！やっただ！」

少しだけ、少しだけ……可愛いと思つてしまった。

いけない、いけない。

しっかりと見届けなければ。

「我ら天之河家は永き家系であるのは教えたな。本家が此方に流れたが、中華の国が本来の我らのルーツだ。天之河の名の通り、天ノ川、七夕に由来する家系だ」

「あつ、だから叔父さんのお家は牛を主に使う酪農家で、叔母さんは機織りをしてるんですね！」

「ああ、その通りだ。よく分かっているな。偉いぞ」

「えへへ」

あ、あつ、あう。

子に恵まれなかった私は一瞬だけ、この子を息子にしたいと思つてしまった。

「今回は、織物をしてもらう。儂の先代までは、その織物は概念礼装として、破格の価値を生み出しており、一財産を築き上げ、華族であった時期もあったのじゃぞ。無論、我らの腕は鈍ることはなかった。ただ、まあ、買い手が殆ど居なくなつてしまつたがな。だが、それでも定期的に色んな神社に奉納等はしておる。儂の代で終わらせると宣



言したんじやがなあ。まさか、お前のような才能の塊が生まれてしまつては、重い腰を上げてしまったわい」

「っ！ありがとうございます。お祖父様。俺、お祖父様の期待を裏切らないように、頑張る！」

「おお。では、儂が手本を見せるから、光輝もやってみなさい」「はっ！」

織物を織っていく光輝と完治。

今度呼び出して、着物でも作ってもらおう。

初めての作品で、金を出しても良いと思える出来映えを見せつけるのだ。

今は、もつと凄いに違いない。

「おお、うまいぞ」

褒められた光輝は満面の笑みを浮かべていた。

その後の光輝の成長は凄まじかった。

叔父のところ、牛の戦車を見事に操り、中華の国と呼ばれる場所にいる親戚に武術を教わりメキメキと頭角を現す。

とくに、剣を用いた技や弓の腕前は大人をも圧倒していた。

この頃から、彼は強かった。

だが、上には上がいる世界でもあった。

大人達と模擬戦をすると、どうやっても経験の差で負けてしまう。

しかし、彼は何度も立ち上がった。

祖父に認められるために、挑戦することを止めなかった。

祖父の完治は偉大な男だった。

正義を体現したかのような男だった。

凄腕の弁護士としても活動していた。

かつては法政科と呼ばれる場所に所属もしていたようだ。

光輝に魔術師としての心構えを教えながらも、その魔術を使って多くの人を救っていた。

しかし、光輝が九つになる前に、完治は死んだ。

病に倒れ、自身の魔術回路を光輝に託して死んだ。

光輝の両親も小さい頃に亡くなっており、親戚が光輝を養子にし

た。

光輝は一月経った頃には家出をしていた。

律儀に義理の親に家出をしますと伝えてから出て行った。

人を救う正義の味方としての完治が、呪いになっていったのだ。

その後、光輝は单身海を渡り、時計塔なる所へ門を叩いた。

祖父のことを上の人間の何人かが知っていたためか、直ぐにその一員になれた。

順調に彼は、強くなっていった。

知恵を身につけた。

でも、彼は消耗していった。

魔術師としての心構えをしつかり持っていても、どうしようが無いほどに、光輝は正義感が強かった。

見て見ぬ振りをして、悲鳴に耳を塞ぎ、機械になった。

そして、光輝はある女を見つけて、見つめ合ってしまった、悲鳴を上げた。

そして、光輝はその女の子を連れ出して、行方をくらました。

正義のためにと光輝は呟いていた。

本当にこれは正しいことなのか？

私は疑問に思った瞬間に、目を覚ました。

「…ノイント？」

目を覚ますと最初に移ったのはノイントだった。

私の優秀な手駒。

私の手となり足となり働いてくれている。

「主は、魔されておりました。仮初めの肉体を作られて、初めて魔されました。私は、独断で主を看病致しました。主の美しき身体を布越しとはいえ、触れてしまいました。申し訳ありません。かつてならこのような不埒な真似はしなかったのですが、何故でしょう。胸の辺りがキュツてなりました。不快感とも違う何かに襲われて、行動せずには

いられませんでした。いかなる罰も承ります」  
心が芽生えている。

彼女は人間へと近づいていつている。

それが我が子のように嬉しく思う反面、必ず訪れる分かれを思うと、胸が痛む。

私は、この世界を滅ぼしてでも、私の故郷を救う。

世界が滅びるとき、彼女たちもその命運を世界と共にするだろう。

彼女たちの故郷は此処だから。

「ありがとう、ノイント。もう大丈夫よ。貴女にはこれからもつと動いて貰うわ。鍛錬に励みなさい」

「了解致しました。では、此方が替えの衣装です。それと、朝食も運んで貰っています。失礼しました」

感情を注いではいけない。

私は、私の幸せを、私の最愛の人を、故郷を取り戻す。

何を犠牲にしても、誰から罵られようと救ってみせる。

でも、どうしても、最近になって頭にちらつく。

愛しい故郷に大きな屋敷を建てて、愛しいあの人の隣には、あの頃の私がいて、周りには仲間達や親しい友人達、村の住民達もいる。

屋敷にノイントやその妹たちがメイドとして使っていて、そして…

「私は…何を考えて」

あれは理想だ。

いくつもの奇跡を使った所で叶うはずが無い。

多くの命を踏みにじった私には決して訪れない最果ての夢だ。

絶対の切り札と引き換えに、私はとっても弱くなってしまうた。

あと一人でも、大切な身内が死んでしまったら…もう、私はエヒトルジュエの仮面も被れないのかも知れない。

「助けてよお、私を守って助けるって約束してくれたじゃない、■■■■

■■■■」

もういない最愛の人を呼んでしまう。

私はこんなにも弱い人間になってしまった。

ああ、私の名前は…！

## 国王の策略

あの日から、俺を見る目が変わりだした。

恐怖や畏怖の感情を孕みだして、遠巻きに見るようになった多くのクラスメイト。

また、過剰に俺を讃えだし、自身の勢力に取り入れようとする貴族も出てきた。

変わらずに接してくれる人は、そういない。

そんな状況を見かねたのか、国王は俺に王女の相手を頼んだ。訓練に参加をせずに、王女を相手にしろと。

皆の訓練の妨げにもならないし、貴族達の牽制も兼ねている。

俺はそれを呑み込んだ。

俺がいる所為で、皆のやる気が削がれて、強くならず死にやすくなるぐらいなら、王の策略に乗るのも構わないと思っただからだ。

そして、今日から俺はリリーの相手を始めた。

たわいもない世間話をしながら、茶菓子を食べ、紅茶を飲む。

リリーが言っていたが、この茶菓子も紅茶も彼女が作った物だそう  
だ。

「光輝は何か得意な事つてありますか。あつ、戦いに関する事以外  
でですよ？」

「そうだね・・・」

得意なこと・・・何かあつただろうか？

高校生になってからやっていないけど、自慢できる特技を思い出  
した。

「最近はお来ませんでした。織物を少し。そうだな、そちらで言うド  
レスとかは簡単な物なら少し時間をくれれば作れると思う。まあ、や  
るにしても久々にやるから腕が鈍っていきそうだけだ」

「それは素敵ですね。でしたら、私のドレスを作ってくださいませんか」

「良いのか？正直、あまり良い出来になるとは思わないけど、本当に  
？」

「はい。私には貴方が織った物という事実が重要なのです。無論、王

女にも。それに、私の手作りを食べさせたのです。少々不公平ではありませんか？」

「確かにそうですね。年下の可愛い子が手作りのお菓子を振る舞ったのに、返礼がないのは、頂けませんね。分かりました。この天之河光輝、全力を尽くしましょう。ただ、少しだけ時間を下さいね？」

「はい」

機材は、投影してエヒトにでも力を借りて再現しよう。

きつと、彼女はその作られたドレスを着て舞踏会に出るのだろう。

恥ずかしくない出来にしないといけない。

「ところで、光輝。貴方に夢はありますか」

「夢？」

リリイが語りかけてくる。

「私は、夢という物を抱いたことがないので。私にとって立派な王女になること、国の歯車になることは使命であり、役割でもあります。そうでなければいけないのです。私にとってはそれが普通のことでした。ですが、側近や専属の侍女が付いてから、彼女たちは言うのです。夢でしたと。ですが、対等ではない彼女たちには、夢のことを聞けないのです。王族である私が、こんな子供じみたことも分らないのかと失望されたくないのです。彼女たちはそのようなことを抱くはずがないと思っても確信出来なくて、聞けませんでした。ですが、今の私には、対等に話し合える友人が出来ました。雫や香織にも聞くと思うているんです。ですが、男性の意見も聞きたいと思いついて・・・貴方を頼ったのです。光輝、私に夢を教えて下さい」

普通なら、辺り触りのないことを言って切り抜けるだろう。

自分の夢を語って終わるだろう。

だが、彼女を納得させるには、それではいけない。

リリイは夢に対して、無垢な少女なのだ。

考え方その物が無いんだ。

だからといって、夢を自身の経験から得た答えだけで教えて良い物だろうか？

だが、俺は俺でしかないから、教えられることは一つぐらいだ。

「俺が、貴女に教えられるのは、考え方の一つに過ぎない。それでもよろしいですか？」

「はい。よろしくお願いします」

でも、彼女の真剣な瞳を見れば、答えてしまう。

彼女だけではない。

追究する者として、学びたいと意欲のある人間を邪険に出来ない。「俺にとって、夢は呪いでした。あの日に誓った夢は、自分自身の手で壊してしまいました。夢を叶えられなくなったからこそ、理想と現状の差を明鶴に感じてしまう。そう、諦めきれない、割り切れないからこそ、それに縛られ続けるんだ。リリイ、夢を持っていないと言っていたけれど、俺から言えばそのままの方が良い。理想と現実の差を糧にして自身を奮いあげて磨き上げる。その原動力へと変えられるのなら良い。だが、それが出来る人間はそういない。俺は出来なかった。だから、俺としては夢によって叩き潰されるぐらいなら、夢は見ない方が良いんだ」

そう、これは俺の後悔でもある。

本当に夢を諦めていれば、また違った道を歩めたかもしれない。

最初から星に命が捧げられている身であるため、抑止の守護者になることは変わらないだろう。

でも、それでも、あの日まで戦う事はなかったのかも知れない。

幼き日の戦いの日々を否定するわけではない。

だが、二度目の生を得て、一般的な人間の生活を、遅れた時間を取り戻そうとすればするほど、別の道を歩んだ姿を思い描く。

「では、光輝の夢は何だったのですか？」

リリイが少し俯きながら問いかけてくる。

予想していた内容だった。

ここまで、彼女が見てきた景色とは真逆の物を教えた。気になるのも当然だろう。

これで問いを投げかけるなど言うのが無茶な話だろう。

「俺は昔、正義お祖父様の魔術師お父様に成りたかったんだ」

だが、それは不可能なことだった。

自分の正しさに従って行動すれば良かった。

あの時こぼれ落ちた願いを自身の物にすれば良かった。

だが、俺は、他者の正しさを、千差万別のそれを纏っていった。

だからこそ、誰かの正しさと正しさとの間に悩み、果てには自分の正しさも忘れていった。

気づいてときには、引き返せない所まで落ちきっていた。

自分で理想を汚してもいた。

「やはり、私には難しいです。でも、貴方がその事にだけは後悔があることは伝わりました」

お互いに紅茶を飲み、少し無言になる。

静寂を打ち破ったのはリリイだった。

「もし、その、よろしければ、私に夢が出来たら聞いてくれますか？」  
こんな空気で会話を終わらせたくなかったのだろう。

少しでも、明るくしようと考えて動いただろう。

それが凄く微笑ましい。

「ええ、俺で良ければいつでも」

そうして、本日のリリイとの対談は終わった。



## 花鳥風月が似合う侍

目を少し跨ぎ、俺たち勇者一行は再びオルクス大迷宮の攻略に差し掛かった。

今度は、攻略するまで帰還しない予定である。

リリイへのプレゼントを贈るのはまだ先になりそうだ。

周りと話すこともなく、俺は一人空を眺めていた。

そうしていると、いきなり肩を叩かれた。

そちらに顔を向ける。

ごつごつとした感覚が頬に当たる。

「何するんだ、龍太郎」

少しジト目になりながら、俺は話す。

「引つ掛かったな！それに、コレをされるとお前は少し機嫌が悪くなるからな！」

「じゃあ、やるなよ」

「おう、もうやらねえよ。ただ、お前が俺の知る天之河光輝のままだつて言うのを確認しただけだ」

「そうか。俺はいつも通りだよ」

「すまねえな。大分、気を使わせていたみてえだな。突然の事で、お前を避けちまっていた」

龍太郎なりの気遣いだった。

自分に真つ直ぐで、素直な奴だ。

「でも、お前はお前のままだった。相変わらず本音は胸の奥に閉まっているみたいだが、お前は溜め込まない。我が儘はしつかり言えることを俺は知っているからな。そんな時にドシツと受け止める。だから、俺たちを頼れとは言わない。でも、遠ざけるような真似はしないほしい。俺たちはそこまでしなればいけない程、弱な奴ではないからさ」

「俺の方こそすまなかった。独りよがりの感情で皆を避けて、皆を不安にさせてしまっていた。本当にすまない」

謝ることしか出来ない。

胸に秘めている思いを打ち明けることが出来ない以上、相互理解を取ることは出来ない。

単独行動が出来れば、自分の心は休まれるのかと考えてしまう。そんな自分がどうしても嫌いだ。

時間は流れて、俺たちは再びオルクス大迷宮の六十五階層を乗り越えて、人類未到の地を歩いていた。

歩いていると、雫が話しかけてくる。

「ねえ、光輝」

「なんだい、雫」

「やっぱり、可笑しくないかしら。今回の迷宮」

「前回と違って敵がそんなに現れないことがかい？」

「それもだし、回りの壁には血が飛び散っているし、殺された魔物の魔石も回収されていない。傷口もとても綺麗で、共食いとも思えないわ」

「メルドさんも、やはり可笑しいと思いますか？」

「こういうときは原住民に聞くのが手っ取り早い。」

若しかしたら、魔物の襲撃頻度は前回が異常なだけだったという可能性もある。

「俺自身此処までの階層にたどり着いた事がないから、確証は持てない。だが、俺の今までの経験から言っても異常と言えるだろう。俺たちの存在を捕捉したなら、直ぐさま襲いかかるのが魔物だ。そんな奴らがここ数日遅う気配を全く感じない。認めがたいが、先客がいるだろう。各々注意しとけよ」

メルド団長の言葉によつて、皆の中に緊張が走る。

この世界の誰もが到達出来ない場所が今いる場所だ。

神から与えられた特別な力を持っている自分たちが束になって、ある程度の安定した進行が出来る。

紛れもなく自分たちが人類最強の一角と自負していた所に、自分たち以外の存在がいる可能性が浮上したのだ。

味方なら良いが、それがもしも敵だったならと思うと、その緊張は計り知れない。

警戒をしながら歩き続けると、魔物の群れが一カ所に攻撃を集中させている所を見つける。

「各員、戦闘用意！魔法詠唱開始せよ。前衛突っ込むぞ！」

直ぐに指示を出して、俺は突っ込む。

だが、俺が走り出すのと同時に、魔物達は崩れ落ちた。

「ほう、このような面妖な場所に人がやってくるとわなあ」

そこには陣羽織を着て、長大な太刀を振るった美丈夫がいた。

## 剣の極地その一端

たったの一瞬の出来事だった。

あの侍は一回しか刀を振っていなかった。

二連続で斬りつけたわけではない。

だが、あの瞬間斬撃は確かに二つあった。

魔法の領域を俺はこの目で見てしまった。

胸の高ぶりが押さえられない。

魔術師として、アレを見せられて興奮しない方がどうかしている。

動かなくなった俺を不安に見つめる雫。

警戒を解くそぶりのないクラスメイト。

交渉をしているメルド団長。

それをよそに、俺は侍に話しかける。

「多重次元屈折現象。なあ、侍。もう一度さっきの一回で二回斬るその技を見せてくれないか？」

「ちよ、ちよつと光輝！何言っているの？今メルド団長が交渉しているのに、水を差す真似をしないの！いきなり動き出したかと思えば、意味分からないことを言い出して。さっきのは私達に見えない速度で二回斬ったのよ」

「雫、すまないが黙っていてくれないか？俺には、この侍の技は途轍もなく重要なことなんだ！」

「えっ」

そう言つて、俺は雫が肩に乗つけた手をはね除ける。

「私の技を見抜いた者は皆それを聞く。そんなに珍しいのか私の技は？」

「珍しいなどと言うレベルでは無いさ。一生を費やして、その可能性に触れられるか触れられないか。そして、俺はようやく見つけたのだ。この機会を逃す訳にはいかない」

皆は何を言っているのか理解していないだろう。

メルド団長ですら顔には出していないが、疑問を抱いている。

「残念だが、私の技は見せ物ではないのだ。見返りも無く見せる物で

はない。今のお前に私を満たす強さが備わっているようには見え  
ない。そこにいる女のような花でもない。潔く諦めよ」

彼は強き者との競争に飢えているのだろう。

それと、欲を殺し武を極めた、という訳ではないようだ。

「俺たちに着いてきてくれれば、強者と戦闘出来ることを約束しよう。  
相手は槍の英雄だ」

「ほう」

考える素振りをし始める侍。

俺は後ろにいる雫に指を指す。

「それに、好きなだけ雫と話すことも出来る。強い所を見せればコ  
ロツと堕ちるかもしれないぞ」

「ちよつと！光輝！私を巻き込め」その話、違えるなよ」私は良いつて  
言っていないわよ！」

「すまない、雫。俺の、いやこれほどの強者が味方に付くんだ。皆のた  
めに犠牲になれ」

「ふ、巫山戯るのも大概にしなさいよね！いつも私が貧乏くじを引く  
んだからあ」

危機を感じ取って剣に力を込めて、斬撃をギリギリで防ぐ。

防げなかつたら、首が飛んでいただろう。

だが、頭に響く警告は激しいまま。

理由は分かる。

時差なく飛んできている二撃目だ。

右足で左足を払い、大きく体勢を崩す。

結果、鎧は碎ける。

腹から左肩へ向けて大きく斬られ、辺りに鮮血が飛び散る。

感覚的に臓器が飛び出ていると思う。

皆よりも後方の方まで飛ばされ、後ろに控えていた騎士の一人に  
キヤツチされる。

「ほう。全力ではなかったとは言え、死なぬとはな。驚くしかない」

「てめえよくも光輝を！」

侍の言葉に怒りをあらわにする龍太郎や前衛メンバー。

「嫌アアー!!」

悲鳴を上げパニックに陥る心の弱いメンバー

「不味い。傷口は深いし、臓器が足りない!ありったけの回復薬を使って延命しろ!治療師は急いで詠唱を!」

指示を飛ばす精鋭の騎士達。

久しぶりに大量の出血と激痛に襲われる。

だが、それを理由に動かなくなることを俺は許さない。

剣を杖にして立ち上がる。

「光輝君!傷は深い。動くんじゃない!」

「忠告ありがとうございます。でも、止めないといけないので」

そう言つて、前衛組まで跳んでいく。

「龍太郎、永山くんも落ち着け。俺は生きているし、斬るように頼んだのも俺だ。彼に怒りをぶつけるのは筋違いだ」

「でもよ、何も斬りつけることはないだろ!横で見せて貰うとか、寸止めとか、色々他にもあるだろうが!もつと自分を大切にしろよ!死んじまうと思つただろうが」

「坂上の言うとおりで。お前は俺たちの中で一番強くて一番便りにしているんだ。お前がいないと、俺たちは大迷宮を攻略出来ない」

「それに、光輝。アンタが死んだら、私がリイに報告しないといけないのよ... もう無茶しないで。親友に親友が死にましたなんて私は言いたくないわ」

「光輝くん。私が治せない傷を負ったら、ホントに死んじやうんだよ!もう私に救えなかつたつていう非力さを与えないで」

ここまで、ここまで皆の心は弱まるのか。

心配してくれるのは嬉しい。

でも、この調子で本当に戦えるのか?

逆だ。

戦わせてはいけないんだ。

少なくとも魔人や亜人とは戦わせてはいけない。

一緒に戦つてくれているから忘れていた。

彼等は戦士ではなく、守られるべき子供だということ。

守らないと。

護らないと。

マモラナイト。

「ああ、もうあんな無茶はしない。約束だ。それにほら！もう傷口は塞がりだしている。無くなった臓器も再生し始めている。あんまり心配するな」

そう言うと、皆ほっとし始める。

「良い友情だな。勇者殿？名乗るのが遅れた。アサシンの佐々木小次郎という。よろしく頼む」

「勇者の天之河光輝です。此方こそよろしくお願いします」

そう言っつて、俺はアサシン、佐々木小次郎と握手をした。

「嘘！佐々木小次郎って本物!？」

「いくら何でも、別人だろ雫。江戸時代の人間が生きてるわけ無いだろ！」

「どうであろうな」

こうして、今回の大迷宮攻略は終わりを迎えた。

想い

佐々木が仲間に加わり、ハイリヒ王国に客将として招くために、大迷宮攻略を早めに切り上げハイリヒ王国へと帰還を急いでいた。

「メルドさん。すいません、ちよつといいですか?」

「どうした? 光輝。何か心配事か?」

場所の中でメルド団長に話しかける。

聞きたいことは一つ、壊した鎧についてだ。

「今回で鎧を壊してしまっただんですけど、これって怒られますかね? 経緯を説明したら絶対怒られると思うんですけど...」

「正直、俺も怒りたい。だが、交渉がスムーズに言ったのも事実だしなあ。まあ、その辺は小次郎殿とも口裏を合わせておこう。それに、鎧は多分作り直すからな。しばらく迷宮攻略には参加出来ないだろう。代わりの鎧もあるが、貸してくれんだろうな。勇者様には似合わないって理由でな」

メルド団長の口調がいつもより少し棘があるように感じる。

まあ、自殺しようとしているようにしか見えなかっただろうから、仕方の無いことだ。

「分かりました。士気向上のためにも、見栄えは大事ですよ。今回は本当にすいません。完全に私情を優先しました。牢に入れられても仕方ないと割り切れる位には」

「俺たちは、お前達の事情を詳しくは知らない。お前個人のことでも余り分かってはいない。だが、お前が理由もなく無茶をする奴ではない事だけは分かる。それに、俺に怒られるよりも、昔からの付き合いがある者に怒られた方が堪えるだろう...。それで、何か得られる物はあったか?」

メルド団長は言いながら冷静になっていき、自分たちと俺たちの間で埋めなければいけない問題を見据えつつ、返事を返す。

「ええ。自分には決して出来ないと言えぬが、諦めが付くぐらいには得られる物がありました」

「それは良いことに入るのか?」



「勿論。出来るかも知れないという淡い希望に身を委ねて、時間を無駄にするよりは。俺にとつては確かめることは重要なことでしたから。出来ないと分かれば諦めが付きますから」

「そうか…。俺からは何を言えば良いかは分からん。ただ、泣けるときには泣いてくれ。今のお前は、無理矢理自身を押さえつけ締め付けているようにしか、見えない」

一組織のリーダーとして、メルド団長の人を見る目は確かだ。人生経験も豊富なのも理由だろう。

俺は自分が想定している以上に、ショックを受けているのかも知れない。

自分自身の感情が、もう分からないのかも知れない。

自分自身のための感情は、あの日の憎悪の一撃と共に砕けただろう。

思えば、天之河光輝として再スタートをして、他者と自身を天秤に掛けて、自身を優先させたのは、今回が初めてだっただろう。

「ありがとうございます」

どう返せば良いかが分からなかった。

人に会いたいと相談は出来はしない。

相手が今生きているかも分からないし、仮に逢えたとして向こうとは初対面だろう。

そんな頓珍漢なことを、相談は出来はしない。

そして、馬車は走り続ける。

閉じていた目を開ける。

そこには、美しい白のドレスを着たお姫様がいた。

本当に王族かは分からないが、高貴な身分なのは違いないだろう。

金髪のお姫様は、夫と思われる者と話をしている。

内容は良く聞こえない。

だが、見れば見る程、疑問に思う。

彼女に俺は会ったことがある。

何故かそう確信が持ててしまう。

場面が急に変わり、庭園にいる夫婦の前を一人の子供が走っている。

その少年の造形に絶句する。

それは紛れもなく、幼き日の天之河光輝そのものだ。

つまり、この夢はマスターが見ている景色だろう。

本当かどうかは聞かなければ分からないが、イレギュラーとも言える俺の存在を除けば、これがマスターの故郷と言えるだろう。

俺がこうして、マスターの内側を覗けるのなら、向こうも同じ事になっっているだろう。

だが、これは過去ではなく、願望だろう。

目の前の天之河光輝が地球の魔術を使ったことで、確信を持った。

マスター達の子供ではなく、過去の景色でもない。

ただ、マスターの故郷を土台にしているのは間違いないだろう。

だが、場面は急展開をしていく。

辺りを炎が焼き尽くす。

マスター以外の全てが焼き尽くされていく。

マスターの胸に刻み込まれた恐怖の存在は、夢や理想すらも呑み込んでいく。

未来へ向けて歩もうとしている者に、手を差し伸べることは出来る。

だが、過去に縛られている者に思いは通じない。

時間は一方向に進む。

流れに逆らうように進むのは無茶だろう。

マスターの願いは叶わない可能性の方が高いだろう。

世界から批判されるだろう。

それでも、俺だけはマスターの、彼女の味方をしよう。

いつの日か、その心に平穏を取り戻し、安らかに眠りにつけるその日まで。

バチン！

一瞬のことだった。

ハイリヒ王国について直ぐ、リリイが正面から迎えに来ていた。

此方に向かつてまっすぐ走って来るから、怪我をしないようにと腕を広げて待った。

リリイはそのまま俺に泣きついた。

早馬によって知らされたのだろう。

どのような説明を受けたかは分からないが、俺が斬られて負けた事は伝わっているだろう。

どうした物かと思ひ、周りに助けを求めも、無視される。

特に雫は自業自得という目線で刺してくる。

まあ、自業自得だし、雫がフォローに回ってくれない程のことをしたので、文句は言えない。

泣いている子供をあやすように、リリイの頭を撫でて、背中をさする。

どれだけ取り繕っても、リリイは十四歳の女の子だ。

それも、王族として生きてきた故に、友達の危機という物には一層敏感なのだろう。

「凄く、心配したんです。夢の中でも安心出来なくて、目が覚めたら、嫌なことを聞くんじゃないかと、不安で不安で」

顔を埋め込みながら、泣きじやくる。

そして、周りには聞こえないような押し殺した声でリリイは心に秘めていた思いを語る。

「悲しいですけど、俺たちはこれからもつと傷つくでしょう。だからこそ、生きて貴女の元へ帰ってきましょう。ですから、泣かないで下さい。リリイ。貴女が悲しんでしまえば、俺たちは全力を出せない。王として、貴女は間違っていたとしても、何を犠牲にしても笑って下さい。兵の死を無駄にしないで下さい。今の貴女には重い荷でしょうが、どうか覚えていて欲しい。多くの兵士が貴女たちを護ろうとしていることを。そして、貴女たちに一家の命を懸けていること

も。兵士が自分の選択に悔いを残さないためにも、貴女は笑って下さい」

そう、どんなに暗いことがあっても、自分たちの王が笑えば、民は希望を見出して笑うのだ。

「リレイ、少し疲れたので、紅茶が飲みたい。あと、スコーンも欲しい。用意してくれるかい？」

「はい。分かりました。少しだけ、待ってて下さい」

リレイは少し駆け足で去って行った。

すると、雫が隣にやってくる。

「ねえ、光輝。先のやり取りって… いや、やっぱりなんでもないわ。いつもの事よね」

「そうか。何もないなら問題ないな」

雫がわざとって遠回しに聞いているが、気づかないふりをする。

リレイとゴシップ記事になるのは、リレイに申し訳ないし、俺に勇者としての実績も足りない。

まだまだ、戦わなきゃいけない現状、その立場は足枷になる。

それなら、とぼけて誤解させる方が良い。

「じゃあ、皆。そういうわけだから、俺は先に謁見の間に行かせてもらうよ。今回は時間掛かりそうだし」

そう言つて、この場を去る。

皆が「待て〜」と追いかけてくる。

辛いことが続いて、皆笑顔を忘れてきている。

だから、皆の笑顔が見られるこの一瞬が嬉しい。

そう思っていたんだ。

## 一時の平穩

森は燃え、大地は赤く染まり、怒号や悲鳴により空が震える。獣の骸が無惨に広がる大地に、涙を流すことも無く、勇者は歩く。多くの兵士は畏怖し、歓喜の声を出す。

兵士達よりも後ろにいる少年少女等は悲痛な表情を浮かべ、泣き出し、吐く者もいた。

真つ直ぐに突っ込んでくる獣を、勇者は斬り捨てた。

エヒトルジュエに着物を献上することを条件に、俺は暇な時間を作り次第、リレイへのプレゼントにする着物を作り始めた。

いきなり、織機が現れると皆が驚くだろう。

だが、そこはエヒトルジュエが最初に手を打っていた。

イシユタルを通して、俺に送り届けてくれた。

俺は、送り届けられた織機を自分好みに改造して使っている。

機織をしている時間は凄く幸せだ。

先祖の血が関係しているからだろう。

帯より上の部分は白をメインに据えて、帯より下は黒を強調としたデザインにしている。

その着物は今完成した。

「綺麗だね。今時の魔術師はこんな物も作れるのかい？」

「いや、ヘクトール。それは違う。恐らく作り方を教えればお前達の時代の人間の方が上手に作れるだろう。俺の場合は血筋が特別なだけだ」

「にしても、下手すればそれは宝具に届きうる。信用していないわけでは無いんだがね。教えてくれる気は無いんだろう？」

「織姫と彦星その血筋だ」

そう答えると、ヘクトールは驚きを隠せずにいた。

魔術師にとっては知られたくない物だろう。

だが、俺にとっては血筋は別段問題では無い。

「別に隠しているわけでは無い。それに、知られた所でなんの問題にもならない」

そう、血筋以上にやっかいな物を抱えてしまえば、こんな物はちっぽけな物だ。

先祖返りと親戚一同から言われてはいたが、それでも血は薄く神性を持っていない。

「だから、天之河か。そう言われると、隠してはいないな。寧ろ堂々とアピールをしているぐらいか」

「これでも、そこそこ有名だったらしいぞ。今は没落しているけどな」  
こつちの世界に来て、中国の親戚に会っていないから分からない。

だが、両親が親戚付き合いをしていない現状、余り良い状態では無いだろう。

それに、父はお祖父様の魔術刻印を継いでいなかったのを見ると、もしかしたら、数代前に滅んでいるかもしれない。

本家であるはずの我が実家は滅びた家系と言っても等しいだろう。  
それに、日本にいた叔父さんも叔母さんも、俺の知らない職に就いていたのを見ると、今生でも祖父が魔術師だったのが異例なのかも知れない。

「とりあえず、俺はリリイに着物を渡してくる。まだ部屋にいるなら構わないが、出るときは霊体化して窓から出て行ってくれ。扉は鍵を掛けていく」

「ほいほい。まあ、おじさんも若い子達とちよつくら遊んでくるかね」  
「… ある程度、ある程度で良い。少し、実戦形式の技を叩き込んでくれないか？多分状況がそろそろ動き出すだろうから」

「その感は、多分当たるだろうな。話し合いの段階だからなんとも言えないがな。まあ、任せられたよ」

そう言ってヘクトールと共に部屋を出た。

皆が訓練に勤しんでいるなか、俺はリリイとお茶会をしていた。

「光輝。訓練に参加しなくてもよろしいのですか？その、光輝が強いのは分かっているのですが、皆からやつかみを買ったりすると思いませんし、今からでも切り上げて訓練に参加しに行かれましても、私は構いませんけど」

当然リリイは心配してきた。

普通に考えれば、訓練に参加するべきなんだろう。

だが、ヘクトールに佐々木小次郎と訓練は絶対にやり過ぎる。

人の居ない所でやるのは構わないが、あまり人に見せられる光景では無くなるだろう。

故に、お互い日中の訓練では相手をし合わないように避けている。

「大丈夫だ。それに、今日の訓練には参加しないことはあらかじめ伝えてあるしね。訓練のときぐらい、僕のいない状況でどう動くかを想定して置いた方が良さだろうし。まあ、何も知らない人に何を言われても、俺は痛くも痒くも無いからね」

事実、訓練に参加することもなく、死への恐怖に支配され、夢から覚めた瞬間に戦う事を辞めた相手に何を言われても、俺は悔しいとも思わない。

今あの場で訓練している仲間から文句を言われない間は、なんの問題もない。

「さてと、今日はリリイに渡す物があつてね」

「完成したんですか！」

「その通り。じゃあ、今から着付けの仕方を教えるよ。信頼の出来る女性を数人連れて更衣室に向かおうか」

「そうですね…。光輝も来るんですか！」

「そりゃあ、そうでしょ。初めての着物を着られるの？ぐちゃぐちゃにしてしまつて、俺に脱がされるよりはマシだと思っただけ」

「でっでも！み、未婚の男性と女性でそんな、はっ、はしたない事は！」「俺は妹とかで慣れているし、仕事モードに切り替えれば別段問題は…。」

「~~~~~っ！」

「あー、だつたら、雫借りますか？雫も着物着付けは出来るので」

「そちらで、お願いします」

訓練に参加しないのに、訓練場に入るのは正直嫌なんだが、リリイが恥をかかないためにも雫を呼びますか。

専属の侍女が何やら耳打ちをしているが、絶対に異性関連の事なので聞かないようにする。

更に顔を赤くしているので助け船を出すついでに、リリイに話しかけた。

「雫とは、まだ仲が良いんだな」

「どういう事ですか？光輝」

「いや、雫によつて近衛騎士の一部を切り抜かれたから、怒っていないのかなとね。正直、俺は少し怒るべきだと思うがな。雫にも、あの娘どもにも」

「それは――」

「リリイ、優しさと甘さは別だ。怒らなければいけない事をを怒れないのは、優しさとは違う。確かに、雫自体に落ち度はないかも知れない。と言うより、アレは事故だし落ち度はないだろう。だが、それはそれとして、雫が原因でリリイ、お前に突き入れられる隙が生まれているのも事実だ。お前も気づいているだろうが、敢えて言うぞリリイ。人は汚く醜い面を持つ。稀に持たない人間も生まれるが、大抵そういった人間は他の所で壊れている。まあ、大体の人間は弱さにつけ込んでくる。こういうことは言いたくないが、王位継承の背景の中で貴族は争っているはずだ。減った人員を確保も出来てない現状、王子派の人間にいつ狙われているかも分からないぞ」

「その、通りです。私は」

少し、言い過ぎたな。

現実はいつかり見えているだろうし、今の自分のいけない所はしっかりと見えている。

それとは別で、初めて出来た友達に強く当たれないだろう。

「そういえば、最近は香織もだが、雫も少しオーバーワーク気味な気がするな。佐々木小次郎に刺激を受けているからかな？早めに寝ろつて言わないといけないかな？鎧が届いたら直ぐにでもオルクス大迷



宮攻略を再開したいけど、今連れて行ったら倒れるかもしれない。寝不足による過労で」

「教えてくれてありがとうございます、光輝。着物の事も含めて、自分で話してきます」

「そうかい。俺は、自分がこれから言わなきゃいけない事を確認してただけだよ。行っておいで」

「はいー」

そう言っつて、リリイは駆けだした。

年相応の姿が見られて、俺は満足した。

「っ!!今まで、眠っていたのに都合よく起きるな、我が神は。こんなのを教えられたら、世間話に口出す程度には割り込みに行くか」

周りに誰もいなくて良かった。

独り言が聞かれていたら、正直恥ずかしい。

そうして、俺はサロンへと向かった。

軍神の化身として存在する■■■とは違い、天之河光輝はその力を借りている。

その神性は本来低い。

だが、化身である■■■とは違い、天之河光輝には稀に軍神より啓示が下る。

『光輝。なんか居残りしているクラスメイトと現地の住民がぶつかるかもよ』

基本的にある人物が絡まない限りは、狸寝入りを決めている軍神が何故、啓示を今回出したかは分からない。

可能性の状態とは言え、最悪の事態にはしたくないので、向かったのだ。

流石に、俺がいきなり出るのも良くないだろう。

此処は一端様子見をする。

それに、ぶつかり合ったとしても、最悪を回避出来れば良い。

余程の事にならなければ、俺は出なくても良いだろう。

「なあ、聞いたか？天之河達、遂に七十階層に到達したって」

「マジかよ。でも、天之河も死にかけてたって聞いたぜ」

「でも、その死闘を繰り広げた相手連れてきたんだろ？やっぱ、やる事が違うね！凡人とは違うって事かい」

「そうだよ。やっぱ香織ちゃんとか雫っちとか、ああいう特別っぽい子じゃないとねえ」

「そうそう。雫とかマジ格好良かったもんね。私、うっかり惚れちゃいそうになったよ」

「あはは、なにそれ。百合は鈴だけで十分だって！」

「えっ！鈴ちゃんてガチなの!?!」

「いや、アレは前世おっさんでしょ、絶対」

最低限働いているはずだ。

そういう契約をしたから。

さて、言動は置いておくとして、別に彼等彼女等の行動を批判する気は無い。

そもそも、死を恐怖するのは、生きる物にとって必要な事だ。

理性がある以上、そこに縛られる事をとやかく言う気は無い。

むしろ、生存本能が高い事は俺にとっては嬉しい限りだ。

そもそも、現代社会に入り浸っていた人間がちよつとのことで戦えるようになれる方が異質とも言えるだろう。

彼等の反応は必然だ。

自分一人だけなら、生きるために変れるだろうが、群れていれば変わる事は難しいだろう。

しかし、周りの侍従達の目線は嫌な物だな。

冷ややか、憐れみ、同情、無関心。

どれも神経を逆撫でさせるかのような物だ。

むしろ、よく怒らないと思う。

お前達の世界の事ぐらいお前達で解決しろと、罵っても罰は当たらない。

まあ、これが日常的なら大丈夫か。

そう思った矢先に…

「… 雫様とて、女の子である事に変わりはないでしょうに…」

その眩きは、会話が途切れた直後に発せられた。

皆が一斉に雫の侍従、二アに視線を向けた。

二アは直ぐさま頭を下げる。

語ってしまった時点でそれは逆効果だ。

堂々と言った方が、相手も傷つかなかったかもな。

「なんか文句あんのかよ」

周りからやつかみな視線を受けて過ごしている中、あの絶望の時間の中にいなかった他人にあんなことを言われれば、当事者としては八つ当たりとは言え怒りたくなる。

「いえ。文句などありません。申し訳ありませんでした」

特に触れる所のない謝罪。

出方としては、悪くない。

まあ、相手がどの部分で怒っているかを知らないと、適切な謝罪は出来ないからな。

「誰も、謝れなんて言っておええ！八重樫さんだって変わらない、それは戦えない、いや戦おうとしない俺たちが情けないって事だろうが！そうならハッキリ言えよ！」

「お、おい淳史。それくらいにしとけて」

「メイドさんに当たってどうするんだよ」

「うるせえ！あんた、八重樫さんは普通だつて言ってたな。俺たちと変わらないって言うんだろう！でもな！一度も死にかけた恐怖を覚えた事のない奴の言葉なんて聞かねえよ。アンタだつて、あの場にいたら同じ事を言うさ！メイドとして生きてきたアンタだつてな！あいつらは特別だつて…。そもそも、お前等があいつらを特別つて言い出したんだろうが！お前等にだけは言われたくない」

「淳史…」

「玉井くん…」

その悲痛な叫びは、今まで我慢してきた物だろう。

「俺だって、分かってるさ。あいつらだって人間だ。お互い支え合わなきゃいけないって。完璧な人間なんていないって事ぐらい。こんだけ生きてりやな！大人だって問題起こす奴がいるんだ。でもな、でもな！俺たちはあいつらにすらがらなきや家に帰れないんだ！お前等は此処に生きてて、時間が経てば勝手に救われるかも知れねえ。でも、俺たちは向こうに家族残してんだよ。親より先に死にたくねえよ。そう思うと、あいつらを助けたいって思っても、立ち上がりたくないけど、足が震えて動けないんだよ！極めつきには、帰れる保証自体は無いんだ。無視しないでだろうってだけで、確約じゃないんだ。こんなんで必死になれるわけがないだろう。だから寄生虫みたいに縫っているんだよ。あそこで戦っている罵られるんだったら甘んじて受け入れるさ！害悪だからな！今の俺たちは！でもな、あんならにだけは、あんならにだけは普通の人間って言って欲しくないんだよ！」

もう、ここにはいられない。

これ以上は、俺の戦いを鈍らせてしまう。

願うなら、彼のこの悲痛な思いに、この世界に住んでいる誰かが正面から受け止めて欲しい。

その奇跡は直ぐに起きた。

ニアは玉井くんを抱きしめた。

それを見て、俺はサロンを去って行った。

夜

俺は、イシユタルに呼ばれて、教会の地下室に向かった。

そこには、イシユタルと教会の騎士数名、そして、愛子先生がいた。早く着いてしまったといった所か。

「イシユタルさん。もう少し遅くに来た方が良かったですか」

「いえ、此方が話を長引かせすぎました。申し訳ありません。光輝殿」  
「天之河くん！どうしてここに」

「呼ばれたからですよ。先生。イシユタルさん要件は？この際仕方ありません。何を言われても、先生は情報を仕入れて此方に来ますよ。生徒のためなら何でも出来る人ですよ。先生は」

「分かりました。単刀直入に言いましょう。ヘクトール殿、佐々木殿と共にヘルシャー帝国に行ってもらいたい」

「亜人族との戦争ですか。まあ、時期的には丁度良いのかも知れませんが。分かりました。勇者パーティーの中から大丈夫そうなのを連れていきますよ。ただ、出来れば連れて行くメンバーは後方で支援をさせていたのですが」

「良いでしょう。元々は戦場を知る事を目的にしていますので」

「この王国で俺の一番の味方はイシユタルしかいない。」

「待って、待って下さい！生徒には無理をさせないと言っていたではありませんか！」

「ええ。ですから前線にいる勇者様方をお願いをしているのです」

「そんな！駄目です！そんなこと。生徒に人を殺せだなんて！いけません！私は絶対に認めません！」

「先生。悪いけど、俺たちは魔族と殺し合いをしなければ、帰る事は出来ない。その為にもぶつつけ本番よりは慣れる機会が欲しいのが現状です。このままでは土壇場で犬死にですから」

「ですけど！天之河くんも嫌ですよね！人殺しなんて」

優しい先生。

きつと、俺が人を殺した事はないと思ってるんだらう。

貴女の考えは尊い。

それを無くさないで欲しい。

そして、それとは別に、勇者として無理を押し通す。

「先生。もう、俺は生徒では無く、人類最強の兵士なんです。人類の兵士なんです。兵士は嫌だからやらないは通用しないんです。やらなければならないんです。そうしないと、皆が……居残り組も危なくなりますから。先生。護る事も良いですけど、ちゃんと救って下さい。先

生は、最近生徒とちゃんと対話出来ましたか？」

「えっ」

「イシユタルさん。数日以内には出発します。お互いに神の加護を」  
「神の加護を」

すかさず、喋れない事を念話する。

『王国の守が手薄になるでしょう。ノイントとその兄弟たちを数名送ります』

『ありがたい。帝国には黒い騎士の狂戦士がいるそうです。敵は分かりませんが、エヒト様は貴方を使ってまでして、あそこを人間に与えたいのだと思います。セイバー殿、武運を』

そして、戦争が始まる。

## 出陣

早朝、愛子先生と教会の騎士数名と、一部の生徒を含む農地改革部隊がハイリヒ王国を出発した。

その後、国王陛下が帝国と亜人族の間で戦争が起きた事を国民全体に伝えた。

同盟国として、援軍を派遣する事を伝えられた。

勇者である俺が出向くのは確定事項だが、他のクラスメイトは参加は自由になっている。

俺は、国王陛下からの命令を受けて直ぐに騎士団の中でも一番槍に選ばれた精鋭達と合流したため、他のクラスメイトが付いてくるかは分からない。

若しかしたら、騎兵部隊と共に行くのでは無く、歩兵部隊と一緒に進軍してくるかもしれない。

「失礼します。騎兵隊の部隊長ロイです。勇者様は、馬を扱えますか？」

唐突に話を掛けられたので、振り向く。

話しかけてきた騎士ロイは、今回俺が同行させて貰う部隊を率いる人物だ。

小柄なのが特徴だ。

彼の率いる騎馬隊と共に、歩兵部隊より先に帝国入りをして、戦場で戦う。

そうすることで、ある程度の誠意を見せつけておくそうだ。

肝心の質問だが、当然馬を扱える。

「ええ、勿論。乗馬の経験はあります。最初の方は迷惑を掛けると思いますが、走る事になれば速くてもなんとか追いつけると思います」

「了解致しました。我が騎士団が所有する馬の中でも選りすぐりの物をお渡しします」

「ありがとうございます」

そう告げた後、騎士ロイは去って行き、俺はその後を追う。

そして、馬小屋につく。

そこにいたのは、周りの馬よりも一回りは大きい物で、角を生やし牙を持ち、大きな翼を持っていた。

白い体に黄金の鬘を持ち、片方の瞳は橙色でオッドアイである。

「これは、立派な馬ですね」

「もつと驚かれると思いましたが。まあ、察しの通り普通の馬ではありません。研究者達の見立てでは神の使いと魔物が混じり合った新種ではと言われております」

「これに乗れど?」

「申し訳ありません。団長方の馬はお貸し出来ませんし、その他の馬では勇者様には不釣り合いかと思ひまして」

騎士ロイは素面でそう言う。

「どうやら、勇者パーティーのことをどう思っているかは分からないが、俺個人の事は凄く嫌いなようだ。」

恐らくは嫌がらせなのだろう。

この世界の住人に、好かれる要素を多く持っているが、それに並ぶほど嫌われる要素を持っているため、そういった反応をされても仕方が無いと割り切っているし、俺で良かったとも思っている。

それに、向こうも厳しい審査を通って騎士になった男。

この白馬よりは劣るが、周りよりも丈夫な足を持っている栗色の馬がいる。

何よりその馬は、この中で唯一白馬に対抗心を抱いている。

俺に白馬の存在感を植え付けて、いつもの姿とは違う側面を見せてから、この馬を紹介しようとしているのだろう。

それに、周りに人のギャラリーが居ない分、嘲笑おうとしているわけでもないようだ。

そう思うと、嫌っているというよりは、敵対心やライバル意識に近いと俺は感じる。

「この馬は、特別なんです」

「特別ですか?」

「ええ。怪我をしていた姿で見つかり、騎士団で保護しようとしたの



ですが、凄まじい抵抗を見せました。当時の騎士団から死者こそギリギリで出ませんでした。引退した人も少なくはありません。ですが、リリアーナ王女殿下を見たその瞬間、嘘のように獯猛な姿を沈めたのです。人の腕を食いちぎっていたとはとても思えないぐらいに静まり返ったのです」

「まるで、その場面を見ていたかのようですね」

「ええ、この目でハッキリと見ましたから」

騎士ロイは俺が思っていたより年を取っているのか、若くして騎士団に入ったのか。

気になってしまいが、今はそれよりも聞かなければいけない事がある。

「では、この馬は王女のでは？」

「それが、違うのです。嘗てはそうでしたが、実際にリリアーナ王女殿下が初めて、白馬に跨がる時でした。この白馬の放つ魔力に耐えられず、リリアーナ王女殿下は飛ばされてしまいました。それ以来、この白馬は王女への面会も許されず、此処で過ごしています。言う事を全く聞かないので、騎士団としては困りものです」

この馬にそんな事情があったのは意外だ。

だが、引つかかる事がある。

馬がなついていないという事は、威嚇なり、無視なり、それ相応の行動を取るはずだ。

なのに、騎士ロイに対して、この馬はそのような事をしていない。

「私がこの白馬に嫌われていないかが、不思議ですか？」

「はい。まあ、その通りです」

「腕ではありませんが、横腹を食いちぎられました。ですが、鋭い一撃を与えたのも私だけでしたので。その時は騎士団長は別件で留守でしたし。強い者には一定の理解があるようです。．．．それだけなら、とつ、話が逸れました。そういうわけで、私以外にも警戒されない者はいます。ただ、そういった面々ですら乗せてはくれません。まあ、私は身長が足りませんので飛び乗れないのが大きな理由ですけど」

「そうですか。でも、そんな馬を俺に？」

「試されるだけでもなさって下さい」

そう言われて騎士ロイに押されて、白馬の前に立たされた。

白馬がその橙色の瞳で俺を見つめる。

そして、唐突に尿を掛けられた。

更にウインキングをし始める。

「ロイさん。この行動って、もしかしなくても」

「あつ、ああ。うっうん！求愛行動でしょう。いやあ、私も彼女がこのような行動をするとは予想外ですね。乗せて貰えるのでは？」

「その前に、この子と二人つきりにして下さい。少しお話がありますので」

「わ、分かりました。その、タオルをお持ちしてきますね」

「お願いします」

そういつて、騎士ロイは去って行った。

俺が余りにも不憫だったからだろう。

だが、賢い馬が人を馬と見間違える事は、そうないだろう。

だからこそ、俺は自身の立てた仮説を元に、白馬に話しかける。

人間を番いにした変態なら諦めるが。

「お前、俺の過去を覗いたのか？」

白馬は縦に首を振る。

「つまりお前は、過去に俺が使っていた馬に恋をしたっていう訳か？」

白馬は縦に首を振る。

「気づいているだろうが、彼奴に会わせる事は出来ない。ライダーのクラスで呼ばれる事が出来れば可能かもしれないが…現状は不可能だ。ただ、俺と縁を結ぶというのなら、一概には言えないだろう。お前は此方側の基準で見ても中々の神秘を保有している。俺の宝具に慣れるぐらいの縁になれば、彼奴に会えるだろう。お前はどうか？このまま、誰も乗せる事も無く、自由に野を駆ける事も無く、誇りも抱けぬままだ飼われて生きるか？それとも、俺と共に戦場を駆け抜け、数多の敵を屠りその名を世界に刻むか？お前の生だ。お前自身を選択しろ」

白馬は自身に付けられている鎖を砕いた。

自由になった白馬はその叫びで馬小屋を震わせた。

「流石は勇者様ですね。ずいぶん手懐けたようですね。どうぞ。タオ  
ルです」

騎士ロイが馬小屋に戻ってきた。

騎士ロイは、白馬には優しい顔を。

俺には、祝福と敵愾心を含む視線を浴びせる。

彼の思惑通りに進まなかったから、もつと嫌そうな顔をするのかと思っていた。

此方側の戦力が上がるのは嬉しいが、警戒心がより高まったといった所か？

「ロイさん。俺の事がそんなに嫌ですか？タメ口で構いません。本音を聞かせて欲しい」

直接揺さぶる。

今回の戦いは、高確率でサーヴァントとも戦うだろう。

後ろから刺される不安を抱いたままでは、戦う事は出来ない。

俺に危害を加えるか加えないか、それだけはハッキリさせたかった。

「正直に私に話を伺った君に、正直に私は答えるべきなんだろうね。君に人としての好意を向けられるかはまだ分からない。こうして面と向かって話すのがそもそも、今日が初めてだからね。今は、悪い人間とは思ってはいないよ。それはそれとして、君が王女に近づいている事は嫌だね。この世界の生まれではない君なら、どの段階でも裏切られるからね。そういった意味で、僕は君だけではなく、君の学友も本当の意味では信じ切れてはいないよ。多分、騎士団の中だと僕ぐらいだよ。だから、気にしないで構わないよ。どちらかといえば、僕が国全体で見れば可笑しい人だから」

単純な王女や王族の崇拝者という訳ではないと感じる。

言ってる事は、王族の事しか目に見えていない狂信者のようにも聞こえるが、彼の目は違う。

「さあ、勇者様。準備が整いましたら、早く出発しましょう。民の列が増えれば、帝国への到着が遅れていきますから」

「分かりました。ロイさん、この子の名前は？」

「アイリスです。大事にして下さい」

「分かっています。行こう！アイリス！」

馬小屋を出て、既に集合していた騎兵隊と共に城を出る。

俺は騎士ロイと一緒に真ん中にいる。

城下町に出た瞬間！

爆発的な歓声が響く。

「騎士様！勇者様！忌まわしい亜人族に裁きを！」

「身の程知らずの獣どもに、人の力を知らしめて下さい！」

「嘗て殺された、同胞達の仇討ちを！」

「俺たちの正義と自由のために！」

勇者！勇者！勇者！と多くの人間が同調していく。

ここまでの盛り上がりを見せたのは、イシユタルが事前に焚きつけたのだろう。

この連帯感を自身達を奮え立たせる事に使ってくれればと思う。

他人に頼り切るのではなく、自身に使って欲しい。

「任せろ！この天之河光輝がいる限り、人類に敗北はない！我が剣、我が身はハイリヒ王国と共にある！この剣がある限り、この国は滅びず、この国が滅びぬ限りは、我が剣は決して折れぬ！吉報を待っていてくれ！」

その考えとは逆に、道化らしく、格好つけた事を言うが、先頭に立っていない時点で、余り意味はないか。

しかし、大きな拍手に指笛、それに女達の黄色い悲鳴。

「余り勝手な事は言わないで頂きたい」

騎士ロイが忠告する。

当然の反応だろう。

「申し訳ありません。ですが、これで失敗は出来なくなりました。後が無くなりました。乗り気で無い人がいたとしても、本気にならざるを得ないでしょう。それに、声援には応えたいじゃないですか」

出来る限りの笑顔を貼り付ける。

現実を知らない、愚かな男の笑みを貼り付ける。

「君は、とんでもない嘘つきなんだな。苦しくないのかい」  
騎士ロイは俺の前に馬を走らせた。

何故、気づいたのだろう。

苦しくはない。

ただ、そんなに演技が下手だったのだろうか。

## 戦火

馬を走らせる。

頬を撫でる風が気持ちいい。

皆が一定以上の緊張をその身に宿している。

そんな中、俺は戦場に赴ける事に、魂が昂ぶっている。

この身に宿す神性が、戦争を欲する。

ただの人間には、成れない定めだったのかもしれない。

生まれ直して、時間軸が違って尚、あの神との縁は切れなかった。

その事を喜ぶ日が来るとは思わなかった。

勇者としての振る舞いを完璧に抑えて、人類全体を鼓舞するのに、この神性は適している。

視界の端に魔獣が映る。

千里眼と騎士団から借りた弓を使い、早急に始末する。

遠くに向かつて、矢を放つ俺を見て、騎士達は苦笑いをしたり、ほくそ笑んだりしていた。

だが、道中に矢に射貫かれた魔獣の死体を見ると、呆然としている。

「先を急ぎましょう。魔獣は見つけ次第、俺が始末します。ただ、一刻の早い到着にだけ皆さんは集中を」

そう告げた後、騎士団の多くは俺に畏れを抱く。

視界に映る魔獣を射殺し、射殺し、射殺し、射殺す。

帝国領付近に近づくと、俺の瞳には純粹な人間と、獣と混ざった人が争っているのが映り出す。

「ロイさん。恐らく亜人と思われる特徴を持つ団体が、帝国軍とが既に争いだしている！急いで助けに生きましたよう！」

好青年の演技をする。

「勇者様、気持ちは分かりますが、落ち着きましょう。帝国軍は人類の中でも強い者達の集まりです。そう簡単にはやられません。先ずは、皇帝陛下に謁見した後、指示を受けてから行動をするべきでしょう。帝国にも花を待たせねばなりません」

騎士ロイの言っている事は尤もだ。

俺自身、本来ならその意見に反対しない。

「花を持たせる？そんな事を言っている場合では！」

否定する素振りをする。

騎士ロイは俺を鋭い眼光で制する。

彼が言っていたように、此方の事情を知らないからそのように行動すると、言ってくるみたいだ。

騎士団の団員も騎士ロイに同調し、俺が意見を言えば、士気が下がるだろう事がうかがえる。

これなら、止まっても大丈夫だろう。

そこまで、話の流れに破綻はないはずだ。

「わかり、ました」

俺がそう告げると、騎士団は帝国へ向けて、今まで以上の速度で駆けだした。

帝国の王城に入城した後、騎士ロイと俺は皇帝陛下のいる玉座に向かった。

「早い到着だな！勇者に騎士団達よ。俺の予想では到着には、あと三日は掛かると計算していたんだがな。早き到着に感謝感激だ」

「ガハルド皇帝陛下より、その言葉を承っただけでも、急いだ甲斐があります。歩兵部隊や志願があれば続くであろう異世界の戦士達は、皇帝陛下の思惑通り三日程で付く事でしょう。本題に入らせて貰いますが、我々は何処の部隊と共に戦えばよろしいでしょうか？」

「ああ、そうだな。自由にして欲ってくれて普段なら言いたい所だが、俺たちがこれから先戦うべき相手は魔族。互いの足並みを揃えなければ、戦いにすら成らないだろう。よし！騎士ロイ。お前達の騎士団は、俺と共に第一大隊と合流をする！その後は俺が随時指示を出す。天之河。すまないが、お前には別行動を頼みたい」

「別行動、で、ございますか？」

「ああ。今の俺たちの……人類の限界を知りたいのだ。魔族の力を見てきた我らの目でな。お前は恐らくは短期終結のためにも、僅かな兵と共に本土への攻撃を行う事になるだろう。そして、俺たちは勇者のいない状態で、魔族達の攻撃を退けなければならぬ。その演習にもできる、絶好の機会だ。これを逃したくわねえ」

「俺は何をすれば良いのですか？ここで待機という訳ではありませんよね？」

「天の河には、帝国の裏側から出て、フェアベルゲンに直接攻め入って欲しい。足並みを揃え、互いの連携を確認するのは当然だが、そこにこだわって敗北するのは馬鹿すぎる。此方の損害が沢山出る前に、ケリを付けたい」

「俺一人で、良いんですか？」

「皇帝陛下！彼は今回の戦争が、初陣でございませぬ！せめて護衛を付けさせて頂きたい！」

「騎士ロイ。ベヒモスを倒せ、人類未到の地へと進み出している男が、その勇者だ。勇者の足を引つ張らない護衛は、悔しいがここにはいない。いざって時に、護衛が足を引つ張るわけにはいかねえ。それに、これぐらい出来なきや、魔族と戦争なんざ夢物語も良い所だ。それに、なにも亜人族を皆殺しにしろとは言つてねえ。フェアベルゲンを突つつけてくれれば、敵も混乱する。そこを俺たちで突くんだけいいか？勇者だけに負担を負わせて勝つんじや、敵がいなくなるだけで、現状は変わらねえ。俺たち人間が全員一致団結して、勝利をもぎ取らなければ、新しい敵が出たときに、人類は同じ過ちを繰り返す事になる。第二第三の天之河達が生まれるぜ。お前はそれでいいのか？騎士ロイ」

「それは……確かに、認めるわけにはいきませぬ」

「他人任せで、全部を終わらせるわけにはいかない。この世界の人間は俺たちなんだからな。とは言え、俺たちが弱いのも事実だ。勝つためにも、互いに最大限の努力をしよう。その為にも、勇者・天之河光輝よ。俺たちに力を貸して欲しい」

皇帝が頭を下げる。



最大限の誠意と努力、そして覚悟。

いくら、俺が強くて、皇帝とは対等には成れない。

目上の存在などもつてのほかだ。

だが、皇帝は対等な交渉相手として、俺を持ち上げた。

これを受け入れれば、何があっても人類の味方でなければいけない。

他のクラスメイトが、仮に人類側から離反した際には、俺が殺さなければいけないだろう。

エヒトルジユエからは連絡はなく、裏切るときは未だと言う事だろう。

「分かりました。互いの全力を尽くして、勝ちましょう。皇帝陛下」

きつと、この道はどこかで、分かれている。

そして、その分かれ道で、互いに殺し合うのだろう。

今の彼になら、殺されても構わない。

そう思えたからこそ、心の底から彼の手を取った。

アイリスを走らせる。

彼女なら、フェアベルゲンの樹海でも万全に走り抜けられる。

だがそれだけではない。

人類を勝たせる以上、圧倒的なまでの一撃を与えなければ、前線を崩す事は出来ない。

フェアベルゲンを攻撃している存在が、たった一人だと敵が認識してしまつては相手も冷静さを取り戻す。

大勢に攻め落とされていくように、見せなければいけないのだ。

そうしていると、轟音が鳴り響く。

戦争が激しくなっている。

人間と亜人族が争う。

状況はそこまで、悪くはない。

一対一なら、亜人に押されるが、二人がかりで互角で、三人で掛か

れば負ける事はなく安心して戦えている。

安心を覚えたのは束の間。

更に奥の方では、別次元の戦いが行われていた。

狂う黒い騎士が、人間もどきな馬と筋骨隆々とした二刀の戦士と戦っている。

激戦ではあるが、トドメは刺さないようにしているのがよく見える。

馬が隙を突こうとするのを、二刀の戦士は止めて、黒い騎士が放つ鋭い一撃を馬から逸らす。

馬が何かを喋っていて、それに対して二刀の戦士は何かを語っている。

黒い騎士が動く前に、矢が放たれていた。

ヒートアップしていく黒い騎士に対して、冷静に周りを見ている。

彼等は、立場が今は違うだけで、真の敵は同じ事に気づいているのだろう。

聖杯によって喚ばれたわけではない事を、ヘクトールも知っていた。

恐らく目に映っていないが、三騎のサーヴァントは異常に気づいており黒い騎士を殺しきらないように、そして、黒い騎士に殺されないように立ち回っているのだろう。

矢が放たれた場所から、逆算すれば弓兵は俺に近いだろう。

普通なら、俺の方に気づいた瞬間に俺を打ち抜くだろうが、それはないと俺は予想した。

理由は単純で、弓兵の一撃は亜人族と人間の戦場に一度も放たれていないのだ。

一騎当千の猛者達の隙を搔い潜る一撃を放てる英雄が、戦争を止める気配を感じないのだ。

トータスの世界情勢については深く干渉しないのが、フェアベルゲンに属するサーヴァント達のやり方なのだろう。

だからこそ、俺が亜人族の集落を襲撃しても、余程のやらかしをしない限りは大丈夫だろう。

敵は皆殺しの予定ではあったが、弓兵に直ぐに見つかる可能性がある限りは取り逃しが出て仕方がない。

向かってくる戦士は殺すが、戦士ではない民を蹂躪する事を今回はしない。

「アイリス、俺の合図と共に空へ駆けよ！」

アイリスが頷く。

聖剣に魔力を集める。

本来ならば、軍神の剣で行うのだが、周りにサーヴァントがいる以上、宝具として発動するわけにはいけない。

『フォティア・フォトンレイ軍神の剣よ燃えよ』

軍神の剣を赤色に染め上げて放つ一撃。

それを聖剣にて再現する。

聖剣が燃え出す。

魔力が集まりきった証だ。

「アイリス！」

翼を生やし空へと駆け上がる。

千里眼で予め見ており、大きな集落は二つ。

戦場に遠い方は、女子供が多い。

集落の完成度から見て、戦争が始まって直ぐに作ったわけではない事がうかがえる。

恐らくと推察したいが、そんな時間はない。

戦士と密接に関わっている、前線付近の集落に火を放つ。

前線にいる、亜人の戦士達には絶望を、人間の兵士達には正義と士気向上の鼓舞を、サーヴァント達には此方側の戦争で問題だという拒絶の意思をもって、叫ぶ。

「人類の勝利のために、忌まわしき亜人どもに裁きの焰を！」

焰が墜ちる。

激しい爆発と共に、集落を中心に、樹海の三割程を呑み込みながら燃え上がっていく。

「アイリス。帝国へ戻っていて構わない。とにかく、煙のない所へ迎え。俺は下に降りる。血と名誉を勝ち取ってくる」

集落があつた場所の中心部に速度を付けて降下する。

土煙を巻き上げながら着地する。

煙を風で払い、辺りを見渡す。

若すぎる戦士と、一線を引いたであろう老兵が主だったようだ。

老兵達は一部の若き戦士を引き連れて、俺を睨む。

リーダーシップを発揮している一際若い男と、尤も年を取っていた

老人は木片をどけて救助と避難誘導を行っていた。

爆発の規模を少し抑えすぎたようで、死者が多くない。

前線の方は、敵の混乱を上手く利用出来ている事だろう。

向こうが最大の努力をしてきている。

俺もそれに報いなければいけない。

「俺は【勇者】天之河光輝！逃げも隠れもしない。汚らわしい亜人どもよ。戦士としての誇りがあるのならばかかってこい！何人がかりでも、文句はない。まあ、抵抗なくむざむざと故郷を灼かれた無能共にそんな気概があるとは思えないが」

此方に交渉の余地がないことを宣言して、敵の戦意を焚きつける。

「舐めるなあー！」

冷静さを欠き、獣へと堕ちた亜人の若者達が考えも無しに突っ込んでくる。

それらを聖剣で撫でるように斬り伏せていく。

力まず最低限の力で滑らかに。

老兵達も悲痛な顔になり、雄叫びを上げて戦士一同突っ込んでくる。

恐怖と絶望、怒りに吞まれた老兵達に落胆してしまう。

中途半端に獣と混じっているのが、仇になったのだろうか？

こういう時にこそ冷静になって、此方を削ってくれる猛者を、この世界で求めていたというのに。

一斉に襲いかかってくるも、彼等の動きは噛み合わない。

恐らく、いつもの冷静なときなら、司令官の下噛み合っていたのだろうが、本能に吞まれ獣になってしまった。

それにより、習性が合わせられない。

熊と狼と虎では、狩りの仕方は違うのだ。

仲間が攻撃が当たる畏れを察知して、やや冷静になり勢いのない攻撃が放たれる。

変に冷静になるのなら、いつそ獣のまま仲間ごと、殺しに来れば傷を負わせる可能性があったのに。

そうやって、油断をした頃に……

「グオオオオアアアアアッ！」

仲間ごと喰らい付きに来る虎が現れる。

それと同時に、物音を立てずに此方の死角から狼が牙を突き立てに来る。

虎を魔眼で留め、剣を逆手に持ち変え狼に振り向かず突き刺す。

剣を握り直して、虎ごとまとめて立てに斬り伏せる。

向かってきた敵は全て斬り殺した。

救助活動は未だ完了を仕切れておらず、焦りながら懸命に手を伸ばしていた。

その姿に嘗ての自分を重ねる。

だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

皇帝との約束もだが、エヒトルジュエの持っている聖杯を満たすには、この世界の住人の命と魂が必要だ。

エヒトルジュエの願いのためにも、トドメを刺さなければいけない。

木片の山を退けている、その背中を斬るために詰め寄ったその瞬間、大きく後ろに飛び退く。

その瞬間、刺さった矢が爆発を起こす。

土煙がはれると、先ほどまで俺がいた場所が大きく抉れている。

だが、それ以上に驚愕の事実が其処には合った。

「今のお前がどのような立場にいるかは確証は持てない。だが、この世界の人間のためならば、今のままでも十分だろうか？これ以上は無駄な血を流す。そう私は判断しているが、光輝」

そこにいたのは、全てを救うと豪語して、希望を与えながら妥協を覚えた英霊がいた。

俺が友として兄として慕った正義の味方。

そして、俺の最も大切だったカノジヨを殺した、仇。

衛宮士郎、否、英霊エミヤがそこにいた。

「エミヤ、お前が相手だ。取り繕うのはよそう。俺は今、抑止の守護者としてこの場にいるのではない。一人の人間、天之河光輝として生きていて、大切な友人達を護るため、連れて帰るために人類を勝たせなければいけないんだ。其処をどけ。お前達と違って、俺はこの世界を救う気は無い！」

（エヒトルジユエ。これから、サーヴァントと戦う事になる。霊器解放はまだ駄目か？）

（させたいのは山々だが、ランサーやアサシンに言い訳は出来まい。それに、裏切る際、周りからなんと言われるか。操られてから裏切るのとは訳が違うぞ）

（エヒトルジユエ、確認する。周りのサーヴァントはお前へのカウンターとして、<sup>トリス</sup>「星」が喚んだのだろうか？）

「光輝。本当にこの世界の人類の情報だけを鵜呑みして、戦うのか？」  
「それ以外の方法をとったときに、殺される学生がどれほど出ると思っている？まさか、アレがある限り死んでも大丈夫などと思うなよ。お前達全員が此方側について、学生全員を守り切れる自信があるのなら、この刃を収めても良い。だが、出来ないだろう？数の怖さをお前は身をもって知っているはずだ」

（そのはずだ。私とそちらの星たるガイアに繋がりはない。強いて言えば、お前を呼ぶために穴を開けたぐらいだ。ガイアからの抑止ではないはずだ）

（俺に考えがある。詳しいことは、後で直接話す。今から簡潔に言う。俺が二人になれば問題ない）

（えっ、二人？どういう事？）  
（兎に角、どうにか出来る方法がある。だが、此処を切り抜けなければいけない）

（分かった。貴方が戦いたい理由を知っているから、文句は言わない。ただ、私のサーヴァントとして、はいぼくは許しません）

(恩に着る)

カノジヨの仇を討ちたかった。

だが、エミヤはその前に処刑台に立たされた。

愉快で、不愉快で、歓喜で、悲痛で、様々な感情を抱いた。

これは、戦わなくても良い戦いだ。

ただ、このまま睨み合っていれば、それで終わり。

だが、生前付けられなかった、決着を俺は望んだ。

聖杯にかける願いではない。

それは、救うために使いたい。

それでも、もし、殺すために使うなら、迷わず選ぶだろう。

『この手で英霊エミヤを殺すと』

「エミヤ！」

彼の持つ干将莫耶と、俺の握る神槍がぶつかり合う。

## 邂逅

果たすべき正義を求めていたんだ。

他者から与えられる借り物ではなく、自分自身で見出さなければいけないのに。

お祖父様の姿を理想にして、正義にしていた。

俺に正義はなく、間違っていることだけは分かっていた。

逆にそれしか分かかっていなくて、正義というものが分からなくて、そんな時に彼女を見つけた。

彼女との出逢いはきつと、良いものではなかったのかもしれない。

事実、俺は半分洗脳のような状態だった。

だから彼女の瞳に魅入ってしまった。

それでも、俺は助けを求めた声を、目を否定したくなかった。

やや重たいが、解けない暗示ではなかった。

でも、解いてしまったら、あの頃の俺は彼女を見捨てざるを得なかった。

そういう風に自分を歪めていたから。

だから、俺はやつと苦しんでいる人を救うために、彼女に洗脳されることを選んだんだ。

例えそれが、世界の思惑通りだったとしても。

彼女に名前はなかった。

ホームクルスという訳では無かったけれど、生い立ちが特殊だった。

生まれたときから、その身に神の槍と神の瞳を片方もっており、その槍の所為で母親は胎内を引き裂かれ亡くなったようだ。

父親からは疎まれて、売られ捨てられ、時計塔に着いたようだ。

俺も九つだったけれど、彼女はまだ四つだった。

俺は彼女の存在に抑止力が絡んでいると推察した。

俺の存在もまた、抑止の力によるものだと祖父に教えられており、



何かを感じ取れるからだ。

その何かは、今の俺でもハッキリとは分かっていない。名無しと呼ぶのも、个体名を呼ぶのも気が引けた俺は、彼女をミルと名付けた。

ミルは生まれながらに人として扱って貰えていなかった。

俺はそんなミルに人並みの生活と平穏を与えようと思っていた。

だが、致命的なまでに、俺自身が『人並みの生活』というものを、理解仕切れていなかった。

学校には行けず、一家の魔術や技を覚えることに時間を費やした。

一人前に早くなりたかったから、お祖父様の忠告を振り切った。

お祖父様自身、跡取りと抑止力の事を知っていたから、強くは止めなかった。

お祖父様が亡くなった後は、世界を回り時計塔へと入った。

表の世界の経験が全くなかったんだ。

身元を保証してくれそうな身内は、俺が時計塔を裏切ったのを知ると、刺客を送るようになった。

とにかくミルが安心して暮らせる場所を求めて、歩き続けた。

そんな日々の中、俺が刺客と戦い退けている間に、ある出来事が起きた。

ミルが『戦乙女』を起動させたのだ。

ただ、その戦乙女は壊れかけていた。

大源<sup>マナ</sup>を大きく扱うことが出来ず、戦闘機能の殆どが使えない状態だった。

「現代の大源に合わない企画」と、言っていた。

それでも、戦乙女は強かった。

晩年の頃なら未だしも、子供の頃の俺ではどれだけの奇跡が重なっても、勝ち目の無い相手だった。

ミルは戦乙女をお母さんと呼んでいた。

俺も、お母さんと慕った。

お母さんは、戦闘よりは家事の分野に手を伸ばしでした。

「これなら、私も学習出来ます」と言っている。

俺たちは対等な家族へと変わっていった。

主従関係や、庇護すべき対象ではなく、母親と長男長女の一家へとなっていた。

お母さんは、その頃にはキュリアと名乗っていた。

人間になつていこうとしていた。

時計塔に目を付けられていないような、大源が特に薄い場所で生活をした。

幸せだった。

唯々幸せだった。

人生を振り返って、これ程幸せだった時間はなかっただろう。

だが、その時間に終わりが訪れる。

その前触れの事件が起きた。

一言で言えば、ミルが神になろうと暴走を始めた。

今までミルの持つ、消失したと言い伝えられた【オーデインの瞳】

は、お母さんのルーンと俺の布で封印を施していた。

だが、ミルが七つになった頃にその封印が解けてしまう。

その時は、お母さんと俺で鎮めることができた。

封印もより強い物へと昇華させた。

お母さんが言うには、神代エーテルの不足による、神代回帰の失敗だと言われた。

ミルが何故神に近づいていつているのかは、二人して理解出来なかった。

だが、今思い返せば原因は俺たちにあった。

神代の遺物たる、キュリアお母さん。

神代から続く家系であり、先祖返りをして、決して多くは無いが、少なくとも無い神秘を纏い、なにより抑止力と契約している俺。

それに触発されたんだろう。

ミルを治す方法はなかった。

俺の魔眼で力を奪おうとしたが、逆に返り討ちにされ、気絶してしまった。

だが、その症状を遅らせる方法があった。

神の側面では無く、人の側面を強めることだ。

だが、それをするには、莫大な魔力を持って神の側面を抑える必要があった。

今住んでいる場所よりも、遙かに強い霊脈を求める必要があった。神を抑えるのに、現代の人間一人では立ち向かうことなど出来ない。

故に、霊脈にミルを繋ぎ、その地に住む住人の生命力と魔力を少し吸い上げる必要があった。

だが、その上で魔術師のいない場所を見つける必要があった。腕の良い魔術師がいたら、計画は失敗するからだ。

既に場所の目処を付けてはいたのだ。

祖父に引き取られる前に住んでいたと言われる、家がある。

既に亡くなっていて両親が住んでいた町。

調べた限りでは、魔術師はいないか、限界を迎えて没落している。少し離れた所に冬木市があるため、目立たないことも好条件だった。

希望的観測として、アインナツシユの実を使った治療も考えていたが、一度森を見た瞬間に諦めた。

世界と一体化する中華の技を使う俺とは、相性が悪すぎたのだ。

実力をろくに発揮せぬまま死ぬだけだと、理解したのだ。

これにより、治療を諦めて、俺たちは日本へ引越すことになった。父と母が、俺をどのように扱っていたかが分からない。

偽名を使うのではなく、いつそのこと、天之河を名乗ってはと、お母さんが言った。

バレる可能性もあったが、日本の重要ではない場所を時計塔が監視をしているとは思えないし、何より、名前を偽るといふ行為は思ったよりも、負担になっていた。

世界と一体化しなければならぬ自分自身が嘘にまみれてしまえば、合うものも合わなくなるのだ。

不調によって悪い癖を付けなくなかった俺は、それを認めた。

曾祖父には悪いが、海外との女遊びがあったということにして、そ

の時の子供をキュリアの母親とした。

キュリアとミルに天之河の血があることにして、亡き両親の家を引き継ぐことにした。

ミルは小学校に、俺は中学校に通うことになった。

中学校には龍太郎や龍太郎、香織といった、今のよく知る面子もいた。

だが、あの頃の俺は深くは関わることはなかった。

世間体を気にして、キュリアはある程度遅くまで働いていた。

俺は、ミルを悲しませないために家に直ぐ帰り、ミルの相手をした。

公園に遊びに行ったり、ケーキ屋さんにケーキを買いに行ったり、花屋さんに行ったりと、沢山のことをした。

ミルが神に囚われないようにと、必死になっていた。

ミルが友人を作ったときは、心から喜んだ。

人との繋がりがあれば、それだけで人でいられるから。

少しだけ余裕が生まれると、俺も友人を作った。

今とは違い、八重樫の道場に通っていないなどの差異はあるものの、交友関係にさほどの乖離はない。

俺は、ある程度は張り詰めていたが、ミルにとっては安らかな日々だった。

だが、ミルが十二歳になった頃、様態が急変した。

摂取する魔力量が跳ね上がっていった。

その量は日に日に増えていき、衰弱した人間に死者が出る程だった。

夏には時計塔から、監視者が送られ、秋頃には時計塔に彷徨海、そして聖堂教会の三つ巴の戦いにまで発展した。

ミルだけでなく、裏切り者として時計塔と聖堂教会は、俺を始末しようとしていた。

彼等を相手にするため、俺は高校を中退し、争いの日々明け暮れた。

そして、クリスマスの日に、ミルは死んだ。

その日のことはよく覚えている。

前日に買ったクリスマスプレゼントを渡しに、ミルを隠している山奥の小屋へ向かおうとしていた。

その山で大きな爆発があり、俺は直ぐさま走り出した。

急いでいた俺は、まんまと罠に引っかかり結界によって足止めされていた。

結界の中にいたホムンクルスやキメラに、結界を張った術士を殺していった。

そんな中、頭の中にあつたミルへの絶対的な感情が綻び始めていることに、焦りを抱いた。

洗脳が解けだしているということは、ミルが死へと近づいている事を意味しているからだ。

ミルを救いたい。

その一心で走り続けた。

俺のやっていることは、絶対に正しいことではないことも分かっていた。

当然だ。

人一人を生かすために、少なくとも犠牲を払っているのだ。

正しいはずがない。

でも、それを理由にミルを見捨てることも正しいかと言われれば、俺は正しいとは思えなかった。

俺はこのとき、初めて自分の意思でミルを救うことを決めた。

自分自身の正義を貫いたのだ。

それが何を意味するかを知らずに。

もう一度大きな爆発が起きる。

その爆心地へ駆け出す。

そこには、片腕が無く、両足が千切れ、肩から腰へ向かい大きい傷を負い、火傷も負っている虫の息のミルがいた。

ミルに駆け寄る。

襲いかかってきた相手にずっと抵抗していたのだろう。

腕が千切れるぐらい力を込めて、槍を投げたのだろう。爆発によって、足は千切れたのだろう。

もう、死ぬその寸前だというのに、オーデインの瞳は閉じられたままだった。

「兄様が、光輝が、使っちゃ駄目って言ったから。人間でいたいなら、絶対使うなって言ったから」

何故と口走った俺に、ミルはそう答えた。

続く言葉を聞き取れなかった。

絶望と怒りに捕われて、現実を受け止められなかった。

馬鹿正直に、俺の言葉を護ったから、ミルは死んでしまう。

俺が殺したようなものだ。

ミルは優しく微笑んでいた。

その表情が逆に俺を締め付けていく。

そして、ミルは死んでいった。

そこに、あの男が現れた。

男のことはある程度知っていた。

その思想に興味を抱き、話すこともあった。

友人とは言えなくても、赤の他人ではなかったはずだ。

だからこそ、俺はミルを殺された怒りを、男の思想とは真逆のことをしている事への怒りとを、混ぜ合わせて爆発させた。

衛宮士郎

正義の味方を目指している、全てを分け隔て無く救うと！

それを本気で願っていた。

俺も、その言葉に羨望を抱いた。

本気で応援した。

だからこそ、ミルを斬り捨てて、市民を助ける選択をしたこの男を

許せなかった。

貴方なら、俺を間違っていると言い、ミルを救い、市民を救う方法を見つけてくれると信じていた。

俺にとつての理想を裏切った男が、理想を抱かせた本人というのが、堪らなく悔しかった。

その思いをぶつけた瞬間に、意識が途絶えていた。

俺が目を覚ますのは、それから二日後の夜だった。

## 決着

「ラアアアアアア！」

靈器解放を行い、救世の勇者としての側面を持つコウキへと戻った俺が、雄叫びを上げながら突っ込む。

「フッ!!」

放たれた突きをねじり避け、追い打ちに振るわれた神槍の風払いを一对の双剣で流し、カウンターが出される。

舌打ちをしながら、槍を回し双剣を弾きながら、縦に振るい突きに繋げる。

空いた左手でルーンを刻み炎を打ち出す。

槍を逸らし、炎を躲され、振るわれる一撃を槍で相殺して鏢釣り合いに持ち込む。

「随分と過激な真似をするな。私の知っている君はこんな事をするような人間ではなかったのだがね?」

「それは此方の台詞だ。あの時言えなかったが、貴様は変わりすぎた!理想を何処に捨ててきた!」

高速の剣戟。

槍と剣の応酬。

互いに傷は負わず、躲された一撃で地面は抉れる。

「まさか、君がその槍を持つとはな。眼の方も譲り受けたのかな?」

「その通りさ。アイツの忘れ形見だ。この槍で貴様を殺したいとどれだけ思っていたか!貴様の亡骸をこの目に写したいと願ったさ!」

消えない憎しみの炎に身を委ねる。

愚かなことだ。

実に愚かなことだ。

先に喋った理屈は本当だ。

数は恐ろしい。

生徒達は死んでも肉体は大丈夫な保険自体はある。

だが、それらを言い訳にしている。

俺たちが相見えるのは、千載一遇の機会なのだ。



互いに抑止の守護者として、同時に召喚をされないようにしてある以上、この機会はもう二度と訪れないだろう。

「貴様は大を救うためならば、小をたやすく切り捨てられる。貴様と俺とでは、話は平行線だ！衛宮士郎ならば話は変わっただろうな！全部を救おうとする彼なら！」

槍を放ちながら、エミヤに的を外れなことを言う。

これは、八つ当たりでしかない。

でも、絶対に伝えなければいけないかった。

悲鳴なのだ。

あの時の俺の。

なぜ、ミルを助けてくれなかったのかという、悲鳴を伝えたのだ。

エミヤは何も語らない。

「エミヤ！俺一人が世界を相手に立ち回れるというのなら、俺を過大評価のしすぎで、この世界を過小評価しすぎだ！」

槍に魔力をかき集める。

「何人の犠牲者をクラスから出せばいい？その後の責任は、誰が果たす？遺族に伝えるのは誰だ？俺たちには出来ないだろう！？既に終わってしまった人間が！話せる物か!!」

そう。

俺たちは死人。

俺自身、サーヴァントと呼ばれた時点で、死んでいる。

天之河光輝の肉体は既にエーテルの塊へと変わっている。

この戦いの果てに、どんな結末が訪れようとも、現実の天之河光輝の死亡は確定している。

「俺は、<sup>ガイア</sup>星の抑止として、なんとしても彼奴らを連れて帰らなければいけない。今、その方法を提示出来ているのは、神エヒトのみだ！エミヤ、俺は勝たなければいけない。貴様にではなく、今回の戦争。亜人族にだ！」

「誘導されていた、というわけか。だが、その矛で私の盾を貫けるかな？正当な持ち主である彼女ですら、出来なかったぞ」

「未来の勝利ではなく、栄光の輝きでもなく。我が望むのはただ一つ

の命。黒点に映す破滅を今此処に！駆け抜ける、復讐の流星！  
【大神投槍・破滅復讐】  
大神宣言それは、自身の味方を敵に勝たせる、勝利の権能を宿す槍。

サーヴァントの宝具になる以上、その効力は弱まる。

だが、味方のステータスの向上に高ランクの啓示を付与。

相手によつては様々な恩恵を与えることに変わりはない。

味方を強くする対軍宝具。

その恩恵全てを攻撃のエネルギーに回し、狙いも個人に変えた投擲。

それがこの宝具の正体。

何処までも敵を追い、貫き殺す絶対の意思のもと放たれる一撃。

それは、大神宣言を上回る。

「I am the bone of my sword.  
熾天覆う七つの円環」

迎え撃つは、七枚の花びらを形取る盾。

神秘の塊がぶつかり合う。

トータス全体に、今までの比ではない神秘が一瞬満ちあふれる。

四枚を瞬時に砕くも、三枚目から徐々に槍は勢いを無くし出す。

だが、勇者にそれは関係なかった。

俺はエミヤを振り切り、亜人族の追撃に移った。

エミヤの足を止めさえすれば、俺の追撃は成功する。

エミヤを殺したいのは、変わらない。

だが、エミヤを殺して、亜人族を見逃すのは、俺の敗北だ。

邪魔が入って勇者が任務失敗という評価は、戦争で人類を勝たせた

としても、その名声に傷を付ける。

そこから、周りの仲間達に被害が生まれる。

俺の言葉に説得力が無くなる。

皆を庇えなくなる。

今度こそ、護らなければいけない。

それは、エミヤを殺すことより優先しなければいけないことだ。

「これは、どういふことだ」

だが、事は上手くいかない。  
いつまで経っても森から抜け出せない。  
宝具を使った影響で眼を休ませていたのが仇になったのだろう。  
幻術に囚われたのだ。

「キヤスタークラスのサーヴァントが動いたというのか？ エヒトル  
ジュエとも連絡が取れない。眼はもう少し時間が掛かる」

試しに魔眼で魔力を吸収しようとするも、不発に終わる。

素の俺とではかけ離れた実力の持ち主なのがうかがえる。

幻術から目覚めるときが来た。

此方から破るより先に、亜人族の撤退が早かったのだろう。

促されるまま、幻術から離れる。

目の前には、槍を防いだエミヤがいた。

周りからは勝利の雄叫びが響いている。

人類が勝利したのだろう。

「エミヤ」

「なんだ。光輝」

「お前達は何のために此処にいるんだ。ランサーやアサシンはハイリ  
ヒ王国にいる。カウンターと喚ばれたにしては、動きがばらけ過ぎて  
いる」

「正直、誰のカウンターとして私達が喚ばれたかは分からない。それ  
が現状だ。この世界を歪ませない程度に関わり情報を集めている。  
ただ、仕方が無いとはいえ、バーサーカーは暴れすぎだ。アレを抑え  
るために今回の戦争には関わっていたに過ぎない。本来なら亜人族  
も助けるつもりはなかった。が、お前が関わっていたからな。お前は  
サーヴァントだ。この世界の住人の問題にお前が首を突っ込む。そ  
の事に危惧をしたのだが、無用の長物だった。しかし、私の所為とは  
言え、お前はサーヴァントになってしまった。お前が仮に抑止の守護  
者として、喚ばれていたとしても、その状態になった以上行き過ぎた  
行為を取れば、私はお前の邪魔をする。だが、お前が人間としての範  
疇を護るならば、手出しはしない」

「分かった。俺は勇者として行動する。クラスメイトの力に合わせ

る。それを遙かに上回り、サーヴァントとしての力を使ったとき、貴様に攻撃されることを認める。その時は俺も貴様を殺す。それに、貴様等が中立に回っていることをしれただけでも、俺には良い成果だ。俺は戻る。どうする、エミヤ。お前達も此方に来るか？」

何処にいるか分からないよりも、手元に置いておきたい。

「いや、そろそろ私は他の所を周わる。敵の情報を集めなければいけないしな」

「分かった。あそこにいる、ライダーとセイバーを誘ってみるとする」  
そうして、俺はその場を去った。



全ての民が狂気にまで満ちた用に勇者と叫ぶ。

全てをねじ伏せる圧倒的な力に、盲信する。

「帝国万歳！人類万歳！」「正義は我らにあり！」「亜人族共、ざまあみろ」「エヒト様、ありがとうございます」

勝利に酔いしれる帝国民に、笑顔を向ける。

手を振り、歓声と拍手を浴びる。

近寄ってきた姉弟だろうか。

少女は花を、少年は果実を渡しに来た。

不用心と後々釘を刺されるだろうが、花を受け取り果実を食べる。

お礼を言い、子供の頭を撫でる。

母親が人混みを掻い潜り、慌てて此方に来て、頭を下げて、その場を去る。

母親にもお礼ぐらい言いたかったが、そこまでしてしまうと、大人も俺の元に来るかもしれない。

改めて、国民を見る。

当然のことだが、戦士の国と言えども、国民の半数以上は力なき民。そんな多くの人から見れば、俺は神の使いに見えるだろうし、亜人族や魔族は怪物にも見えるだろう。

それこそ、一つの種族を滅ぼしていても可笑しくはない。

嘗ては、弟子の同型も人に多数交ざっていたと聞く。

それを続けられなかった理由があるのだろうが、今はやっていないようだ。

エヒトルジュエの願いを叶えるには、俺の命だけでは足りない。

トータスの聖杯を完成させるのには、喚ばれた抑止のサーヴァントを殺せば良いだろう。

だが、エヒトルジュエが個人で所有している聖杯は空のまま。

そして、二つの聖杯でなければ、世界を超えるなど出来はしないだろう。

ましてや、過去に飛ばうとしている。

奇跡を二回は起こさなければ、果たせない。

そして、聖杯を満たすために、俺は細工を施した。

一つ目は、俺の命を聖杯に繋げる。

俺が死ねば、空っぽの聖杯は半分は充ちるだろう。

二つ目は、俺に殺された命を聖杯に捧げる。

俺が今まで殺した、魔物や今回の戦争で俺が殺した亜人族。

微量とは言え、聖杯に捧げる価値はある。

最後に、聖剣で殺した者を聖杯に捧げる。

この世界のアーティファクトで、ハイリヒ王国の国宝である聖剣。

これに殺された存在を聖杯に送りつけるようにしてある。

これは、俺が振るわなくても良いのが、好条件だ。

きつと、大きな戦争が起きる。

その時に多くの民を、戦士を俺は殺す。

此処にいる、力無き者もきつと、殺すだろう。

そして、ノイントや同型機は俺の聖剣を受け継いだこの世界の英雄  
の手で殺されるだろう。

そう思うと、俺を無条件に信じている、彼等の姿には憐れみを覚え  
てしまう。

その感情を表に出さずに、唯々笑顔を振りまいた。

凱旋のパレードの後に、皇帝から、帝国の城で三日後に戦勝パ  
ティーを行わうと言われた。

俺に、宴開始の乾杯の音頭を取れと無茶を言ってくる。

それを断らず、了承して与えられた部屋へと戻る。

部屋に入り、寝間着に着替えてからベッドに身を投げる。

意識をエヒトルジュエの所まで飛ばす。

「待っていたぞ、光輝。お前を二人にすると言うことについて、詳しく  
教えてくれ」

来て早々にエヒトルジュエは、俺に説明を求めてくる。

直ぐに説明を始める。

「ああ。今、聖杯の中身は少しは溜まっている状態だ。それを使う」

「あまり許可をしたくはないが、そもそもサーヴァントを一騎喚ぶ程

も溜まっつてはいないぞ」

「そこに問題は無い。今の俺は、二つの側面を一つに統合されている状態だ。必然的に、一騎以上の魔力を使われている。そこに、聖杯の魔力を混ぜて、俺を人間としての英霊の面と、神の化身としての面に切り離す。そして、神の側面の俺をお前はこれから扱ってくれ。人間としての側面の俺は勇者としてやり過ごしてみせる。それに、裏切る方法は多少は考えてある。狂信者が過去にいたことを、ありがたく思うよ」

「わかった。だが、その切り分ける作業は危険じゃないよな。お前を失えば、私は——」

「大丈夫だ。多少の痛みは有るだろうが、死にはしない」

そう言うのと、エヒトルジュエは抱きしめてきた。

「何を… しているんだ。らしくないぞ」

「分からない。お前の過去を知れば知る程、こうしたくなってきたんだ。私には分からない。私は母親になったことがない。この気持ちなんなのかは、分からない」

そう告白するエヒトルジュエに笑ってしまう。

どうして、俺の母親代わりという人は、不器用な奴ばっかり何だろうか。

俺が、喚ばれた理由も分かってきてしまう。

「不器用な人だ。そんな一面を最初から出させていれば、此処まで苦しみながら走り続けることもなかっただろう。でも、エヒトルジュエ。貴女の愚直さに敬意と感謝を。その愚直さがなければ、俺が貴女と出会うことも、自己満足を果たすことも無かったのだから。涙は最後まで取って置いてくれ」

抱擁を振り払い、聖杯の中身を取り込む。

肥大していく魂を二つに割り、エヒトルジュエとパスを繋げる。

現れる自分俺にしっかりと伝える。

マスターを、エヒトルジュエを頼む

互いの思いが交差する。

そして翌日、俺は意識を元に戻す。



ハイリヒ王国の本隊が到着したという一報と共に。

## 戦勝パーティー

武官や文官に聖教教会の重鎮達に、戦場に出ていた戦士達に、ハイリヒ王国の騎士団とそれに付いてきたリリアーナ王女殿下と前線で活躍しているクラスメイト。

大勢の人間が城の中庭にいる。

人数が多かったため、パーティーは室外で行われることになった。

そして、俺は乾杯の音頭を取るために、一段高くセツトされている踊り場の上る。

「今回の戦いによって、亜人族を倒しフェアベルゲンを事実上の占領下に置くことが出来ました。一人一人の実力が確かに上であるはずの亜人族に、我ら人類は勝つことが出来た。それは、我らが自身が思っていたよりも強く、同時に互いを思い助け合う力を持っていた。確かに、人類は弱い。ステータスプレートで百を超えている戦士は少なく、千を超える者など、今までいなかったのだろう。だが、今は違う！不可能と言われたベヒモスを殺し、亜人族の集落を単騎で滅ぼし、神エヒトより寵愛を受けた、俺がいる。俺が人類の剣となり、亜人族も魔人族も全て、全てを滅ぼし尽くして見せよう！だが、俺は一人だ。人類を守り通すことはきつと出来ない。だからこそ、この場にいる全員に人類の盾になって欲しい。戦士達よ！俺が言う。諸君等は強い。一人一人のステータスは戦う相手に必ず劣っているといつても過言ではなかっただろう。そんな中、諸君は戦い続けた。一秒先には自身の死があるうとも、仲間を見捨てず、恐れを捨てることも無く、戦い続けてきた。そんな人間が弱いはずが無い。そんな戦士が戦場に迷うこと無く出られるのも、優れたバックがあつてこそ。貴族も護られている民達も、確かな力になっている。だからこそ、今以上に内政を整え、武器を手入れし、効率よく物事を進められるように研鑽してほしい。諸君等には戦えるだけの力を持っていたのだ。人類は戦えるのだ。ただ、人類は剣を持っていなかっただけに過ぎない。今のこの場には不足していた剣がある。勝てるんだ！人類は！だから、俺に力を貸して欲しい！今日は、そんな諸君等の反撃を祝う日だ。存

分に楽しんで欲しい。そして、人類の反撃が完遂したその時には、今日を超える派手な宴をしよう！人類に勝利を！乾杯！」

周りが歓声を上げる。

勇者万歳のコールの中、俺は舞台を降りた。

エヒトからの寵愛なんて物はないのだろうか、少なからず、思われているはずだ。

多少盛った所でも嘘だとはバレないだろう。

俺を失った後の人類はどのような道を辿るのかだけが、悩みの種だ。

生前の、俺は文明の崩壊後に数を減らした人類をまとめ上げていた。

元凶と相打ちにはなったから、大きな危機は去ったのだろうが、その後どのような道を進んでいるかは分からない。

そもそも、俺の過ごした地球は…

どうしようもない事を考えるのは辞めよう。

知りようもない事だ。

発破をかけた俺が楽しまないのも、士気に関わる。

挨拶もしていかないといけない。

それに今回の戦勝パーティーは成功させなければいけない。

未だ協力に応じていない、国を説得させるためにも。

ありがとうございます、任せて下さい、よろしくお願いします。

何回もその返事を続けた。

そんな中時間は進み、パーティーの終わりを飾る舞踏会。

俺は、異様な光景を目にした。

次期皇帝、バイアス皇太子とリリアーナ王女殿下は婚約関係に当たる。

バイアス皇太子とリリアーナ王女殿下のダンスは一曲で終わった。そこまではよかったのだ。

俺もダンスを見届けて、挨拶回りをしていた。

そんな中、有る光景を見てしまう。

「すまない、その紳士。今、バイアス様と踊っておられる女性は誰か分かるか？ドレスの生地も周りの貴族より少し粗い。恐らくだが、そこまで身分は高くない人だと思うのだが」

「ああ、勇者様。彼女は確か、有名な商店の娘だったと思います。愛妾って奴ですよ。そちらの世界では、あまり知られていない文化かもしれないませんが」

「いや、高貴な身分に、そう言う者が付きものというのは分かっている。ただ、些か数も多く、一人当たりのダンスの数も多いのでは？これでは、ハイリヒ王国の面子は丸つぶれだ」

「我々もそこら辺の危惧はしているのですが、如何せん向こうから苦情が来なくて。父である皇帝陛下も他国とのパーティーには連れてくるなどは言っているのですが、聞く耳を持たなくて。不快に思われたのなら申し訳ない。それに女という者は面倒でしてな、愛された者は一番になりたいのですよ。かくいう私も——」

理屈は分かる。

将来成るとはいえ、今は未だ家族では無く、切り捨てられる婚約者より、何だかんだの繋がりや利益を送っている相手を大切にすることは、分かる。

ヘルシャー帝国は強い。

人類最大の国はハイリヒ王国だろうが、戦争になればヘルシャー帝国が勝つだろう。

だからこそ、リリイも強く反対出来ずにいる。

相手の心を折り、征服したくもなるかもしれない。

それに年もやや離れていることも原因だろう。

だが、どんな立場どんな才能を持っていようとも、十四歳の女の子なのは変わらない。

自分の女性としてのプライドに傷を負うだろう。

妹のようなリリイを助けたいと思う。

俺にとって、年下の娘はどうしてもミルを重ねてしまう。

『光輝が頑張っているのは嬉しいけど、ミルは寂しいんだよ』  
そういつて泣かせてしまった過去がこびり付いている。

リリーの背中を見続けるとその言葉が蘇る。  
助けよう。

理屈はいろいろある。

でも、結局は助けたいから、何だな。

貴方もきつとそうだったんでしよう、衛宮士郎。

席に座っているリリーの前に歩み寄る。

膝を着き頭を垂れて、口説き文句を言う。

「我が剣を捧げた麗しの姫君。リリアーナ王女殿下。ドレスが似合っているや、ダンスは楽しかったでしょうか等、世間話をしたい所ではありません。ですが、日頃戦場で頑張っているこの男に褒美を頂けませんか」

「は、はい。褒美でしようか？」

「はい。私は実のところ恋人がいないのです。当然ながら伴侶がいたこともありません。親同士の婚約者というのもいたことがありません。皆がそれぞれのパートナーと踊っている所を見ると、私も一曲だけでも、高嶺の花と踊ってみたくなつた所存です。どうか、踊るパートナーもいない、哀れな男一人に、夢を見させて頂けないでしょうか」

芝居も良い所だ。

だが、嘘でも無い。

今生において、俺は結婚していない。

恋人もいない。

クラスメイトからは動揺とぎわめきが起きる。

リリーは顔を赤めるも、ガハルド皇帝陛下に助け船を求めた。

踊っても良いのかと眼で訴えている。

ガハルド皇帝陛下は笑う。

「そうだな！男なら可憐な乙女とのダンスは憧れよな！許す。此度の戦、勇者・天之河なくして、勝ちはなかった。それに対して、帝国からは当然だが、ハイリヒ王国からも少々ねぎらう必要があるだろう。リリアーナ王女。光輝の希望を叶えてやっては貰えぬか？」

ガハルド皇帝陛下は俺に笑いかける。

そして、息子のバイアス皇太子を指してから、手を合わせる。

「許可も貰ったことだ。行こうリリイ。こんなにも目出度い日だ。笑っていないと損だぞ。これ程の大きなパーティーは此処先には中々出来ないよ」

周りに聞こえないぐらいの音量でリリイに語りかけて、引つ張る。

「さあ、笑って踊りましょう。お姫様」

「はい。光輝、よろしく願いますね」

その日一番の笑顔をリリイは咲かせた。

周りからは大きな拍手を貰った。

ただ一人を除いては。

そんな一人の男性も、今日がどんな日なのかは、分かっているので表立っては騒ぐとうとしない。

そして、時間は過ぎ去り、パーティーは終わりを告げて、それぞれの日常に戻りだした。

俺たちもまた、迷宮攻略の日々へと戻りだした。

## 前に進むために

今、俺は一人の少年の面倒を見ている。

その少年の名前は玉井淳史。

同い年のクラスメイトだ。

「天之河先生！ランニングが終わりました！」

「分かった。そろそろ今日の手合わせをしましょう」

「はい！」

このような師弟関係になったのは、三日程前のことだ。

戦勝パーティーが終わり、与えられた自室でゆっくりと月を見ながら、軽い占いでもしようと思っていたときに、扉を叩く音が聞こえた。

「今、開けます」

そう言つて、扉を開けると玉井淳史がいた。

正直、面食らっていた。

玉井淳史とはクラスメイトだ。

それ以上の関係では無い。

友人というわけでは無い。

玉井も、俺のことを友人などとは思ってもいないだろう。

そんな玉井が、こんな時間に訪問したことに驚いていたのだ。

「天之河。お前に頼みたいことがあるんだ」

玉井は覚悟を決めた表情をして、声を震わせながらしゃべり出した。

ただ事ではない事は直ぐに分かった。

「とりあえず、中に入ろうか。茶も出すし、多分込み入った話にも話にもなるんだろ？魔法で音を遮断しといてやる。…これで良いかい？」

「ありがとう。すごく助かる」

そう言つて玉井を部屋に迎え入れて、近くの椅子に座るように促す。

テーブルに置いてあるポッドから紅茶を注いで、茶菓子をだす。

「すまないが、紅茶しか無い。あと、茶菓子だ。食べたら歯磨きをするのを忘れるなよ」

「凄いな。俺、お茶とか作らないな。毎日作っているのか？」

「趣味の範囲だからな。それと、玉井くんは世間話をしに来たんじゃ無いんだろ？まあ、緊張を解きたいんなら、もう少し世間話に付き合うけど」

「いや、そうだな」

そう言い終わると、玉井は紅茶を勢いよく飲み干す。

「天之河。単刀直入に言う。俺をオルクスの大迷宮に連れて行って欲しい」

ため息を吐く。

予想はしていた。

居残り組で、一番現地民とぶつかっていたのは玉井だ。

心はあの事件で折れたのかもしれない。

だが、死にきつていないのだ。

自分自身に悔しい思いを感じられているのだ。

だからこそ…

「だから、愛子先生の護衛に行かなかったのか。正直、こうなるかもしれないとは思っていたよ。ただ、玉井くんが直接俺の所に来るとは思っていなかった。前線組が揃っている場面で頼み込んで、俺が断れないようにすると思っていたよ」

「それも、考えなかったわけじゃない。でも、俺は弱い。当然だ。あの日から日常的に行っている訓練しかないでいる俺と、前線で戦っている彼奴らとでは俺の方が弱いのは当然だ。足手まといも良い所だ！でも、でも、俺は強くなりたい！天之河は知らないと思うけど、俺はこの人たちと衝突したんだ。一回とかじゃ無く、何度もだ。天之河。俺、俺さ。剣なんて握ったのはこっち来て初めてなんだよ」

「うん。たしか玉井くんは部活動は、やってなかったって聞いてたけど」

「ああ。中学の時に陸上を怪我で辞めちゃったからな。まあ、それで



さ。喧嘩とかとも縁の無い生活だったんだ」

「まあ、大半の生徒がそうだろうね」

「そんな俺ですら、少しの訓練で、半生を剣に捧げた、俺たちで言う八重樫みたいな女の子を圧倒してしまうんだ。純粋な身体能力だけで」

玉井はアレでいて、この世界で珍しい戦闘系の天職。

そして、転移者としてのステータスと含めてしまえば、軽々と上を言っても可笑しくないだろう。

あれだけの演説をしていてなんだが、護らないといけないクラスメイトがいなければ、前線組で国を落とせても可笑しくはないのだ。

俺ならば単独で国を落とせるだろう。

それだけ、ステータスという物は、この世界には重要な物だ。

「だからこそ、思ったんだ。強くないといけない。今のまま、ダラダラとしてるわけには行かないって！だって、この国を攻められたら、一番の戦力は城にいる俺たちなんだ。今のままじゃ、俺は自分しか守れない！」

「それでいいじゃないか」

「えっ」

俺の声に、玉井が驚く。

当然だろう。

正義感の塊である、あの天之河光輝が、人を見捨てることに賛同しているのだ。

玉井の中にある天之河像が崩れているだろう。

「普段の僕を知っている玉井くんには信じられないと思うけど、正直に言うよ。自分のことは自分でやらないと。全力でやって出来ないと分かっているから、他人から自分の足りない物を借りるんだ。正直、僕にはこの世界の人間が本当に全力で魔族に抵抗しているとは思えない。騎士団の皆は戦場に出るから、変わっていく戦況に恐怖を抱いていると思うよ。その上で全力を尽くして現状維持は出来ている。では、ここに住む民はどうだ。自分自身で戦場の状況を知ろうとせず、自分たち自身でその思考を止めている。調べれば、騎士団がここ

数年で何人死んでいるのか。戦場はどれほど悲惨になっているのか。図書館は開放してある。文字も読める。なのに知ろうとしていない。正直に言う。守る価値なんてないよ。俺が助けるために戦っているのは、俺自身のエゴと胸に働きかける義務感のためだ。それに、元々玉井くんは部外者じゃ無いか。自分自身の防衛だけでなにかいけないうんどうか。召喚されただけで別に働かなくて問題ないでしょ。そもそも、神エヒトが召喚に失敗していたら、俺たちはこの場にいらないだ。責められる道理はないよ。当事者たるこの世界の魔族と人間族の問題だよ…。まあ、そう言って割り切れって言えないけどね。でも、無駄に気負う必要も無い」

「あっ…」

呆然としている。

無理も無い。

これ以上は無意味だろうと判断する。

「じゃあ、話は終わりで良いかな？ 酷い言い方をするけど、オルクス大迷宮に弱い君を連れて行けない。じゃあ、俺は外で風を浴びてくるから――」

「待ってくれ！」

しかし、玉井は待ったをかけた。

「何度も言うけど、君を連れて行くわけには行かない。これ以上死人を出したくも無い。悪いけど、諦めて欲しい」

「惚れたんだ！」

「はあ？」

素の声が出た。

「そうだよ。天之河の言うとおりで何だろうよ。でも、あああ！ 惚れたんだよ。アイツに！ 色々理屈を固めて強くなろうとしたけど、一番は、守りたいんだ！ 惚れた相手を！」

「本気で言っているのか？ それは何を意味しているのか？ この世界に永住なんて多分出来ないよ」

「言わんとしていることは理解している！ これが最終的に失恋で終わることも。でも、守りたいって思っちゃったんだよ！ だからアイツに

自信を持って守るって伝えるためにも、強くなりたいたんだ！俺のこの自分にとりついた錘を外して、後ろ向きな考えを振り切って、しっかりと謝って、始めたいんだ！彼女との恋を！」

「あっはははははははー！」

「わ、笑うことはないだろー！」

彼の告白に笑ってしまふ。

笑みを隠せない。

これは止められない。

男が女を守るために立ち上がるんだ。

どうやったって止められない。

だって、極論を言えば、俺と同じ答えを出しているのだから。

「すまない。可笑しくて笑ったんじゃない。少し嬉しくてね。そうか。女か。女のためなら止まれないなあ」

「誰にも言いふらすなよ。こんなこと…。最低でも俺が告白するまでは」

「ああ。だが、条件がある」

「なんだよ」

「まずは、流石に今回は連れて行けない。お前がいくらやる気を出しているても、流石に自殺行為を進めるわけには行かない」

「まあ、そうだろうな」

「次に、そうだな、一週間ぐらいなら良いかな？うん。俺がお前を鍛えてやる」

「えっ」

「弱音を吐いたら、直ぐに切り捨てるぞ。時間が無いからな」

「おっおう」

「最後に、オルクス大迷宮から俺が帰ってきた後に、テストを行う。それに合格したら、連れて行ってやる。オルクス大迷宮…。お前達が足踏みしている六十五階層にな。行くのは当然、俺とお前だけだ。そこまで出来れば、前線組に劣らない力も当然だし、彼女を守れるだけの力も保障しよう」

「ああ。よろしく頼む。師匠！」

「同じ年にそのノリはキツイ。せめて先生にしてくれ。あと、修行時以外は今まで通りでいいよ。というかお願い」  
「分かった。天之河！」

翌日、食堂で朝食を取る前に、前線組に報告をする。

「全員、席に居るかな。いるな。よし、じゃあ、報告することがある。今回のオルクス大迷宮の攻略、俺は遅れていく」

「どういう事だよ、光輝！大分遅れているんだぜ？攻略」

「そうよ。光輝。戦争が原因とは言え、まだ七十階層までしかいけないのよ」

「光輝君。私も出来れば先を急ぎたい」

龍太郎、雫、香織を筆頭に文句が出始める。

「まあ、お前達も待て。光輝なんか理由があるのか？」

メルド団長が周りを鎮めて声をかける。

「はい。少々野暮用が。一週間程で終わるので、それから直ぐに合流出来ます。皆の実力から考えれば、直ぐに追いつきますので」

ここで煽る。

俺はお前達より強いから一週間なんてハンデにもならないと、言外に言う。

「言ったなく光輝。お前が迷子になっても、知らねえぞ。よし、光輝が居なくても、俺たちは出来るって所、しっかり見せつけようぜ！皆！」  
「ちよつと、龍太郎。煽られないの！光輝も無自覚にそういうことを言わないの」

「だが、龍太郎の言っていることにも一理ある。俺たちは、当然と言えばそうだが、光輝に頼りすぎている。ここで、しっかりと俺たち自身の实力を知るべきだろう。来たる戦場で、俺たちは別行動つてなつても不思議では無い。特に俺のパーティーは」

熱くなる龍太郎に、雫が釘を刺すが、永山が待ったをかける。

「正直、迷宮攻略に不安要素を抱いていたくは無いんだが、戦争のことを考えれば、今の内から経験させるべきか。分かった。一週間、光輝。

お前を抜きに迷宮攻略に移る。だが、お前は大丈夫なのか？」

メルド団長が不安げに俺を見つめ返す。

「はい。正直、ベヒモス以降からは、限界突破を使った戦闘も経験していないですし、皆に合わせて大火力の技も使っていませんので、俺自身の限界を知るのにも持つて来いでしょう」

俺も全力を晒していないことを告げる。

「そうか。分かった。とりあえず、俺たちの移動した印とか付けておく。絶対に追いついてくれよ」

「分かりました」

メルド団長は承諾してくれた。

メルド団長自身、俺が周りより余裕を持っていることを察していたのだろう。

「話は終わりだ。正直、皆に迷惑をかける俺が言うのもなんだが、健闘を祈っている」

## 交渉

朝食が終わった後、皆が出発した後に、玉井を呼び出す。

「天之河先生。それで訓練の内容は？」

その前に、玉井の戦闘スタイルを確認する。

「玉井くんは曲刀の二刀流を使っていたよね？」

「おう。一応自慢だけど、器用で両利きだからな」

「すまないけど、二日程、俺はある人物に、俺がいなくなった後に、玉井くんの面倒を見て貰えないかを頼み込みに行く。二日程自習をしていて欲しい。まあ、ここでどんな訓練をするか見物だね」

頼る相手は当然エミヤだ。

彼なら、教えるのも上手だろう。

エミヤは時計塔に居た頃、俺に借りを作っているからな。

そこをつけ込むつもりだ。

それに、守りに関して言えば、俺より上手い。

「おう！と言いたいが、俺もついて行った方が良いんじゃないのか？俺の師匠になるかもしれないだろう？」

「俺は全速力で世界中を歩き渡るつもりだけど、着いてくる？」

ちよつとした冗談を言う。

千里眼で相手の場所は分かっている。

ただ、その場所までは全速力で向かうのは確かだ。

「これは、俺の問題だ！俺も行かないとダメだと思う。絶対に追いつくから、連れて行って欲しい！」

「分かった。着いてこれなかったら、おぶって行くよ」

「絶対に追いつくわ。同い年におぶられるのは、俺のなけなしのプライドが」

「じゃあ、行くぞー！」

玉井の全力疾走に先ずは合わせて走る。

スタミナを付けるために、徐々にスピードを上げていき、玉井を少し上回る速度でしか走らないようにする。

まあ、それでも、そこいらの馬車を抜いていく。

瞬間的な速度は負けるだろうが、平均速度は俺たち自身が走った方が絶対に速い。

移動距離も、馬よりあるのが、転移者たちだ。

そして、中立商業都市フューレンの行く途中にある村に、昼時につく。

エミヤは今、この村に居る。

「玉井くん。これから会う人は、俺よりも二刀流に詳しい人だ。正直、俺では玉井くんに教えられることは基本的なことが精々だと思う。時間もそうだけど、単純に俺自身が二刀流をそこまで使いこなせないからなんだ。だから、どうしても二刀流の戦闘を本格的に教えるには、今から会う人に頼るしかないんだ。戦闘のイロハを教えたりは出来るんだけどね。それに、独学っていうのは難しいだろうし。師匠づらしているけど、出来ないことの方が多くてゴメンね」

「そうなのか。いや、正直驚いたんだ。俺にとって、天之河は器用で何でも出来るエリートみたいないメージを持っていたから、天之河にも出来ないことがあるって知れただけでも、良かったと思う」

「そう言ってくれると嬉しいよ。じゃあ、先に知り合いの俺から話しかけるから、呼び込むまでは外で待っていてくれないかい？」

「つもり話もあるんだろう？もともと一人で行くつもりだったって事はさ。勿論待つき」

玉井は物分かりが良い。

一人で行かせて欲しいというのを感じ取ってくれたのだろう。

「じゃあ、先に行かせてもらおうよ」

そう言つて俺は酒場に入つていった。

そこには、長房で料理をしている、エミヤがいた。

「やあ、アーチャー。今日のオススメを一つ頼む。そして、取引をしないか。良い情報を仕入れているんだけど、俺の願いを聞いてくれるのなら、情報をあげても良い」

「話は聞こえていた。貴様の同級生を鍛えて欲しいという事だろうか？悪いが、情報を聞かない限りは、返答できない。分かつてはいるだろうが、情報を私は集めなければいけない。敵の居場所に戦力をな。そ

もそも、サーヴァントとはいえ、英霊を何騎も呼び寄せる事例など、異常だ」

「まあ、貴方の言い分も理解できるよ」

「それに、貴様もだ」

「うん？」

「誰一人としても犠牲を出したくないというのなら、あの盾の宝具で閉じ込めれば良いものを。それに、貴様が戦闘においてお節介をかけるとはな」

エミヤの正論に苦笑いを浮かべる。

「正直、閉じ込めようとは思った。ただ、あの人数を一気に閉じ込められる程の魔力が足りなかった。何よりも、キャスターのクラスではなかったのが、理由の中でも大きい。それに、貴方が死んでから、考えも変わったのさ。愛のために戦う人間は止められないものだ。貴方も分かるんじゃないか？」

その言葉に、エミヤは考えるそぶりを見せて、目蓋を閉じる。

そして、目を開くと同時に本題に切り掛かっていく。

「まあ良い。この手の話は終わらん。本題に移るぞ」

「そうだな。うん。まず初めに、神エヒトは生きている」

「根拠は？」

「まあ、二つ目の情報と被るんだけど、地上じゃない何処かで、別側面の俺が召喚されたのを感じ取った。エミヤも気付いていると思うけど、アレス由来の神性が今の俺から消滅しているのは分かるだろう？」

「ああ。存在が薄くなっているのは感じている。そのマスターが神エヒトという訳か。恐らく一瞬魔力が流れ込んだりして、分かったってところか」

「理解が早くて助かる。それで受けてもらえるかな」

「頼み込みに来たのが貴様でなければ絶対に引き受けただろう。それぐらいの情報だった。敵が分かったという事、地上にいない事。これだけで相当な成果だ。世界を歩かなくて済むからな。そう頼み込み



に來たのが貴様でなければな」

エミヤが半ば呆れながら話す。

「どうしてだ？時計塔時代の借りを返そうとは思わないのか？」

「私の中ではアレは黒歴史で無かったことだ。故にノーカンだ」

「大人気ない」

「うるさい。あんな出来事なぞ思い出したくもない」

大人気ない。

余りに大人気ない。

「じゃあ、なぜ？」

「貴様が敵と分かり切っているからだ」

周りの温度が下がる。

互いの微少な殺気がぶつかり合う。

「貴様は守護者として呼ばれる時と同じように晩年の完成された戦士として召喚されている。アレス由来の神性も当然含まれていた。別側面が呼ばれようと、揺らぐはずがないのだ。そこから分かる事は、何らかの方法で呼ばれた神エヒト側の貴様が不完全であり、そこに貴様の靈器からアレスの神性を取り出して複合させたりしたのだろう。貴様には外付けとはいえ、オーディン由来の神性を持ち、先祖返りの血によって現代に生きた人間とは思えないほどの神性を持っている。神代の英雄たちに勝てはしないだろうが、今の状態でも一方的に負けることもあるまい。まあ、そんなところか。曖昧な時間軸にある座も含めれば、私と貴様は近しくそれでいて、長い付き合いだ。分からないはずがないだろう。貴様をこの場で仕留めたいぐらいだ」

「まあ、流石にバレているか。俺としてはこの前の決着をここでつけても構わないが」

「ぬかせ。一度もこの世界に来て死んでいないのなら、貴様にはワルキューレの心臓による転生があるだろう。私の負けは決まっているも同然。仮に違ったとしてもこの場所では貴様の方が有利な間合いで、殺し合う気もない。今の貴様には何をしても、評価が上がるだけだろうしな。まあ、貴様から人間性を消失させることも考えはしていたのだがな。まあ、なにより買ったばかりの私の城を壊されるなど溜

買ったものではない」

エミヤは真面目な顔で重大なことを暴露する。

「これ買ったの!?!この世界に俺たちは永住なんてできないのに、買ったの!?!エミヤ。お前、赤い悪魔のこと馬鹿にできないぞ」

「私は中立とはいえ、世界のルールは基本的に従う。それに、アイツらにとつての隠れ家というやつだよ」

「うわあ。良い大人共が少年ゴツコしてる」

エミヤは俺の一言に少し傷ついたのか、ソツポを向いてため息を溢して、話し出す。

「まあ良い。件の少年に会わせたまえ。それから決める」

「分かった。貴方もきつと気にいるだろうよ。折れても自分で這い上がるって決められる男の子だから」

「ふっ。その評価だけで私が動くと思うなよ。同族嫌悪をしだすかもしれないぞ。それと面接のようなものだ。貴様は来るな」

扉から出る。

「どうだった? 話は聞こえなかったけど」

「うん。昨日みたいに声が漏れないようにしていたからね。とりあえず、会って見るそうだよ」

「分かった」

玉井くんは深呼吸をしている。

緊張しているのだろう。

「緊張しているとおもうけど、大丈夫だよ。皮肉屋な男だけど、良い人だから。ただ、年上だから敬語は心掛けてね」

「分かった」

そう言って、玉井は扉を開いて行った。

待とうと思った矢先「ああ! ゆうしやさまだー」

幼い少年少女の声が出た。

少し時間が経った頃、扉が開いた。

出てきた玉井はギョツとした顔をしている。

俺の目の前には長蛇の列が出来ている。

男女比は女性の方が多いが、男性もそれなりにはいる。

俺は笑顔を振りまきながら、握手をして感謝の言葉を告げる機械になり、インクと紙を持っていている人にはサインを書く。

「皆さんすいません。連れの者が来ましたので、また今度に」

そう言つて、長蛇の列を無理矢理鎮めようとするも、その歓声に意味をなさなかった。

「玉井くん。ちよつとゴメン」

「おまつ

何かを言い切る前に抱えて一つ飛びする。

周りの住人に被害は出ていないだろう。

エミヤの店の景観が台無しになっているだろうが、気にしない方向にする。

弁償代は今度払うとしよう。

「それで、どうだった？」

「入れ違いになるように、一週間後にエミヤさんからテストがある。…ってどうしたんだよ、天之河」

「いや、エミヤって名乗ったんだなと思っただけだよ」

「自分の名前だろ。普通のことじゃないのか？」

「うん。そうだね」

思えば、聖杯戦争で無い以上、真名を隠す必要は然程無いのだろう。

「じゃあ、さつそく城に帰りしだい、訓練だな」

「それは良いけど、頼む。降ろしてくれ〜！」

こうして、玉井の訓練の日々が始まった。

## 模擬戦

玉井の訓練は駆け足になっていた。

長い時間をかけて作っていく、体という資本を短期間で仕上げる方法は存在しない。

それこそ、打ち出の小槌の様な宝具でもなければ、不可能だろう。しかし、戦闘技術は別だ。

身体を効率よく動かす方法。攻撃の防ぎ方。攻撃をするタイミング。

こう言った物は直ぐに教えることができ、反復練習が可能だ。

戦闘の駆け引きは戦いながら覚えるしかないし、今はその段階に玉井は踏み込めていない。

玉井だけではないが、元々対人技能が必要な競技をやってこなかった生徒は、恵まれたステータスの暴力で無理矢理戦っていた。

戦うことが出来てしまった。

迷宮の敵もある程度の相手には、それで通用していたからだ。

ステータスに支配されている世界だからこそできる事だろう。

極論を言えば、クラスメイトのステータスが千を越えれば、ベヒモスを数の暴力で倒せるだろう。

理性のない獣ならば、それこそ素直に強くなって殴るだけで倒せてしまう世界なのだ。

だからこそ、どれだけ強くなっても、騎士たちに多くの生徒は勝てないのだ。

自分自身の型を造れていない。

そんな新兵同然な人間に負ける騎士など、そうはいないだろう。

合図と共に始まる試合ならば尚更だ。

でも、それでいいのだ。

最初から勝つことなんて誰だつてできない。

そこから学んで強くなっていくのだから。

だから、今ボコボコにされて倒れている玉井もしょうがない事だ。

「話は分かっているし、納得もしているぞ。天之河先生。でも、ここま

でボコボコにされるのは理不尽じゃありませんか?」

「ゴメン玉井くん。でも、体力をつけるためには持久走と素振りが今の所は効率が良いし、戦い方の基礎も俺との模擬戦で反省会を交えながらの方が分かりやすいだろ?」

「確かにどこがダメなのかは分かりやすいぜ?でもよ、自分で満点と思った攻撃すら、普通に対処されると結構へこむんだけど」

「ああ、失敗したら次の一手を考える癖を身につけて欲しいんだけど、流石にまだ早すぎたみたいだね。俺はそうやって覚えていったから。それに、痛みには慣れておく必要がある。三日前はしょっちゅう気絶するは吐くわで散々だったと思うけど、もう気絶はしなくなったでしょ?」

「耐性は異常に伸びたさ。でも、ステータスって怖いって実感できたよ。俺強くなっている気はしないから。数値だけが上がっているみたいでさ。天之河先生の軽い一撃なら気絶しなくなっているから、数字は正しいということも本当に理解した。だからこそ、怖い」

「筋肉とかついてないのに、正しいって決められている感じでき。今、この加護が消えてしまったらって思うとゾツとするよ。トータスに呼び出された当日よりは筋肉は付いているのは分かっているさ。ほれ見ろ。ちよんと山ができてるだろ」

そう言つて、玉井は腕を曲げて筋肉を強調して見せてくる。

たしかに、地球にいたころの玉井よりは付いているだろう。

「でもよ、ステータス抜きで剣を振れるかって言われると、絶対無理だ。あと、やっぱりこのネットワークスって本物だな。ステータスが今までより伸びが良い。でも、ずるくないか?これ」

「その気持ち忘れずに、鍛えていけばいいと思うよ。言っではなんだけど、武道初めて一週間足らずの人間に、戦場のプロとも言える軍人が、我々では歯が立たない敵が現れたから共に戦ってくれて皆にお願いしているんだ。このぐらいのアドバンテージは必要だよ。思い出してみよ。初日の俺はメルドさんの三分の一の強さだったんだよ。皆はもつと弱かったでしょ?だから、今はまだそれでいいんだ

よ。自分自身で肩を並べていると思ったときに、そのネクレスを外せば良い」

悪い方向に考え出す玉井にストップをかける。

今の優先順位的には、その考えをするのは後回しだ。

だから、先に話を切りだす。

「それで、そろそろ他の人とも模擬戦をするべきと思うんだ。訓練の成果がどのぐらい実っているかを知りたいだろう？ 騎士を相手に戦ってみるといい。でも、くれぐれも」

「ああ、わかっている。守りを徹底だろ。しかし、本当に驚いた。二刀流って守りの方が強いんだな」

「今の状態だと、アニメとか漫画みたいな動きは出来ない事はないけど、普通は厳しいぞ。それに、今ならあの動きは無駄が多かったのもわかるだろ？」

「ごもつともです」

「でも、悪いわけじゃない。これから心がける、守りながらカウンターを入れて崩す戦い方と、効率よく剣を振る力加減を覚えていけば、攻めに転ずる戦い方を組み込むのは、相手の意標を突けるだろう。手数が多いのは厄介だからね。ただ使うのなら、攻めに移ったときも、直ぐに守りには入れるように心がけることだ。玉井くんは、守るために強くなるんだろ？」

「ああ」

「まあ、その辺は、テストに合格してから、エミヤに教えてもらおうとい  
いよ」

「わかった」

「じゃあ、最初の相手だけど… 頑張れ」

「どういうことだよー」

玉井がそう言っていると、一人の騎士が現れる。

「初めまして、玉井淳史君。私はガリア。ニアの父だ。ニアから話は聞いているよ。随分とニアが世話になったね」

玉井が気にしている女性ニアの父、ガリア・カムラン子爵だ。

騎士団に所属する人物の中でも、五本指に入る実力者と、俺は見て

いる。

騎士団長の留守を預かれる実力に地位も持っている。

「いっいえ、こっ此方こそ迷惑を」

「いや、ニアにも良い薬になっただろう。良くも悪くも王国から外に出たことが無くてな。そう言う意味では、君の本音はニアの成長に繋がるだろう。だが、それとは別に…」

「なあ、天之河先生。俺は死ぬのか？」

「諦めるのは勝手だけど、夢を叶えられないよ？」

「くそっ！やってやるよ！ガリアさん。よろしくお願いしますー！」

そんな人物に、今の玉井では勝つのは難しいだろう。

鼻屑目で見て、十回戦って一回の勝利をもぎ取れるかと言ったところだろう。

だが、数日のうちに、安定して三割ぐらいの勝率に持っていけるだろう。

ここ数日の生活を見てハッキリと分かっている。

ステータスが数倍の差があるのだから、この世界の人間の数倍の時間を訓練に費やす。

玉井は本当に実行している。

余りにも無茶をしたら止めるつもりだったが、しつかりと食事を取り、湯を浴びた後は部屋で使えそうな知識を溜め込みだし、消灯と同時に眠る。

そして、早朝から一走りする。

ルーティンを組み込んでおり、自身のアドバンテージをしつかりと活用できている。

案外、オルクス大迷宮から帰ってきた時には、勝ち越しているかもしれないな。

「これより、ガリア子爵と玉井淳史戦士の模擬戦を行う。一本勝負、始め！」

俺の合図と共に試合が始まる。

玉井の方が、ガリア子爵よりステータスは幾分かは上だろうが、近接戦に限れば不要なステータスも考慮すれば互角と見られる。

しかし、それで負けるのは、経験の差がありすぎるのが原因だ。だからここから、学んで欲しい。

勝つことの難しさと、負けから来る焦りを。

「私の勝ちだな」

「このままでは、終われません！もう一本お願いします！」

そして、勝つためには変化しなければいけないことも。

崩しのための小技を覚えるにしても、自身の力が相手を凌駕するまで高めるにしても。

なにより、心の内に潜めている、転移者としての力の大きさに対する罪の認識を破り捨てて欲しい。

現地の住民と深く関わった事による呪いでもあるだろう。

申し訳なさが彼の選択を無意識に閉ざしている。

自身の身を守らなければならぬのに、その認識は今だけは足枷になる。

時間が経ち、日が暮れだした所で止めに入る。

「そこまで！ガリア子爵。本日はありがとうございます」

「いや。私も良い稽古になったよ。だが、彼は納得してないようだが」

「天の河。俺はまだ……戦える。止めないでくれ」

「玉井くん。今日は無理だ。これ以上はガリア子爵にも迷惑だし、百回も戦って、一回も勝っていない。それに、途中から同じような負けをしないために、攻めに転じていたけど、余りにもがむしやら過ぎていた。今のままじゃ時間の無駄だ。反省会をするよ。それに、明日以降も玉井くんは騎士を相手に模擬戦をしていくんだからね。今日と全く同じ戦い方だと、周りで見学していた騎士には勝てないよ。それに、ガリア子爵。三日後にまた、試合を行って頂けるのですよね？」

「ああ。玉井くん。私は勝ち逃げしない。まあ、業務があるからいつでもとは言えないが、幾らでも胸を貸すつもりだ」

「ガリアさん。ありがとうございます」

反省会といえども、玉井の悪い点しか指摘はしない。



ガリア子爵の攻略の仕方と一緒に考える所まで手を出すわけには行かない。

そこまでするのは、玉井のためにもならない。

俺の訓練は相当な駆け足で進めている自覚はある。

着いてこれなくても無理は無い。

だが、この訓練を乗り越えられなければ、エミヤの試練も突破することは出来ないだろう。

ネックレスも馴染んできた頃だろうし、そろそろ夢を見るだろう。

誘惑に惑わされずに、進むことを願う。

## 神々の試練

夢の世界で、俺はローブを羽織りしわくちなやな老人になっている。この世のあらゆる知恵を身に付けた賢者としての面を強調した姿。夢の世界だから出来る芸当だ。

意識自体も天之河光輝だけでなく、オーデイン大神の面も出てきている。それを無理矢理押し止めている。

そうでもしなければ、条件が厳しくなると言うより、高確率で死ぬからだ。

夢を見ている人間が。

玉井淳史

夢の世界は、何気ない日常の繰り返し。

今、地球からトータスに送られた人間なら誰もが見ている夢だ。帰りたいという願いからこの夢を見ている。

それは悪いことではないし、被害者である彼等には当然の権利でもある。

だが、玉井淳史は違う。

彼は、誓ってしまったのだ。

状況に流されて、リーダーに流されて戦う事を選んだのではない。今、前線で戦うメンバーの多くは場違いとも取れるレベルの差がある相手に、危機感を覚えただろうし、死ぬ覚悟もあっただろう。

だが、彼等はなまじ優秀な故に知性の持たぬ獣の攻撃に傷を負ったことがない。

互いにサポートし合っているとは言え、傷を負っていない。流れる血の生暖かさを知らない。

故に、ベヒモスとの戦いでも心が折れず、強くなって攻撃を防げて、躲せる、庇い合える。

絶対的な死に対する当事者としての感覚が足りていない。

そうなるように、俺自身で誘導しているとはいえ、死に甘いのだ。だが、他の者はそうではない。

他のメンバーは傷を負っていた。



士を殴りつける。

女性を逃がした後の玉井は攻勢に出た。

失うことの恐ろしさと、敵を倒せた事による自身の強さの実感。

何よりも、現状を好転させられる希望を見出していた。

腐れた死体を切り裂き、骸骨は力任せに剣を振るって砕いていく。

そこに、魔猪が現れる。

ある程度のルーンを食べて成長している。

神代の強力な力を持つ人間……謂わば英雄の雛がある程度の力を

出せば倒せる程度にはなっている。

大分弱い個体を送ったのだろう。

だが、それでも玉井の恐怖したベヒモスより強い。

どれ程弱かろうが、上位世界と定められた地球。

その神代の頃の存在だ。

戦車でも使わなければ倒せる相手ではないだろう。

自身を雄叫びで奮わせて殴りかかるも、魔猪の咆哮であっさりと吹

き飛ばされる。

玉井は突進を寸で躲すも、魔猪が自身の頭をハンマーのように横

に振るう一撃を躲せず防御するも、腕を折られて吹き飛ばされる。

咆哮のときとは違い、建物をつきぬける。

ここまでか。

例え、神々に気に入られようと、本人の現状の力が向上するわけで

はない。

あの一撃をまともに食らえば、気絶もしているだろう。

逃げずに戦う選択を選んだ時点で、神々もまたそれ以上は求めてい

ないだろう。

そう思った瞬間だった。

玉井淳史  
一人の戦士が立ち上がる。

闘志を失っていない。

それどころか、敵を確実に仕留める目を持っていた。

神はこれを見抜いていたのだろうか。

玉井淳史は俺の想像を遙かに超える『強者』だった。

降りかかる嘘のような現実に挫折し、自身の放った言葉に後悔した。

そんな自分の過ちを清算して、やり直したいと願った言葉に嘘はなかった。

だが、ここまで命をかけているとは思っていなかった。

玉井の覚悟は理解できた。

それを嬉しく思う反面、命を投げ捨てていく様は虚しい。

だから、玉井淳史という少年が死なないように、手を貸そうと自然に思えた。

試練は玉井自身の力で乗り越えなければいけない。

だが、この試練は玉井には不応だ。

玉井はそのステージに立つべきレベルではない。

神話にも不応な試練はある。

だが、英雄になる者はそれを乗り越えてきた。

神や妖精といった手助けを得て。

手を貸して貰えることもまた、本人の資質だ。

だから、これは違反ではない。

黒と白の夫婦剣を持つ。

見守っていた高層ビルの屋上から飛び出し、魔猪の牙を切り飛ばす。

玉井と向き合い、声をかける。

「ずっと見ていた。助けるつもりはなかったんだけど、玉井が自分の手で決着を付けようとしていたから、力を貸す気になってな。まあ、玉井からすれば、今更って思うかもだけど、俺にも事情があつてね」  
玉井は息を吐くだけだ。

よく見ると、喉が潰されている。

怪我を先ず治すために、治療の魔術で傷を治す。

「深くは聞かない。天之河は意味のないことはしないって俺は信じているから。でも、愚痴ぐらいは言わせろ。もう少し早く来てもよかったら」

「ごめん。でも、手を貸すっていったら。まあ、あのイノシシは玉井

に殺して貰うけど」

「どうやってだよ。アレ絶対にベヒモスより強いだろう？」

「これを使いな」

そう言つて夫婦剣を投げ渡す。

玉井は「危なっ」と言いつつその剣を受け取り握る。

「それは、干将・莫耶という。まあ、俺にとつてはもう要らなくなつてしまつた武器だ。それは、退魔の剣で怪物に対して、凄く強く斬りやすい剣と思つてくれて構わない。一言『神翼撃』と言えば凄まじい一撃を放てるが、まあ、今は使えないだろう」

何かを言い出す前に、玉井を掴み魔猪へ向かつて投げ飛ばす。

掴みながら、強化の魔術を付与させる。

十分は持つだろうし、その間には勝てる確信がある。

「勝つてこい！玉井。この試練を乗り越えろ」

戦闘を始めた玉井は最初の方は、動くスピードの速さに慣れず、幾分かの攻撃を受けていたが、動きになれ出すと反撃に移つた。

四肢から攻撃し、一本ずつ切り落とす。

動けなくなつたところを、電柱を蹴り、自身を弾丸のように弾き飛ばす。

尻の部分から頭に向けて突き進み、抉り殺した。

ここに魔猪狩りは終わった。

「お疲れのところ、悪いけど、もう一つ問題があつてね」

「はあ、はあ。問題？」

「今から、玉井が目覚めるても、三日は時間が過ぎているんだ」

「へっ」

「まあ、寧ろ三日で済んだつて言えば良いかな？送り出したときに言つたように、これは試練なんだ。乗り越えたことで、玉井。君は次のステージへと上がれる。そして、この経験を生身と結び合わせるのに時間があるんだ。まあ、言い訳は此方しておくから。安心していてくれ」

そう言つて、俺と玉井は透けていくも、俺の方が透ける速度は速い。俺の方が起きるのは早いとはいえ、目覚めに一日二日はかかるだろう。

それに、玉井もこの試練を乗り越えたことで、ある程度の加護は受けている。

俺の修行はもう必要ないだろう。

前線にいる皆の下へ合流して問題ないだろう。

それに、凄く嫌な予感がする。

誰も死んでいないことを願うことしか今は出来ない。

## 番外編

### 番外 バレンタイン

これは、未来のお話。

まだまだ、先のお話。

でも、やがて訪れる話だ。

君たちに特別に見せてあげよう。

「主様、主様」

瞑想をしているときに、ノイントに呼ばれて意識を戻す。

私の名前はエヒトルジュエ。

このトータスを神として統治している。

ノイントは、私の大切な部下の一人だ。

「どうした、ノイント。私を起こすということは、何か問題でも起きたか？」

ノイントは今いる部下の中で、一番の古株だ。

トータスに来る前、この神域で私が作ったオリジナルの一体だ。

意味のない事はしない奴だ。

「いえ、問題は起こってはいません。ですが、お伝えしたいことがあります」

「なんだ。申してみよ」

「本日はバレンタインデーなる物のようです」

「バレンタイン？それはどういったものだ？」

「下界にて流行っているようですが、元々は相手にチョコレートを手土産に好意を伝える日のようです。今では少し風習が変わり、好意だけで無く、日頃の感謝や友情の育みにも活用されているそうです」

「それが？」

「実は、異世界の勇者達の監視をしている者が伝えてきましたが、何でも異世界の地球にもなんとバレンタインデーは存在するそうです」



「はあ」

「ですので、お師匠様にもチョコレートを送るべきでは無いでしょうか？」

「どうしてかしら」

「主様も私もお師匠様には世話になりっぱなしです」

「私と光輝は主従関係よ。私の世話をするのは当然よ」

「私は戦闘型ですので料理は分かりません。それに、料理担当には、お師匠様直々に世話になっっている私は嫉妬されて手伝って貰えません。そこで、提案があります」

「だから、作らないし！手伝わないわよ！」

「…所で主様。一度でもお師匠様に褒美を与えましたか？」

「えっと」

「ありませんよね。サーヴァントとマスターという関係に甘えて、本来の主従関係未満のやり取りをしているのは見え見えであります。信頼した相棒だから等のような言い訳もおやめ下さい」

「ノイント。しばらく見えない間に随分人間らしくなったのね」

「私が、人間？とにかく、一度ぐらいは感謝を伝えるべきです。それとも、創世神にしてこのトータス最高の神がまさか、料理が出来ないなどと言うのでしょうか？思えば、お嬢様はいつも周りには——」

「本当に人間らしくなったわね、ノイント。良いでしょう。この私に不可能なことはないと証明して見せます！下界の人間に出来ることが、出来ないわけ有るわけ無いわ！」

私のプライドをかけた戦いが、ノイントと共に幕を開けた。

普段の私なら、料理係のオリジナルに話を聞きに行くだろう。

しかし、ノイントと彼女の仲はこのバレンタインに限れば最悪の状態だ。

ノイントに協力している私もツーンとした対応を取ってくるに違いない。

何より、光輝が来て私が変わ戻っっているように、ノイントのようなオリジナルは表情豊かになっていつている。

そんな人間味のある状態のオリジナルに話を聞きに行ったりでもしたら…

『やつぱり、箱入り娘のお嬢様だったエヒトルジュエ様は料理出来ないんですね』

と煽ってくるに違いないわ。

私はあの子達の前では完璧で無ければいけないのだから！

それに、手作りのチョコを光輝に渡したら、どんな反応を見せるかしら。

私が料理出来ることに驚くかしら。

笑ってくれるかしら。

そして、あわよくば私のことをエヒトお母さんなんて…

だ、駄目、駄目よ。

いくらもう私に子供が出来ないからって、光輝を息子にするだなんて。

「あの、主様。そろそろその瞑想○を辞めて頂けませんか」

「うっ、五月蠅いわね！貴女たちもこれが出来るようになったら、四六時中物思いにふけるわよ！」

兎に角、まずはチョコを作る必要があるわ。

とびつきりに美味しいチョコを作ってみせるわ！

当代最強と呼ばれた魔女の実力を見せつけてあげる！

その頃、下界・トータス

「やあー！」

俺、天之河光輝は現在リリーの修行に付き合っている。

雫や香織と話している内に、護られているだけの自分を卒業したい

と俺に申し出て、修行を見て欲しいとお願いされた。

自分の身を自分で守れるようになるのは良いことだ。

だが、王族には個の力よりも、群をまとめ上げる磨く方が良いと伝えたものの、リリーの経歴を見れば才女と呼ばれるのに相応しく、一国を任せられるラインのカリスマはあるだろう。

更に、王族として命じられれば、断りようも無かった。

『最初に言っておくけど、リリーはとても弱い。優しい指導というものをすべきだろう。でも、リリーが手にしたい強さはそれでは手に入らない。リリーが手に入れるべきは死なない力。生き残る術だ。俺はそれしか教えることが出来ない。王族として表向きに必要な技は、他の近衛の人から教えて貰って。あと、俺は厳しいですよ』

『構いません。私は戦えるようになりたいんです』

『王族が剣を持つのは薦めたくは無いんだけどね。じゃあ、早速今日から始めるよ。まずは体を作る所からだね。手始めに王国は、流石に無理か。城下町を二周ぐらいしようか』

そうしてリリーの修行が始まった。

今は徒手空拳を教えている。

流石にスパarringはまださせられない。

でも、筋は良い。

王族にさえ生まれなければ、優れた戦士になれてただろう。

それに、一度彼女のレイピア捌きを遠目から見ていたが、惜しいと本気で思った。

だからこそ、彼女の申し出を強く断ることは無かった。

リリーはその分野における十年に一人の天才や各世代に生まれる偉才には劣るだろうが、毎年一人はいる上手い奴にはなれるだろう。

少しの才能と本人の突き詰めていく資質が合わさり、俺にとっては理想的な秀才とも言える。

正直、ランデル殿下を憐れむ位だ。

ランデル殿下も凡才ではなく、同年代で見れば非凡の部類には入るのだが。

「光輝！どうですか、今の突きは！自分でも中々な出来だと思うので

すが！」

「うん。正直もう少し時間が掛かるかなと思っていたよ。じゃあ、明日からは模擬戦を試してみようか」

「はい！」

「じゃあ、今日はこれまでだね。ゆっくり休んでね。じゃあ——」

「光輝、待って下さい！」

「うん？なんだい」

「その、これを受け取って欲しいのです」

リリイが紙袋を渡してくる。

「本日はバレンタインという、トータスで流行の祝い事で…えっと、手作りです。よかったら食べて下さい。こんな事、婚約者がいる身でやって良いかは疑問ですけど、まああちらも妻や側室は沢山いますし。私も良いですよね」

「うん。そうだね。お互い様だ。大切に食べるよ。何かお返ししないとな」

「二月後のホワイトデーで構いませんよ！お返しは」

「そうか。ゴメンね。うん。とびっきりの物を用意するよ。君の思いにしっかりと答えるよ」

紙袋のハート模様や、手触りから分かるチョコの型。

俺の思い違いで無ければ、まあ本命チョコだろう。

しかし、リリイには申し訳ないな。

その場でお返しをしたかったけど。

この世界にもバレンタインがあるのか。

それを気にする余裕はなかったな。

クラスの皆は知ってただろうか。

廊下を歩いていると、チョコの匂いが辺りからする。

調理場を覗くと、チョコ作りに励む女子の姿が。

ああ、知らなかったのか。

今日の晚餐にはデザートにチョコが出るのは確定したな。

胸やけをする前に、リリイのチョコを味わおう。

その日、男子は女子からの手作りチョコに歓喜の涙を流し、食べても食べても終わりの見えないチョコ群に胸やけと少しの後悔と一粒の涙を流し、裏切り者に怒号と悲鳴を浴びせて男泣きをする。

そして、俺は神域に招待された。

「天之河様。ようこそお越し下さいました。つきましては、我々一同より、このチョコを」

凄い。

既製品そっくりのチョコだ。

ここまでそっくりなのは、流石としか言い様がない。

それでいて、妙に光っているのは、此処で作ったからだろう。

「このような形になったのは、深い事情があります。が、簡単に言いますと、主やノイントを苦しめておきながら、自分たちだけというのは厚かましいと思いましたが、このような形に致しました。大きさも一口サイズの物に。確か『ちろるちよこ』なる物にしました。味も様々ですので楽しんで下さい」

「ありがとうございます。返礼なんだけど、もう一人の方に全て伝えているから、後日貰ってくれないかな?」

「了承しました。ノイントの方から行って頂けると、主は助かります」

「じゃあ、先にノイントに会いに行ってくるよ」

そうして、ノイントの元へ先ずは向かった。

「あつ、お師匠様。こちらを受け取って下さい」

「バラ、かな?」

「トータスでは異性に想いを伝える際に送られる花です。何度か送られたことがあります。それから調べて、今の私が貴方に送りたいと思いました。お師匠様。許して下さい。私は貴方のことを」

ホワイトチョコで作られたバラ。

それに込められた意味。

トータスでの意味は分からない。

それでも、彼女の思いに相応しいのなら…

「ノイント。それ以上先を話してはいけない。君の立場や、エヒトルジュエや俺のことも関係ない。君の種族もそうだ。ノイント、人を好きになるのに、そういった物は関係ない。関係ないんだよ。完璧な物など存在しないのだから。生きて学び続けている以上、君のその想いは誰かから赦しを貰える物ではない。君の内から生まれた物だからその結果を受け入れるべきだ。それはバグでも何でも無い。イレギュラーでも無い。君が学習したその結果をどうか、否定しないでくれ」

「私は女——みたいです。これが昔あの子が教えてくれた恋する乙女というものですか。返礼の品はいりません。ただ、どうか私を抱きしめてくれませんか。今はそれだけで…」

ノイントを優しく抱きしめる

「ああ、私は確かに、私だけの幸せを確かに見つけられました。この私の高鳴る鼓動に、安らぎを覚えているのですから。同型機にはきつとバグと思われれます。お師匠様が言ってくれた、特別という言葉が分かった気がします。貴方の弟子でよかった。どうか、直ぐに主様の元へ行かれて下さい。このままだったら、私もう二度と戦えなくなりそうですから」

「ノイント。じゃあ、目を閉じていてくれ」

「はい」

目を閉じたノイントの髪をそつと纏める。

概念礼装のリボンで髪を纏める。

装飾は一切無い。

だからこそ、ノイントによく似合う。

純粹な彼女に。

「後で、鏡を覗いてごらん。師匠からの卒業祝いだ」

そう伝えてエヒトルジュエの所へ跳んでいく。

それが、最後に彼女とあった出来事だった。

エヒトルジュエが待っている。

彼女は生粋の貴族の娘だった。

料理をすること自体が初めてだっただろう。

指を包丁で切っては治癒魔法をかけている姿が目には浮かぶ。

そして、変に凝った物を作っているのも分かる。

プライドが邪魔をして、義理のチョコなのに最上級の物を用意する。

着いた場所には、テーブルと椅子そして、不格好なチョコケーキが置かれていた。

向かい側の椅子にエヒトルジュエは座って待っていた。

右手の椅子にはもう一人の俺がいた。

「光輝。そこに座ってくれ。既に■■■は着席しているからな」

俺は腰をかける。

「お前達への感謝も勿論している。日頃の礼として用意をしたつもりだ。だが、どうしてもな。こんな時だからこそ、私の我が儘に付き合って貰えないか」

エヒトルジュエはきつと、作っている途中に思ってしまったんだろう。

俺も、正直覚えがある。

だから、笑って許す。

「マスターの命じるままに」

「すまない。お前も私の過去を覗いたから分かるだろう。私には子供がない。そして、気づいているとは思いますが、告白する。私はお前を子供として偶像を重ねてしまっている」

「俺も過去にそういうことはあった。妻に、子供に、ミルに誰かを重ねたり、物思いにふけったりしてたさ。だから文句は無い。そういう所まで似てるとはな」

「――」

「私に一日だけ、母親をさせてくれないか。私は、子供に手料理を振る舞ったことも、誕生日を祝ったことも、楽しく会話をしたこともない。だが、どうしても、お前にチョコを作っていると、生れてこなかったはずの子供を映してしまっんだ」

「分かってている。もう、食事の時間だよ。早く食べよう、お母さん」  
「ええ、そうね」

互いにケーキを食べる。

「お母さんの手料理あんまり美味しくないね」

「酷いことを言う息子ね」

思えば、俺は今生においての家族に距離を取っていた。

素直に甘えることが出来なかった。

キュリアは母親を頑張っていた時期もあったが、俺にとっては同士で互いに支え合う夫婦みたいな感じだった。

俺は、初めて母親に甘えたのかもしれない。

母に甘えることが出来る子供になれた。

それは確かに幸せな時間だった。



## 番外 ハジメサイド

勇者・天之河光輝の活躍の裏側で、一人の男は奈落の底で冒険をしていた。

その男は、愛する者を作り、互いに背中を合わせて協力をしながら、共に戦っていた。

そして、その男はこの世界の真実を解放者と呼ばれる者から知り、己の力で世界を越える決意をした。

これは、その男、南雲ハジメの話である。

「もう、二度とライセン大迷宮には行かねえ。余りにも、ウザすぎる。あの糞ミレデイにあの場所で会うのは二度とゴメンだ」

「… 同感。あれは解放者だとかよりも、人を苛立たせる。敵」

「私も流石に懲り懲りです。なんで、あんなに人を煽るのが上手なんですかね〜？」

眼帯をした男、南雲ハジメのため息交じりの意見に、金髪の女、ユエと兎耳を持つ亜人族の少女、シアが同意する。

今いる場所は、ブルツクの町にあるマサカの宿で、その一室にいる。ハジメ達は、その一室で、本日攻略の終えたライセン大迷宮のことを、思い出していた。

「… でも、いい話も聞けたね。ハジメ」

「ああ。どうやら、この世界から故郷に帰るには、神エヒトをぶっ倒さなければいけねえみたいだしな」

ハジメにとっては、この世界の事情などどうでもよかった。

世界を超える魔法さえ見つければ、それを使ってさっさと故郷に帰るつもりだった。

しかし、存命していた解放者、ミレデイは語った。

『神エヒトは卓越した魔法使い。アレが生きている限り、君の願いは叶わない。確実に邪魔をされるだろう』

「この世界がどうなるかが関係ない。だが、俺たちの邪魔をするのなら、神であろうと敵だ」

「私も、ハジメさんの足を引つ張らないように、頑張らないと！」  
「…うん。ミレデイが言っていた。私達はもつと強くなる必要がある。迷宮攻略で手間取っているようでは駄目。もつと力を身に付けないと」

「ああ。それに、この聖杯って奴にも魔力を貯めなきゃいけない。ミレデイが言うには、本物からかなり劣化した質が悪い物らしいが、ライセン大迷宮の魔力だけでも、とんでもねえ力を宿してやがる。これが満タンになれば、神エヒトとその眷族と同時に戦っても、迷宮を全て攻略していれば、太刀打ちは出来るらしい」

そう言つて、ハジメは銀色に輝く聖杯を見つめる。

文字通り、これがハジメ達の切り札だ。

持っているだけで、体のキレが良くなっている。

今のハジメでは、複製することすら出来ない。

解放者が、伊達ではない事を物語る代物で、そんな解放者を破った、神エヒトのヤバさというのが分かる。

「それに、今日は凄く疲れたな。魔法に余り頼れない戦闘がああも苦しくなるとはな」

「…うん。強力な魔法が使えないことによる、殲滅能力の低下。魔法に頼り切っていた私には、新鮮な経験だった」

「私の方は、ユエさんと違い魔法を余り使用しませんので、普段通りに動けましたが、トラップの多さに冷や汗を流しっぱなしでした。あそこまでのトラップは見たこともありません」

「兎に角、今日は寝るとしようぜ。流星にこれからのことを、今考える余裕が無い」

「…うん。お休み、ハジメ。それにシアも」

「ユエさん、ハジメさん。おやすみなさい」

「ああ。お休み」

そうして、ハジメ達は眠りに付いた。

翌朝、朝の日差しと共に、ハジメは起きる。

カーテンが少し空いており、その隙間から光が漏れ出し、ハジメの顔を照らし、ハジメは目を覚ましたのだ。

『号外！号外！号外でくす！』

窓を開けなくても、その声が響く。

木で作られた窓を開けて、外を見渡すと、新聞と思わしき物売り  
払う人物に人が群がっている。

ハジメ自身、情報を必要としていた。

今、トータスはどういった情勢なのかを知りうる機会なのだ。

特に号外と言うことは、大きな情報が載っているのは間違いない。

ユエやシアはまだぐっすりと眠っている。

久しぶりに熟睡出来る機会なので、起こすのは忍びないとハジメは  
思い、一人でその文屋に向かう。

面倒くさがるも、騒ぎを無駄には起こしたくないので、しっかり並  
んでいると、興味深い声を拾う。

「フェアベルゲンが落ちたって本当かよ？」

「ああ。何でも樹海は半分以上は焼かれたって聞いたぜ？」

「勇者って奴は凄いな。彼がいれば、魔族討伐も夢ではないのでは  
？」

信じがたい内容だった。

（あの天之河が、フェアベルゲンを、焼き払っただけって？本当のことな  
のか？誰一人殺させないと言ったアイツが、皆を危険に晒すとは思え  
ない。だが、単独であれほどの樹海を焼き払えるわけは無い。ユエに  
すら出来ないんだ。きっと何かの間違いのはずだ。兎に角、号外を讀  
まないと）

ハジメはどこか、心のどこかで思っていた。

天之河光輝は絶対に人を殺さない。

正義感の塊で、悪を良しとしないような正義の味方のような男が、

天之河光輝だ。

そんな男はどんなことがあっても、人を殺さないと思っていた。

だが、その幻想は打ち破られる。

号外に書かれていた内容は、ヘルシャー帝国とハイリヒ王国の連合  
軍が亜人族と戦争をしたこと。

亜人族の七割弱が死亡しないしは捕虜になったこと。

勇者がフェアベルゲンの一部を焼き払ったこと。

勇者が亜人族の別部隊を単騎で攻め落としたこと。

勇者の演説の内容と、各国への同盟の強力を帝国と王国の両国が要請したこと。

そのほかにも、【勇者】天之河光輝についての内容が書かれていた。戦争のことは分からない。

だが、オルクス大迷宮を勇者達が攻略したと言われていない以上、天之河は奈落に行っていないはずだ。

つまりは、ハジメ自身よりステータスは低いだろうと考え、この新聞にある単騎での戦果やフェアベルゲン焼き払いは、印象操作の可能性が高いと勘ぐる。

天之河はクラスメイトを戦場に出したのだろうと考えた。

そして、天之河は聖教会側なのは間違いなく、俺の敵だとハジメは悟る。

ハジメは直ぐにフェアベルゲンに向かうことを決める。

情報が何処まで正確なのかを、この目で確かめるためにだ。

その為に、この新聞を部屋で眠っている二人に見せる決意をして、宿屋に戻った。

この後に、フェアベルゲンが焼かれた惨状を見て、生き残りの同族から話を聞き、一人の少女が復讐者へと変貌していく、その一歩を作ってしまう。

だが、周りの二人は同情はしても止めることはしないし、出来ない。自分たちにもその黒い闇に似た物がこびり付いているのだから。